# 考古論叢

# 神会河

# 第2集

| 草創期初頭 | 代終末期から縄文時代<br>質にかけての尖頭器文化<br>- | 順司 |
|-------|--------------------------------|----|
| ─風間 I | a 石器文化層の位置づけ―                  |    |
|       | Z免古墳と虚空蔵山古墳·····・持田 春吉・村田      | 文夫 |
| 一割竹开  | ジ木棺壙をもつ南武蔵前期古墳の史的素描―           |    |
| 中世鎌倉り | 〈鉢考······河野眞                   | 知郎 |
| -東国と  | この関連において―                      |    |
| 小田原城に | こおける戦国から近世初頭の陶磁器群の様相諏訪龍        | 順  |
| 保存情報  | 神奈川県指定史跡                       |    |
|       | 「吉井貝塚を中心とした遺跡」の整備について野内        | 秀明 |
| 資料紹介  | 鎌倉市今小路西遺跡出土の戦国土壌―括資料清水         | 菜穂 |

平成5年(1993)4月 神奈川県考古学会

誌名中の「神奈河」は、鶴岡八幡宮文書のうち、北条時宗が文永 3年(1266)5月2日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈 河」に拠るもので、これが地名神奈川の初出文書である。

#### 考古論叢 神奈河

#### 第2集

平成5年4月

| * | 日 | ケ   |
|---|---|-----|
| T |   | - 久 |

| 神奈川   | 県考  | 古学会 | <u> </u> |
|---|-----|-----|----------|
| 資料紹介 鎌倉市今小路西遺跡出土の戦国土壙一括資料 🥻                                 | 清水  | 菜穂  | 109      |
| 保存情報 神奈川県指定史跡<br>「吉井貝塚を中心とした遺跡」の整備について!                     | 野内  | 秀明  | 100      |
| 小田原城における<br>戦国から近世初頭の陶磁器群の様相                                | 諏訪間 | 順   | 80       |
| 中 世 鎌 倉 火 鉢 考   | 河野眞 | 知郎  | 54       |
| 久地伊屋之免古墳と虚空蔵山古墳 持田 春吉 • ፣<br>— 割竹形木棺壙をもつ南武蔵前期古墳の史的素描 —      | 村田  | 文夫  | 23       |
| 先土器時代終末期から縄文時代<br>草創期初頭にかけての尖頭器文化」<br>一 風間 I a 石器文化層の位置づけ — | 麻生  | 順司  | 1        |
|   |     |     |          |

# 先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけての尖頭器文化

- 風間 I a 石器文化層の位置づけ -

麻生順司

#### はじめに

近年、相模野台地を中心とする神奈川県下において先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭に属する遺跡の発見が相次いでいる。もともと相模野台地はこの台地面を解析しながら南下する中小河川沿いに数多くの先土器時代からの遺跡が調査されており、また、その堆積土壌の厚さからかなり細かな遺跡の移り変りが認められることでも知られている。このため、特に先土器時代終末期の細石刃文化や尖頭器文化から縄文時代草創期初頭の隆起線文土器文化に至る文化層が各段階に細かく設定されつつある。しかしながら当該期の段階設定においては土器の共伴の問題や石器組成のあり方、あるいは他地域の石器群との関係などに多くの矛盾や問題点が残されているものと思われる。

筆者は神奈川県津久井郡城山町に位置する風間遺跡群第1地区の調査において当該期に属する尖頭器石器群を確認し、その報告を行っている(麻生 1989)。拙論は、この石器群を中心に当該期の編年についての一考を述べてみるものである。

# 1. 風間遺跡群第1地区第I文化層(a)

風間遺跡群は、神奈川県津久井郡城山町川尻字風間5394番地他に所在し、相模野台地の北端に位置する。地勢的には城山湖付近を源とする境川の上流域に位置し、関東山地より派生し境川に向かって北東向きに張り出す舌状丘陵上にあたる。この調査は、法政大学多摩校地城山地区建設に伴う事前調査であり、本論で使用する石器群が検出された第1地区はこの丘陵部から連続して境川に面する低位段丘面上に位置し、境川との比高差は約6mである。

#### <出土層位>

本地区の基本層序は、二次堆積の可能性が高い黒色土(黒ボク土)下よりローム層が確認され、そのローム層最上部に立川ローム最上部ガラス質火山灰(UG. 約13,000~14,000年前)が検出されている。この赤褐色土の下に約40cmほどの黒色帯(B。)が確認され、色調によって二枚に細分されている。風間遺跡群第1地区第1文化層(a)(以下風間1aと呼ぶ)はこのB。上部にそのピークが確認されている。風間1aはその石器群

#### <石器組成>

風間 I a からは計161点の石器が出土している。これらの石器の器種別の内訳は、尖頭器24点、スクレイパー12点、二次加工のある剥片 5 点、使用痕のある剥片 6 点、剥片類108点、敲石 4 点、その他 2 点であった。このように本石器群は、定形石器としては尖頭器とスクレイパーの二器種が確認されたにすぎず、非常に単純な石器組成を示しているということができよう。また、石質別ではチャートが 6 割以上を占めて主体となる石質となっているが、定形石器では比較的単独母岩のものが多く見られている。

#### <尖頭器>

風間 I a の主体をなす定形石器としては24点の尖頭器があげられるが、接合資料と風間 I b との混在と考えられる尖頭器が3個体認められることから、最終個体数としては26個体の尖頭器が検出されていることになる。

これらの尖頭器はその大きさによって2群に大別され、さらにその形状等により細分されている。

#### I群-長さが10cmを超す大形の尖頭器

- a 類 左右対称の幅広木葉形を呈するもの
- b類-左右非対称で幅広の半月形に近い形状のもの
- c 類 左右対称で細身の柳葉形を呈するもの
- e類-左右対称で菱形に近い形状のもの

#### Ⅱ群-長さが10cm未満の尖頭器

- a 類 左右対称で木葉形を呈するもの
- b類-左右対称で最大幅を胴下半部に持つもの
- c類-左右対称で菱形に近い形状のもの

以上のように大きさとその形状により2群7類に細分され、各群に破損品あるいは未製品が存在する。

この分類から本尖頭器石器群の特徴として以下の点をあげることができる。まず、I 群・I 群とした大きさによる大別であるが、本尖頭器群は各尖頭器によって大きさに差が見られ、長さ 5 cm前後の小形のものから最大17.9 cmを測るものまで見られたために行なったものである。その中で10 cmを超す大形のものが26 個体中7 個体も確認されている。また、このような大きさによる差はその素材となった石質にも特徴が見られており、I 群の大形尖頭器ではホルンフェルス、安山岩などを主体とし、I 群ではチャートが主体となっているという偏りが見られている。

次に形状について見てみると、I群では同類のものが見られずそれぞれの形状のものが単独に大きな特徴を持つものとなっているが、a類の木葉形を呈するものはII群を含めると本尖頭器群で最も多く見られており、主体となる形状ということができる。また、e類の菱形の形状を持つ尖頭器は、両側縁が「く」の字状に明確な角を持ち、基部が直線状に加工されているものとしたもので、この形状の尖頭器はII群と破損品を含めて6例確認されていることから本尖頭器群の中で意識的に作出された一形態として捉えることができよう。本尖頭器群のこのような特徴は本遺跡の編年的位置づけに当たっても大きな注目点と考えることができ、栗島義明も当該期に特徴的に認められることを指摘している(栗島1991)。一方、幅広半月形状のものは本石器1点だけの出土であり、II群にも同形状の尖頭器は見られないものである。c類の細身で柳葉形を呈するものも長幅比が4.6:1と最も大形で細身のものであり、半月状を呈するものとともに本尖頭器群の中で特異な例としてあげられよう。

以上のような尖頭器の出土状態あるいはその観察から風間 I a の尖頭器の特徴をまとめると、大形の尖頭器はホルンフェルス・安山岩を主体とし、中・小形の尖頭器はチャートを主な石材として、完形あるいは完形に近い未製品として持ち込まれ、中形の木葉形と両

側縁が「く」の字状に明確な角を持ち、基部が直線状に加工された尖頭器を中心に大形の 尖頭器が数点ずつともなう尖頭器群ということができよう。

#### <スクレイパー>

風間 I a からは数少ない定形石器として尖頭器とともに12点のスクレイパーが検出されている。接合例が 2 例見られるために個体的には10点の出土となるが、これらのスクレイパーも尖頭器とともに他遺跡では見られない多くの特徴を持つものとなっている。

まずもっとも大きな特徴として両側縁に半円形の調整加工を入念に施し、平面形が分銅 状を呈する複刃の削器があげられよう。このような特徴的な抉入削器は計3点が確認され、 素材となった剥片、調整加工の位置や加工方法などの統一性から、ある規格を持った定形 的な削器の一様相として捉えることができよう。

本遺跡からはこの分銅形状のものを含めて計6点の抉入削器が確認されており、それぞれに施されたノッチの大きさや形状から丸い棒状のものを加工するために用いられたものと推測される。また、これらの出土状態を第8図で見てみると、本遺跡のもう一つの定形石器である尖頭器との関連が強くうかがわれ、特に分銅形状の削器と大形尖頭器との間には有機的な結びつきが認められる。

一方、抉入削器以外のものとしては典型的な凸刃掻器の存在もあげられる。幅広の横長 剥片を素材とし、その打面を取り去りながら長軸の両側縁に丁寧な調整剥離が施されたも ので、刃部は下端で半円状につながっているものである。

# 2. 相模野台地の様相

前章までに風間Iaの石器群の特徴について報告書に記載できなかった部分を含めて細かな観察を行ってきたが、これらを要約すると以下のようにまとめることができよう。

遺物の出土層位はUG下のハードローム層にすべて包含されており、定形石器としては 尖頭器とスクレイパーの単純組成である。尖頭器は小形から大形のものが見られ、それぞ れが平均して共伴している状況がうかがわれる。尖頭器の形状的な特徴としては木葉形あ るいは柳葉形の尖頭器を主体として両側縁が「く」の字状の角を持ち、基部が直線状をな す尖頭器が安定して認められていることがあげられる。これらの尖頭器に有機的な関連を 持つスクレイパーは分銅形状を呈するものを最大の特徴としたノッチを持つ抉入削器群の 安定した出土等があげられよう。

それでは次に、このような風間 I a の石器群の特徴をもとに風間遺跡が立地している相模野台地の当該期の遺跡をいくつかあげて対比してみることにしよう。

相模野台地は、近年先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけての尖頭器石器群が相次いで発見されていることで注目されている。風間 I a に関連する遺跡としては寺

尾遺跡第 I 文化層(白石 1980,以下寺尾 I と呼ぶ),勝坂遺跡 L₁S 上部文化層(青木 1990,以下勝坂),長堀北遺跡第 II 文化層(小池 1991,以下長堀北 II),月見野遺跡群上野第 1 地点第 II 文化層(相田 1986,以下上野 II),相模野第149遺跡 L₁S 上部文化層(鈴木 1989,以下相模野149)等が代表としてあげられよう。

まず、寺尾Iから見てみると、寺尾Iの主な石器組成としては尖頭器、石斧、掻器、削器、舟底形石器、細石刃等があげられる。尖頭器は小形から大形のものまで見られるが、大形のものは細長い柳葉形を呈するものが多く、風間Iaのような大形で幅広の尖頭器は見られない。しかし基部の形状を見ると風間Iaと同様に直線状に調整加工を施しているものも観察される。石斧はいわゆる神子柴・長者久保系の打製・磨製石斧である。掻・削器では掻器に風間Iaに類似した先刃掻器が見られているが、削器では風間Iaに特徴的であった抉入削器は見られていない。舟底形石器については報告者の白石浩之は同一文化層から出土している細石刃とは石質が異なること、関東地方では一般的でないことから舟底形細石刃石核ではないとしている(白石 1990)。一方、鈴木次郎は長軸方向の両端に見られる敲打痕から敲石とする(鈴木 1989)等の解釈が見られているが、近年、相模野台地の当該期の石器群には上野II、勝坂、長堀北IIなどで明確な舟底形細石刃石核が確認されてきていることから、ここでは舟底形細石刃石核のブランクとして捉えておきたい。

この寺尾Iの石器群の内容を見てみると尖頭器の主体性や掻器などに風間Iaと同様の傾向が見受けられるが、尖頭器に大形で幅広のものが認められないことや石斧・細石刃石核の存在というように前段階の様相も見受けられることなどから、風間Iaよりもやや古い様相として考えられる。

このような寺尾Iと同様な石器組成を持つ遺跡としては勝坂、長堀北II、上野IIが含まれよう。勝坂では当該期の住居址状遺構に伴って尖頭器、削器、細石刃石核、細石刃等が出土しており、大形・中形のやや細身の尖頭器を主体として舟底形細石刃石核が伴うという石器組成が見られていることから、石斧類の出土は見られなかったものの、寺尾Iにほぼ並行する時期に位置づけられよう。報告者の青木豊・内川隆志は勝坂の石器組成に有舌尖頭器が認められるものとしているが、この石器は風間Iaで認められた両側縁が「く」の字状を呈し基部を直線状に調整する尖頭器として捉えられるもので、勝坂には有舌尖頭器は組成しないものと考えられる。逆にその点に注目すればこの特徴は風間Iaに連続して行く様相として注意されよう。上野IIでは大形から小形の尖頭器を主体として掻器、削器、石斧、舟底形細石刃石核が認められている。尖頭器は全体にやや細身で中形の尖頭器を中心に小形と大形の尖頭器が伴うという特徴が認められ、他器種を含めて寺尾Iとよく似た石器組成と捉えられる。長堀北IIの尖頭器は全体的にやや幅広の様相が認められ、風間Iaとの類似性も指摘できるが、ノッチを持つ削器が見られないこと、そして舟底形の細石刃石核が共伴することから、風間Iaに先行するものとしておきたい。

一方、このような寺尾Iに代表され、風間Iaに先行するものと考えられる石器群とは異なる様相を持つ石器群として相模野149があげられる。相模野149は有舌尖頭器、尖頭器、掻器、削器、石斧状石器等の出土が見られているが、定形石器は量的に少ないものであった。主要器種となる尖頭器も4点の出土であり、しかも大半が欠損品であることから、その特徴を捉えることは困難であるが、中形柳葉形と大形木葉形の尖頭器で構成されているようである。大形木葉形尖頭器の存在はノッチを持つ抉入削器の共伴とともに風間Iaに類似する点としてあげられるが、寺尾Iの時期に特徴的に見られた石斧類や細石刃石核が認められず、より後出性の高い有舌尖頭器を持つという石器組成は、風間Iaに後続する石器群として位置づけることができよう。

# 3. 他地域の石器群との比較

前章では風間遺跡が立地している相模野台地で当該期の関連遺跡を通じてその前後関係を明らかにすることができた。そこで今度は対象遺跡をさらに広げて他地域の関連遺跡を含めて風間 I a に類似する石器群を抽出してみることとしたい。

まず、相模野台地と武蔵野台地の間に位置する多摩ニュータウン遺跡群にその類例を認めることができる。多摩ニュータウン遺跡群No.27(岡崎 1979,以下TN27と呼ぶ)は風間遺跡とも比較的近い位置関係にあり、遺跡としての立地環境も背後に丘陵部を持つ平坦面に位置しているという共通関係が認められる。石器組成は小形から大形の尖頭器を中心に石斧、抉入削器が組成として見られており、打製石斧の存在を除けば風間 I a と非常に近い石器組成を示している。また、素材となった石材も実見したところチャートを主体にホルンフェルス・凝灰岩などが見られ、その質感も非常に似通ったものとなっている。

個々の器種についてみてみると、尖頭器は大形のものに幅広木葉形のものと両側縁が平行する柳葉形を呈するものが存在し、小形から中形の尖頭器でも木葉形あるいは柳葉形を呈するものが見られ、さらに基部を直線状に整形している尖頭器が確認できる。削器においても風間 I a のような分銅形にまでならないものの幅広の縦長剥片を素材とし、その両側縁には円を描くようなノッチを作出しているものや、縦長剥片の両側縁に上下にずらしてノッチを施しているような抉入削器が認められているなど、打製石斧の存在を除くと風間 I a の石器群に見られた特徴がすべて認められる。

このようにTN27の石器群は石質や石器群の様相が風間 Ia に酷似していることから、 時期的にほぼ並行するものとして位置づけられよう。

このT N27のように風間 I a と時期的に並行すると考えられる他の遺跡としては,長野県下茂内遺跡第 I ・ II 文化層(近藤 1992,以下下茂内),群馬県房谷戸遺跡第 I 文化層(群馬県史編さん委員会 1988,以下房谷戸)があげられる。下茂内は第 I ・第 II 文化層

を合わせるとその出土点数は100,000点を超すという膨大な量の石器が出土している遺跡である。しかしながら、定形石器としては未製品を含む尖頭器約280点を主体として掻・削器が数十点見られるだけの単純組成であり、残りの90,000点を超す石器はすべて尖頭器の製作にかかわる剥片・砕片であるという。この下茂内の定形石器を見てみると、やはり小形から大形の尖頭器が確認され、基部を直線的に仕上げている例が認められる。また、風間 I a で特異な尖頭器として見られた半月形状を呈する尖頭器が認められることは注意しなければならない点であろう。削器も尖頭器製作剥片を素材としたものながらノッチを持つ抉入削器が安定的に認められる点が特徴としてあげられる。

次に房谷戸は未報告ではあるが、やはり9,000点もの石器の出土が見られているものの、その組成は未製品を含む尖頭器約30点、掻器数点という組成であり、残りはすべて尖頭器の作出剥片あるいは砕片であるということである。尖頭器はやはり小形から大形のものが見られ、大形のものは幅広で、中形のものに基部が直線状を呈するものが確認される。

## 4. 風間 I a の編年的位置づけ

前章までに風間 I a の石器群の再検討と当該期に並行あるいは前後する可能性が認められる石器群として、関東地方を中心にいくつかの遺跡をあげて検討を行ってきた。そこで得られた特徴をもとにこれまで述べてきた遺跡の石器群を大きくまとめると、いわゆる「神子柴・長者久保系石器群」として捉えられることができよう。しかし、これらの石器群はその組成や個々の石器の特徴から、それぞれに影響を与えつつ3段階に流れのピークを持ちながら変化して行く様子がうかがわれる。そこで、これを段階として捉えてその編年観を考えて見ることにしたい。

まず,第1段階として寺尾Iをあげることができよう。この石器群は小形から大形の尖頭器を主体として,断面三角形の打製石斧を代表とする打製・磨製石斧類や当該期に特徴的に見られる先刃掻器が組成に伴うものとして,最も神子柴・長者久保系石器群の影響を受けたものとして捉えられよう。この段階を「寺尾段階」と呼ぶことにする。そしてこの寺尾段階に組成として見られるものに舟底形細石刃石核の存在が認められる。

この寺尾段階に並行する遺跡として、勝坂、長堀北II、上野IIがあげられよう。勝坂、長堀北IIにはいずれも石斧は伴わないが、勝坂の尖頭器の特徴としては大形のものは細身の柳葉形を呈しているということが言えようか。そして、幅広木葉形を呈するものは中・小形の尖頭器に見られているようである。その点から見ると長堀北IIでは大形のものにもやや幅広の尖頭器が見られていることから、やや次の段階の影響を持っているものとしても考えられるかもしれない。さらに、寺尾Iや勝坂では、尖頭器の形状に両側縁が「く」の字状に明確な角を持ち、基部を直線的に整形しているものが認められることからも次段

階への変化が認められる。本段階はこのような特徴を持つ尖頭器に舟底形細石刃石核が伴うことで寺尾段階として捉えられよう。また、上野 II は石斧の様相はやや異なるものの、やはり小形から大形の尖頭器を主体として舟底形細石刃石核が組成に認められるものとして寺尾段階に属するものとする。

このように寺尾段階の大きな特徴としては、小形から大形の尖頭器を主体としてそれに石斧や舟底形細石刃石核が伴う段階としてまとめられよう。この神子柴・長者久保段階は先土器時代と縄文時代をつなぐ文化として捉えられており、その先土器時代の終盤に細石刃文化が出現し、この細石刃文化がその石核によって「角柱・稜柱形」→「舟底形」というように大きく変化していくことは周知の事実である。この点からも寺尾段階が細石刃文化の影響を保持しつつ神子柴・長者久保系の石器群の影響を受けて成立したものと言うことができよう。

次に、この寺尾段階に続く第2段階としては風間Ia、TN27、下茂内、房谷戸の石器群があげられよう。この段階を「風間段階」とすると、この段階は風間Iaの特徴としてすでに述べているように寺尾段階から続く小形から大形の尖頭器を主体としながらも、大形の尖頭器に細身の柳葉形を呈するものと幅広の木葉形を呈するものが安定的に存在する点が特徴としてあげられる。さらに、寺尾段階に見られた側縁の形状が「く」の字状を呈し、基部を直線的に仕上げた尖頭器が顕著に認められる点もあげられよう。

また,風間 I a • 下茂内には非常に類似した半月形状の尖頭器も確認されている。この形状を持つ尖頭器は小野田正樹によって再検討され,神子柴 • 長者久保段階に特徴的に認められる石器として注意されている。そして,このような尖頭器とともに新たな組成として,風間 I a の分銅形状を呈するものを最大の特徴とする大きなノッチを持つ抉入削器の出現も本段階の大きな特徴と言える。しかしながら,風間 I a には寺尾 I に類似する先刃状の掻器の存在も認められることから,前段階の影響も残されているようである。

ところで、この風間段階の石器群には下茂内や房谷戸のような多量の尖頭器製作剥片が出土する製作址遺跡と、風間 I a やT N27のような尖頭器を搬入して使用するような遺跡のあり方が認められるようである。前章までに検証してきた遺跡は、いずれも尖頭器製作剥片が認められてもその数はそれほど多いものではなく、特に風間 I a の大形尖頭器では同一母岩の剥片類がまったく認められていない。また、中・小形の尖頭器でも同一母岩の剥片は認められるものの尖頭器の点数から見てその数は非常に少ないものであった。このことから風間 I a の尖頭器石器群が完形または未製品の状態で他地域から搬入されたものである可能性が高いことは報告書でも指摘したところである。

このような 2 種類の遺跡のあり方は、尖頭器を製作する遺跡とそれを搬入して使用する 遺跡として捉えられ、そこに需要と供給という有機的な遺跡間の関連を推測することもで きよう。このような点から、製作址として捉えられる下茂内や房谷戸で未製品とされた尖 頭器は搬出する尖頭器としては完形品として考えることも可能ではないだろうか。そして搬入された遺跡においてその使用目的に応じて更に調整を施して使用されたものと推測される。

これらのことから、特に当該期の遺跡に良く見られるような単独母岩の多い遺跡では、その搬入品を製作した遺跡の解明も重要な視点と考えられ、その搬出された石器の大きさや形状、そしてその製作址から読み取れる石器群の特徴なども検証していく必要性があるものと思われる。

第3段階としては相模野149があてられよう。相模野149では大形の尖頭器に幅広木葉形のものと細身の柳葉形のものが見られ、抉入削器も認められるという風間段階の特徴が見られるが、より後続する石器である基部に抉りを持って舌部を作出した有舌尖頭器が新たな組成として加わり、縄文時代的な石器群の様相が見え始めると言う点で第3段階とする。しかしながら、相模野149は前述したように本段階の基本例としてその様相をすべて現している遺跡とは言い難く、段階設定のよりどころとした有舌尖頭器は単独母岩で搬入品と考えられている(鈴木前掲)ことから共伴関係が明確には捉えられない状況も認められる。このため、本段階の設定にあたっては有舌尖頭器を初めとする植刃あるいは植刃状の両側縁の平行する細身の尖頭器のようなより後続する縄文時代的な石器が組成として加わるという、所謂「本ノ木型石器文化」としてまとめられるものを示すものとし、「本ノ木段階」とする。

この段階に属する他遺跡としては、尖頭器を主体として抉入削器が見られながら有舌尖頭器や植刃状の尖頭器が共伴するという相模野149に類似する本ノ木遺跡(芹沢・中山1957)や前田耕地遺跡(秋川市教育委員会 1977他)、山形県弓張平遺跡(加藤 1978)を代表としてあげることができよう。さらに植刃状の両側縁の平行する細身の尖頭器が特徴的に認められる遺跡として群馬県赤堀石山遺跡(相沢 1967)、千葉県南大溜袋遺跡(戸田 1973)、元割遺跡(田村 1986)、弥三郎遺跡(織笠 1992)等が本段階に含まれよう。

一方、神子柴・長者久保文化とする石器群の特徴としては、上述した石斧や尖頭器のあり方だけではなく、石刃やその石刃を素材とした彫・掻器などの石器群の存在も見落とすことができない点としてあげられる。このような石刃や石刃を素材とした石器を含む当該期の石器群は、北海道から東北・北陸にかけて多く確認されており、関東近県では茨城県後野遺跡(後野遺跡調査団 1976)に認められる程度である。特に東北北部から北海道に顕著な分布が認められることから、典型的な神子柴・長者久保系の石器群は、北海道あるいは東北北部よりごく短い期間の内に南下しながら広がって行ったものと考えられるが、本論で検討した関東の神子柴・長者久保系石器群は細石刃文化が衰退するとともに尖頭器の系統のみが伝播され、石刃技法を持たないという地域性を持って独自に進化し、風間段

第1表 関東地方における「神子柴・長者久保」系遺跡の編年

| 時 代    | 遺 跡                  | 土器 | 細石<br>刃核 | 尖頭器 | 抉入<br>削器 | 有 舌<br>尖頭器 | 特 徵           |
|--------|----------------------|----|----------|-----|----------|------------|---------------|
| 縄      | 隆起線文系土器文化<br>↑       |    |          |     |          |            |               |
| 文      | 相模野149 本ノ木 前田耕地      |    |          |     |          |            | 有舌尖頭器 植刃      |
|        | 風間 Ia TN27 下茂内 房谷戸   |    |          |     |          |            | 尖頭器基部直線化 挟入削器 |
| 先      | 寺尾 I 勝城 長堀北 II 上野 II |    | 1        |     |          |            | 舟底形細石刃石核      |
| 土<br>器 | ↑<br>細石刃文化           |    |          |     |          |            |               |

階にそのピークを迎えたものと考えられる。しかし、その後の本ノ木段階では新たに北陸・上越方面から有舌尖頭器や植刃状の尖頭器に代表される「本ノ木型石器文化」が波及してくる様相が認められるが、北陸→北関東→東京→千葉というように点在しながらも線的に結ばれる当該期の傾向が南西関東では明確に認められないということは、これらの伝播経路からはずれた地域として考える必要もあろう。このように先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけてはいくつかの系統の石器文化が派生したものと考えられ、各地域によって直接的な伝統が見られる遺跡や、変質化する遺跡、あるいは影響をうけない遺跡等がほぼ同時期に存在していたものと考えられる。

「神子柴・長者久保系石器文化」・「本ノ木型石器文化」についての系統と編年的位置づけについては長い間問題となっていた点であり、当該期に関する編年についてはいくつかの論稿が見られているものの、必ずしも一致した結論を見ていない。近年における代表的編年としては、まず、岡本東三の編年があげられよう。岡本は当該期に特徴的に見られる石斧を中心にその編年を組み立て、長者久保→神子柴→鳴鹿山鹿という編年の骨子を設定している。しかしながら、関東の寺尾の位置づけに関しては共伴する土器から隆起線文系土器群の後に置いており、神子柴・長者久保系の石器群がこの段階まで連続するものとしている(岡本 1979)。また、白石浩之は本ノ木遺跡と寺尾遺跡の再検討の中で、石器群の位置づけの中から土器を系列別に配列し、寺尾、相模野149、上野1を最も古い段階に置き、本ノ木、前田耕地、風間をそれに続くものとしている(白石前掲)。一方、栗島義明は上ノ平遺跡の再検討の中で、尖頭器あるいは削器の形態的特徴から、すでに寺尾→風間→前田耕地という位置づけを発表され、風間を「前後の石器群の様相を共有した、言わば折衷的な石器組成を保有している(栗島前掲)」ものとしており、本論も基本的には栗島編年に準ずる結果となった。

それでは、この3段階にわたる神子柴・長者久保系石器群にはどのような形で土器が出現してゆくのであろうか。

今回検討した遺跡群の中で土器が確認されている遺跡としては, 第1段階の寺尾 I, 勝

坂,上野  $\Pi$ ,第 3 段階の相模野149,本ノ木,前田耕地の計 6 ヵ所の遺跡で出土が見られている。これらの土器が確認されている遺跡の中で最も問題となる点は,従来からその編年的位置づけが問題となっている寺尾  $\Pi$  から出土した土器であろう。調査当初はその土器が押圧縄文系に属すると考えられたことから,石器群とともに隆起線文系以降に位置づけられていた。しかしながら,その石器群の様相は本論で位置づけているように神子柴・長者久保段階の最も古い石器群として捉えられるものであり,調査者の白石浩之もその再検討を行っている。

筆者は寺尾段階に押圧縄文系の土器が供伴する可能性を全面的に否定するものではないが、寺尾段階として位置づけた勝坂、上野IIでは無文の土器が出土しており、第3段階とした前田耕地では、土器が見られず有舌尖頭器が出土する2・4・5集中地点と、無文土器が供伴し有舌尖頭器の見られない第6集中地点では層位的な上下関係が存在するという指摘があり、第6集中地点が寺尾段階として捉えられる可能性も考えられる。また、他地域で当該期に属し土器の共伴が見られる遺跡として東京都田無南町遺跡(小田 1990)、茨城県後野遺跡、新潟県大刈野遺跡(佐藤 1988)、青森県大平山元遺跡(三宅・岩本1976)などが見られるが、いずれも出土している土器は無文土器であることなどから見ると、この第1段階は土器が伴うとしても無文で平口縁を持つ土器が共伴する可能性が高いものと思われる。第8図の寺尾遺跡の分布図を見ると細身の尖頭器が11・13・14・18ブロックからまとまって検出され、さらに舟底形細石刃石核としたものがその南側に偏って確認されていることから、このような寺尾Iの石器群や土器が一時期に残されたセトルメントパターンを示しているものか、あるいはやや時間的な幅を持って連続的に残された遺物群として捉えられるのかも考えてみる必要があろう。

# 5. ま と め

本論は、先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけての尖頭器文化の変遷を風間遺跡群第1地区第I文化層(a)の石器群をもとに述べてきた。そして3段階にわたって細かく変化していく小形から大形の尖頭器を主要な利器とする石器文化は、いわゆる「神子柴・長者久保文化」からの大きな影響を持って派生したものと考えられた。

この神子柴・長者久保系石器群の特徴を簡単に述べると、周知のとおり槍先形尖頭器を主体とし、それに断面三角形の石斧が伴う石器群ということができようか。そしてこのような石器文化は先土器時代から縄文時代という大きな流れの中で、両者の転換期にあたり、先土器時代の影響を持ちつつ縄文時代へ移行していくものとして評価されよう。そしてこのような大きな変化が、先土器時代を代表する石器文化であるナイフ形石器文化から第1次尖頭器文化、そして細石刃文化というように変化し、この細石刃文化の衰退と共に「神

子柴・長者久保文化」である第 2 次尖頭器文化が派生し、そこに土器を持つ文化が編入 (発生?)したことによって、生活環境の大きな変化にともなう新たな石器群の変動が起 こっていったと整理することができる。先土器時代の中でナイフ形石器や細石刃のように 組み合わせ石器を主な利器として使用していた中に、石斧と尖頭器という用途に直結した 石器が出現したことを考えれば、「神子柴・長者久保文化」が果した役割は非常に大きな ものといえよう。そしてこの「神子柴・長者久保文化」が北海道・東北北部から南下して きた中で、石刃技法を保持しながらという直接的な伝播は認められないものの、尖頭器文 化として寺尾段階に南関東地方にもたらされ、風間段階をピークとして本ノ木段階から有 舌尖頭器あるいは植刃状の両側縁が平行する細身の尖頭器が組成に加わり変化していった ものと考えられる。

しかしながら、土器が出現してくるという状況の中で、今回検証した神子柴・長者久保 系石器群には、土器の発見されている遺跡と土器を持たない遺跡が混在している状況が認 められている。本来、長者久保遺跡に見るように神子柴・長者久保文化には土器の存在が 乏しく、むしろ舟底形細石刃核を持つ文化側に無文土器の発生の素地がありそうである。このように考えた場合、大形幅広の尖頭器を特徴とする石器群の中で風間 I a、T N 27、下茂内、房谷戸のグループに明確な土器の出土が見られないということは単なる現象の差ではなく、このグループに元来土器製作の伝統が乏しかったという文化系統の差として捉える必要もあろう。それは、関東を中心に見れば舟底形細石刃石核の見られる台地部と風間 I a に見る丘陵山岳部という地理的、環境的差異の中にも土器出現の背景を見ることができる。

今回の編年では、各段階の画期として細石刃文化の影響を残しつつ尖頭器文化がそれに置き換わる段階、細石刃文化が消滅して大形幅広の尖頭器とそれに伴う「柄」に強い関連を示す抉入削器の発達する段階、尖頭器文化を保持しつつ有舌尖頭器や植刃状の石器への変化が見られる段階をあげてその移り変りを見てきたが、このような当該期の文化的な変化は、どの変化においても一律に移り変るものではなく、大きな変革の中で系統差あるいは地域性も考えて行かなければならず、当該期の様相はまだまだ変化に富んだものであることが推測できよう。

# おわりに

拙論は、「先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけての尖頭器文化」という大命題に対して南関東を中心とした尖頭器文化のごく短い時期の編年を組むことしかできず、 凡日本的な当該期の変化を検討することができなかった。これは当該期遺跡の集中する東京西部から神奈川県における状況をまず地域的に整理しておくことが今後の研究に欠かせ ないものと考えたところにもよるが、改めて、第2次尖頭器文化、「神子柴・長者久保文化」あるいは「本ノ木型石器文化」、そして土器の発生と言う文化変容の中で、南西関東地方は決してそれらの本流に存在したものではなく、国内的辺境、一種の吹き溜まり的現象を示しているのではないかとの感を強く持つものである。本論は「神子柴・長者久保文化」の中で関東地方の様相の一端を示すものとして、今後更なる御意見や御教示を賜って行きたいものと考えている。また、編年系統観あるいは土器の共伴関係などについては、調査担当者戸田哲也先生からの御教示あるいは討議をふまえた上でまとめたものであるが、その文責は筆者にある。

なお、戸田哲也先生、村田文夫氏には本誌への掲載の機会をいただいた。さらに、小田 静夫、橋本真紀夫、佐藤宏之、小松真名、原川雄二、麻生敏孝、小菅将夫の諸氏には資料 の見学や貴重な御意見をいただいた。末筆ながらここに記して感謝申し上げます。

#### (註)

- 1)報告書作成時に東京都埋蔵文化財センターの佐藤宏之氏の御配慮により実見させていただき、小 松真名氏と原川雄二氏にはTN27の石器群について石器組成や石質組成などの有益な御助言をい ただいた。
- 2)報告では2枚の文化層として分離されているが、分布が異なり、遺跡地形が河川による浸食、堆積、運搬による複雑な地形であること、石質、石器組成による差がほとんど認められないことから、本論では一括してあつかうこととした。
- 3) 群馬県埋蔵文化財センターの麻生敏孝氏の御配慮により実見させていただき小菅将夫氏には房谷 戸遺跡について御助言をいただいた。
- 4) 上野 II の全磨製石斧については、余りにもその様相が神子柴・長者久保系石器群の系統とは考えられず、また、同一文化層にナイフ形石器も共伴するとしていることから、これらの石器は他文化層からの混入品の可能性が強いものと考えられる。
- 5)(堤 1991),(諏訪間 1991)他
- 6) 小野田正樹は「半月形の両面石器」として捉え、尖頭器とは用途が異なる渡来石器としている (小野田 1978) が、今回の論稿の基本遺跡である神子柴遺跡、長者久保遺跡では認められてい ないことから、その系統については今後新たに分析を進める必要があろう。
- 7) 報告では2点の土器状の遺物が検出されているが、科学分析まで行っているものの積極的な評価をするまでにいたっていないことから、本論ではあつかわないこととする。
- 8) 白石浩之は草創期には刺突文系,沈線文系,縄文系,貼付文系,無文の5群の土器が存在するものとし,寺尾Iの土器が本ノ木,前田耕地以前に位置づけられるものと修正している(白石1990)。
- 9) 宮崎博の助言として鈴木次郎が述べている(鈴木 1989)。

#### 主要引用・参考文献

相沢忠洋 1967 「群馬県赤堀石山遺跡」考古学ジャーナル9 青木 豊・内川隆志 1990 「神奈川県勝坂遺跡第45次調査」考古学ジャーナル 324 相田 薫 1986 「第II文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告第21集 秋川市教育委員会 1977 「前田耕地 I」他

麻生順司 1989 「第I文化層(a)|『風間遺跡群発掘調査報告書』

伊藤恒彦 1988 「相模野台地の 2 種類の尖頭器石器群」『大和のあけぼの II 』大和市教育委員会

稲田孝司 1969 「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」考古学研究第15巻3号

後野遺跡調査団 1976 「後野遺跡」

岡崎完樹 1979 「多摩ニュータウン遺跡群No.27遺跡」多摩ニュータウン遺跡調査概報 - 昭和54 年度

岡本東三 1979 「神子柴・長者久保文化について」奈良国立文化財研究所学報35

小田静夫 1990 「田無南町遺跡の発掘調査概要」たなしの歴史 2

織笠 昭 1992 「弥三郎遺跡」土気南遺跡群Ⅱ

小野田正樹 1978 「「半月形の両面石器」に関する一考察」丘陵 5

加藤 稔 1978 「弓張平遺跡」

栗島義明 1988 「神子柴文化をめぐる諸問題 - 先土器・縄文の画期をめぐる問題 (一) — 」 『研究紀要第4号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

栗島義明 1991 「「本ノ木論争」から学ぶもの(一)」埼玉考古学論集

栗島義明 1991 「『上ノ平尖頭器文化』再考(上)(下)」古代文化第43巻第2号・第3号

群馬県史編さん室 1988 「房谷戸遺跡」群馬県史資料編Ⅰ

小池 聡 1991 「長堀北遺跡」大和市文化財調査報告第39集

近藤尚義 1992 「下茂内遺跡」上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 1 ―佐久市内その 1 ― (財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告11

佐藤雅一 1988 「大刈野遺跡」湯沢町埋蔵文化財報告第9輯

白石浩之 1976 「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について」考古学ジャーナル126・127

白石浩之 1980 「第 I 文化層」『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告18

白石浩之 1989 「旧石器時代の石槍」UP考古学選書

白石浩之 1990 「本ノ木遺跡の意味するもの―縄文時代草創期研究の視点―」神奈川考古26

鈴木次郎 1984 「第Ⅲ文化層」『栗原中丸遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告3

鈴木次郎 1989 「相模野台地における槍先形尖頭器石器群」神奈川考古25

鈴木次郎 1989 「相模野第149遺跡」大和市教育委員会

諏訪間順 1991 「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察」中原第 5 遺跡 B 地点 の研究

芹沢長介・中山淳子 1957 「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」越佐研究12

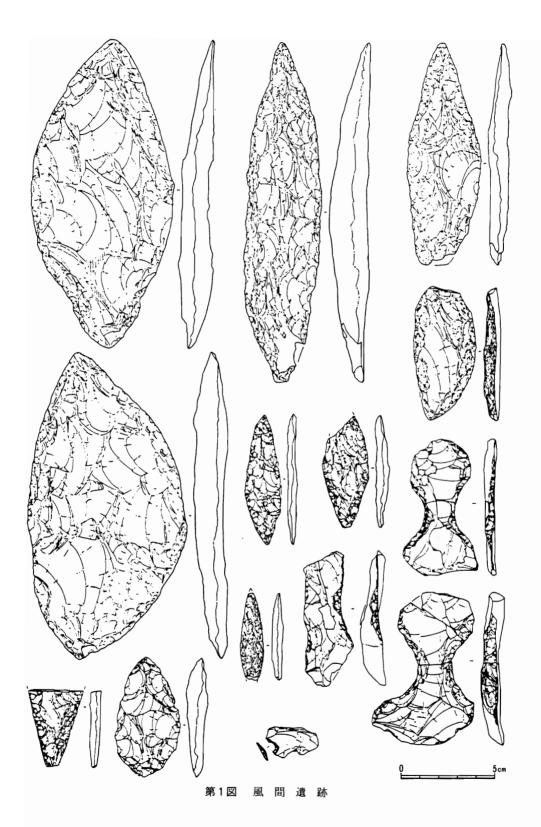
田村 隆 1986 「元割遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書VI』千葉県文化財センター

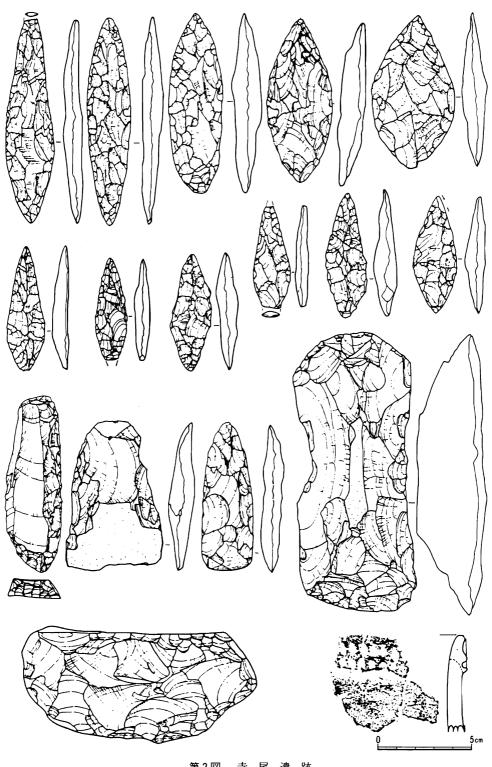
堤 隆 1991 「相模野細石刃文化における石器装備の構造」大和市史研究17

戸田哲也 1973 「千葉県南大溜袋遺跡の調査」考古学ジャーナル78

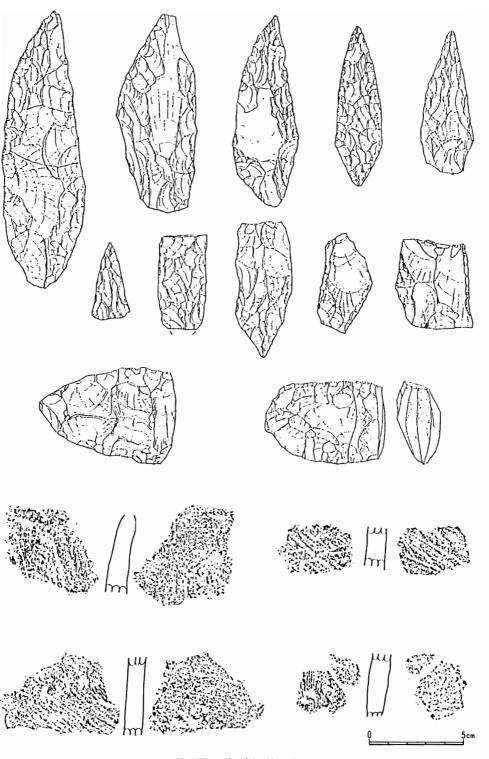
中村考三郎 1966 「小瀬ケ沢洞窟」

三宅徹也·岩本義雄 1976 「大平山元 I 遺跡発掘調査報告書 | 青森県立郷土館調査報告 8

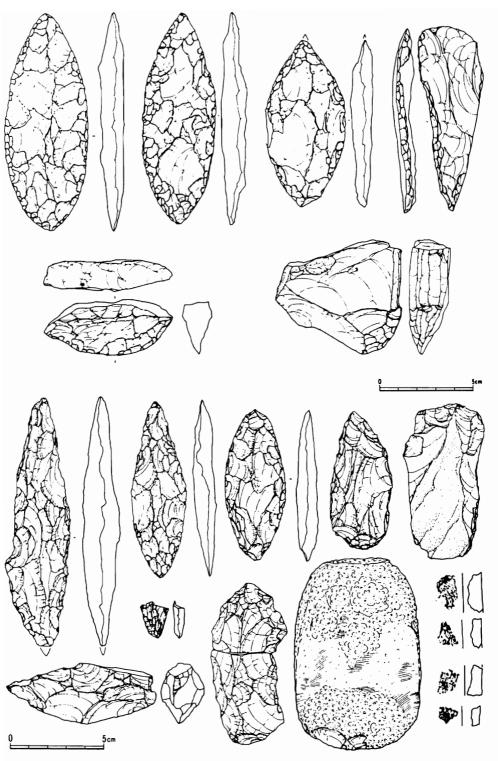




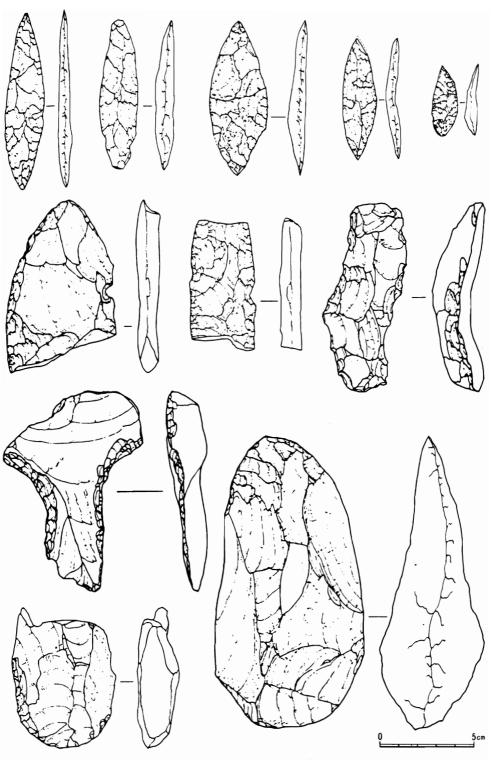
第2図 寺尾遺跡



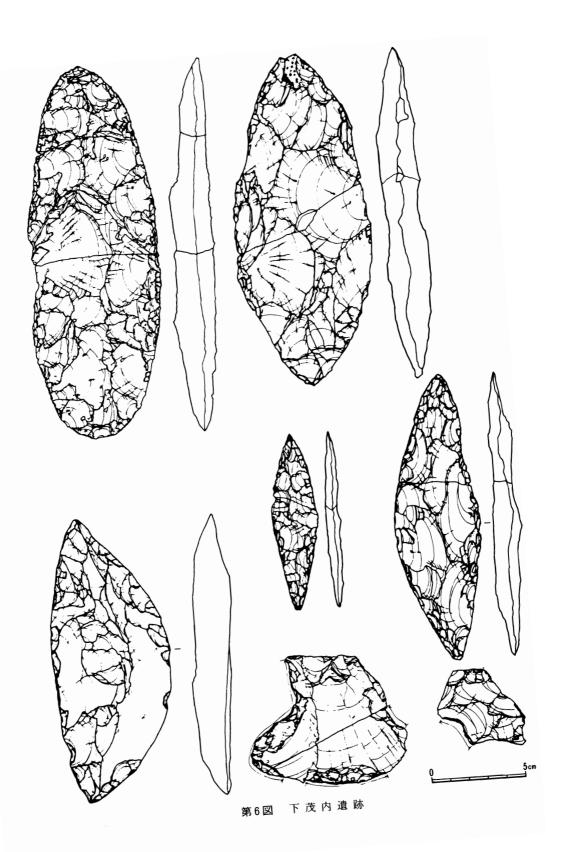
第3図 勝 坂 遺 跡

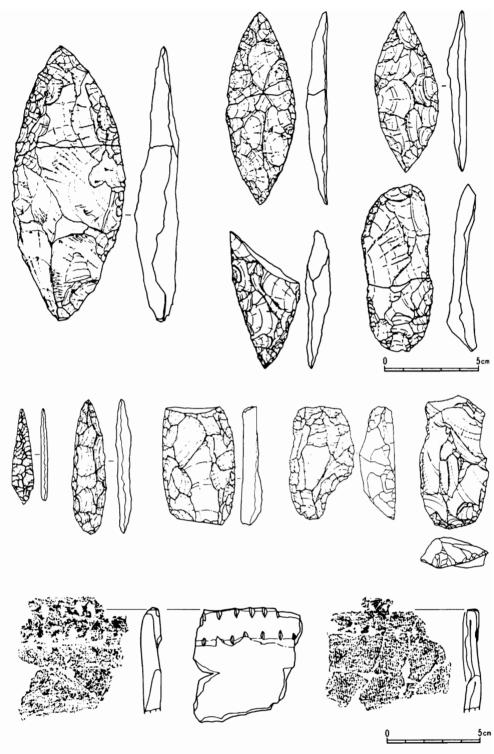


第4図 長堀北遺跡(上) 上野遺跡(下)

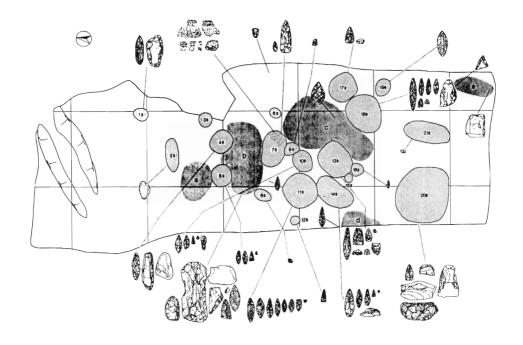


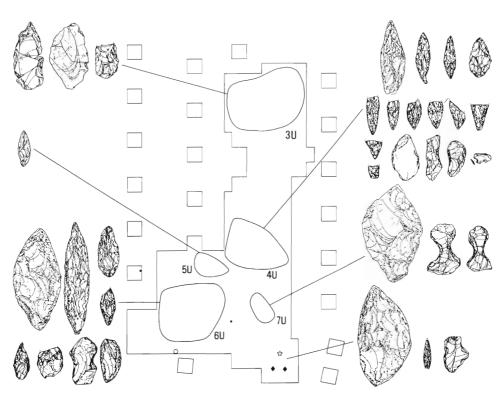
第5図 多摩ニュータウン遺跡群 No.27





第7図 房谷戸遺跡(上) 相模野第149遺跡(下)





第8図 寺尾遺跡(上) 風間遺跡(下)石器分布図

# 久地伊屋之免古墳と虚空蔵山古墳

- 割竹形木棺壙をもつ南武蔵前期古墳の史的素描 -

持 田 春 吉 • 村 田 文 夫

#### はじめに

昭和58年10月と昭和59年2月~4月にかけて、伊東秀吉氏を団長とする久地伊屋之免遺跡発掘調査団は、久地伊屋之免遺跡の発掘調査を実施し、これにより土坑、方形周溝墓、高塚古墳などを発掘した。その成果は、昭和62年4月『川崎市高津区久地伊屋之免遺跡』として久地伊屋之免遺跡発掘調査団から刊行されている。とくに調査団が歓喜したのは、調査前にはまったく予期していなかった前期の高塚古墳が発掘調査されたことで、古墳は久地伊屋之免古墳と命名、報告された。私たちもこの調査に深く関わっており、小論は、この事実が直接的な契機となっている。

ところで、久地伊屋之免遺跡の古墳に関する報告部分を作成している過程では、とうぜん類似資料との比較検証が必要とされた。その比較対象の最右翼候補が、横浜市緑区荏田町に位置する虚空蔵山古墳であった。ただ、報告書を作成していた時点では、まだ高塚古墳である虚空蔵山古墳を含む虚空蔵山遺跡の概要しか公開されていなかった。そこで私たちは、調査を担当された日本窯業史研究所のご高配で、発掘資料を実見させて頂くなど、おおくの情報提供を受けた。しかし正式報告がされる前のことでもあり、活字にすることを自重する部分があった。さいわい虚空蔵山古墳を含む虚空蔵山遺跡の内容は、平成2年3月『横浜市緑区虚空蔵山遺跡』として日本窯業史研究所から刊行され、私たちもその内容を詳しく知ることができるようになった。

一方、平成3年11月9日には、東京考古談話会が「多摩川中・下流域の古墳をめぐる諸問題-最近の発掘調査の成果から-」というシンポジュウムを開催され、おもに多摩川中・下流域左岸(東京都側)における近時の様相が3人のパネラーによって報告、議論され、南武蔵多摩川流域古墳文化研究にひとつの画期がしるされた。

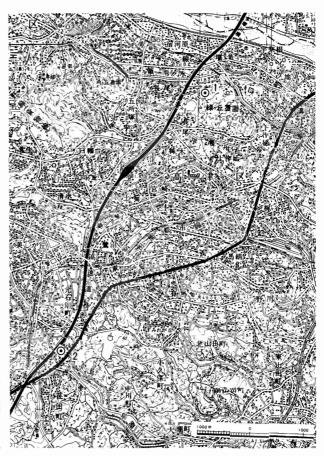
こうした近時の状況をふまえたとき、私たちが発掘調査した久地伊屋之免古墳について も再度その内容を江湖に披瀝し、それに虚空蔵山古墳との関連などを含めてその歴史的意 義づけを素描しておくことも若干の意味があろうという考えにいたった。

### ふたつの高塚古墳の概要

#### (1) 久地伊屋之免古墳

[占地景観] 久地伊屋之免遺跡は、神奈川県川崎市高津区久地 663 番地他に所在する(第1図1)。遺跡は、標高約54 mをはかる西調査区と、そこから東はかる西調査区にわかれるが、久地伊屋之免古墳はそのうちの東調査区から発見された。

古墳は、既設の道路によって南側と東側が約2.5mほどカッテイングされ、かつ道路を挟んだ東側にもすでに住宅が建ちならんでいたため、古墳築造時の肝腎な地形景観は復元できなかった。とはいうものの、古墳は西側上方より自然傾斜しながら降りてきた標高約39mの位置に築造されたもので、墳丘上にたてば前面に台地が、さらにその前方には多摩川の清流と沖積地が



第1図 久地伊屋之免古墳(1)と虚空蔵山古墳(2)の位置

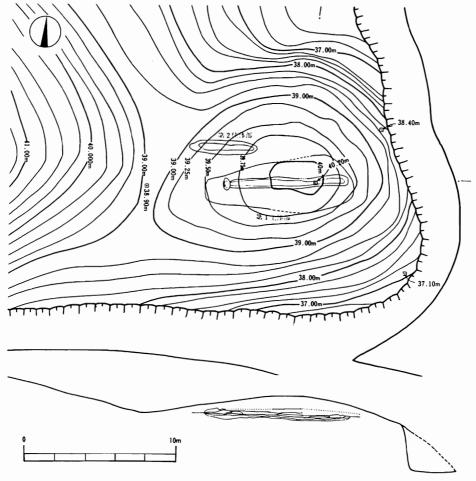
一望できる。まさにこの眺望は、初期豪族の奥津城にふさわしいといえよう。

[墳丘規模と墳形] 前記したような事情から、築造時における墳形や墳丘規模の正確な数値をもとめることはできないが、墳丘径を測量図からおこせば南北径17m、東西径16mとなる。墳丘東側裾部は既設の道路によって削られているので、その部分からくびれ部をもつ前方部がつづいていなかったとは断言できなくはない。しかし、これも単なる推測にすぎないので、墳形については現況を尊重して円墳としておく(第2図)。

墳丘の東西軸の盛りあがりは、西側裾部と墳頂では約1.3m差をはかり、ゆるやかなのばり勾配になっている。一方、南北軸でみると約3.2m差があり、これが高塚古墳であることを瞭然としている。墳丘高は、後で記する封土の築造断面図から1.8~2.0m前後であることが判明した。なお、周湟や埴輪などの外部施設は発見されなかった。

[封十の築造] つぎに、墳丘を構成する封土の築造過程を観察してみる。

封土は、旧地表面上に南北の双方から逐次堆積させていったもので、とくに墳丘中心部 をつねに低くし、若干の傾斜をもたせながら版築状に構築していった作業工程がうかがえ



第2図 久地伊屋之免古墳の墳丘実測図

る。旧地表面上に積み上げた封土の体積は、約140㎡と試算された。墳丘径16~17 m、墳丘高2.0 m前後をはかる円墳の封土量として参考になろう。

凹状に窪んだ墳丘の中心部に、やや凸状をなす第6層が比較的厚く堆積していた。この 土質は締まりのある黄褐色のローム・ブロックで、後で記する割竹形木棺は、この墓壙に 相当する第6層を掘り込んだ第3層中に埋置されていた。

墳丘高については、墳頂部付近での南北軸での測定によると、旧地表から第2層上面までは1.8m、第1層の表土上面までは2.1mをはかる。おなじく東西軸では、旧地表から第2層上面までは2.0m、第1層から表土上面までは2.2mをはかる。つまり築造時の墳丘高は、1.8~2.0m前後としておくのがもっとも穏当な判断であろう。

第2層は、墳丘断面図からわかるように墳頂部と整合するように水平、というより若干 窪み気味であることが看取できる。これは後で詳しく記するように、この古墳が前期古墳 である点から考え、当初より墳丘の頂部は平坦に築造されていたと解釈しておくのがもっ とも穏当であろう。

なお、墳丘下の東半分にかかるようにして、第3号方形周溝墓が発掘されている。 [内部主体] 内部主体は、墳丘中央部から東西方位を主軸にして検出された第1主体部と、 その北西側からおなじく東西方位を主軸にして検出された第2主体部とが確認された。まず第1主体部に関する所見は、つぎの4点に収束できる(第3図1)。

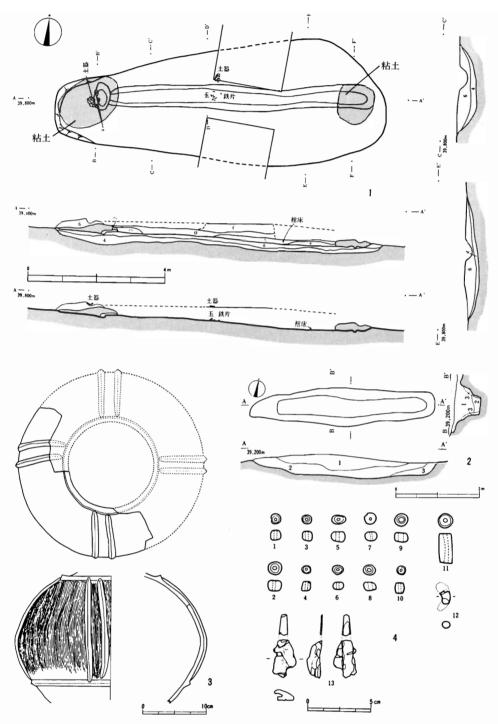
- (1) 主体部を包摂する墓壙の第6層は、黄褐色のローム・ブロックやローム粒を含む土質で構成されていて、平面形は東側があきらかに膨らむ長楕円形をなす。
- (2) その墓壙の中央を主軸に沿って切断するようにして第1主体部が構築されていた(第3層)。それは非常に細長く,最大長7.8mをはかり,幅は50~70㎝,深さは墓壙上面から30~50㎝であった。また東と西の端部では比高差があり,西のほうが30㎝高くなっていた。主軸は東西方位で, $N-78.5^{\circ}-E$ をさす。
- (3) 細長い主体部の断面形はあきらかにU字状で、東・西の両端部には黄白色の粘土塊を 充填していた。しかも西端粘土塊の上位には、特異なモチーフで飾られた壺形の供献土 器を据えて丁重な葬送儀礼を執行していた(第3図3,写真1)。この土器の特徴は、後 で記する。主体部のほぼ中央の北壁際から、壺形土器がもう1点検出されている。
- (4) 主体部内の土壌は、ローム粒子を多く含む暗褐色・黄褐色土質で、墓壙に相当する第 6層にくらべると粘性はあるがやわらかい感触であった。ほぼ中央部からは、小玉9点 棗玉1点、勾玉片1点、管玉1点、鉄鏃片1点が発見されている(第3図4)。

これらの特徴から判断して、第1主体部の墓壙中には割竹形木棺が埋置されていたことはきわめて明瞭といえよう。

従来こうした特徴をもつ内部主体は、「割竹形木棺直葬」と呼称されて人口に膾炙してきた。しかし、明確な墓壙中に安置されていたわけであるから、正確には「ローム・ブロックの墓壙中に被覆・直葬された割竹形木棺」とすべきであろう。ただ、これだと呼称がながすぎるのと、墓壙を覆う土質は古墳によって異なるので、短く「割竹形木棺壙」をもつ内部主体といいかえてもよい。いずれにしろ、割竹形木棺直葬だけでは肝腎な墓壙の存在がつたわってこない点から、従来の呼称には再考の余地はあろう。

ところで、(2)に記した東端より西端棺床のほうが30cmほど高くなっていたというのは、 どういう理由からであろうか。

割竹形木棺に使用した木材は、いかなる樹種であろうと根のほうが太く、先端にいくほど細くなる。この両端で生じた直径の差は、墓壙上面を水平に保つ設計をすることによって調整をつけたのであろう。そのためには表面的には隠された部分、すなわち棺床部分で高低差をつけ、墓壙表面にあらわれた木棺は水平であるよう取り繕う必要があった。とくに本格的な竪穴式石室がさらに上面に覆う場合は、棺床部分で高低差をつけることはかなり重要な設計与件であったと察することができる。事実、竪穴式石室に関する都出比呂志



第3図 久地伊屋之免古墳内部主体及び副葬遺物実測図(1・第1主体部, 2・第 2主体部, 3・第1主体部出土の土器, 4・第1主体部出土の玉類, 鉄鏃)

氏の集成(都出1986)では、棺床に差が有28例に対し、無22例で、有が無を若干凌いでいる。つまり久地伊屋之免古墳の割竹形木棺は、そうした木棺形態にともなう本来の設計与件を厳格に遵守していたことになる。

第1主体部からは、埋葬骨に関する直接的な所見はあがっていないが、埋葬位置については従来の発掘知見を参酌することによって、推測の手掛かりはある。たとえば、前方後円墳で知られる茨城県丸山古墳(後藤・大場1957)は、明瞭な棺床差をもつ割竹形木棺であるが、稀有なことに棺床の高い北位に頭蓋骨をむけて伸展位に葬られた遺骸が良好に遺存していた。最近の事例では、東京都世田谷区野毛大塚古墳の第1主体部の割竹形木棺の場合も、臼歯などの出土した位置から、頭位は棺床が高く、幅が広い北東側であったという。また、広く竪穴式石室・割竹形木棺の資料を分析をされた前記の都出氏(都出1986)も、頭位は"幅が広く、かつ高い"側にくるという傾向を指摘されている。

こうした考古学的な所見を推測の論拠にすれば、久地伊屋之免古墳第1主体部の被葬者は、棺床の高い西側に頭を向けて葬られていたと考えられる。したがって玉類の出土位置は、被葬者の頸部から胸部にあたり、西端の粘土塊土に据えられた土器も、被葬者の頭位を意識して供献されたのであろう。

久地伊屋之免古墳の正面観は、このように東側にあることは明瞭である。よって第1主体部に埋葬された人物の霊位を継承し、祭祀できる一族が往来できる"通路"としては、被葬者の胸部からアプローチできる墳丘東麓からの昇降がもっともたかい可能性をもって復元できるのである。

第 2 主体部は,第 1 主体部の北西側約2.3mの位置から発見された(第 3 図 2 )。その特徴を要約するとつぎのようになる。

- (1) 主体部は、旧表土中に掘り込まれたもので、主軸方位はN-82.5°-Eで、第1主体 部と同様に東西方位が意識されてい
  - ることはあきらかである。
- (2) 主体部は,第1主体部ほどではないが基本的には細長い形態で,最大長4.45m,幅は60~90cm,深さは40~50cmをはかる。断面形は,主軸と直角に交差する南北面で観察すると

  \/ \presspace{2.5cm} \pre
- (3) 主体部内の土壌の特徴は、ローム 粒子を多く含むなど第1主体部のそ れとよく類似する。ただ主体部から は、遺物の発見はなかった。

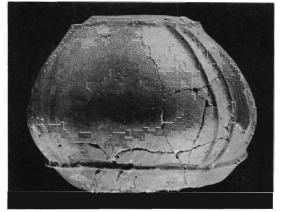


写真 1 久地伊屋之免古墳第 1 主体部出土土器 (撮影・小池汪氏)

このように第2主体部からは、肝腎な副葬遺物の発見がなく、また木棺安置にともなう 両小口の粘土塊などが検出されていないので、木棺の形態を推測する根拠に欠ける。ここ では主軸と直角に交差する\\型状の断面形状を尊重し、組合せ式木棺が安置されていた可 能性を想定しておきたい。

[出土遺物] 第1主体部から検出された副葬遺物について、簡単にふれておく。

壺形土器 2 点のうち,第 3 図 2 (写真 1 )は西端小口に充塡された粘土層の上面を覆うローム・ブロックに埋め込まれるようにして発見された。口縁部と底部を欠損するが,器形は壺形とみて間違いなかろう。現存部の高さ $21\,\mathrm{cm}$ ,器厚  $5\sim7\,\mathrm{mm}$ ,胴部最大径 $30.6\,\mathrm{cm}$ をはかる。文様は,鍔状の突帯を横位・縦位に貼り付けた,きわめて特徴的なモチーフである。

まず胴部上半では、頸部との接点に1条、胴部下半では底部への移行部に1条の突帯が横位に廻る。この2条の横位に廻る突帯をつなぐように、2条1組でおそらく4単位になるとおもわれる縦位の突帯がつけられている。突帯は、縦・横位とも紐状の粘土を貼つけしてから、最終的に両脇を箆で強く押し引き締めつけている。横位の突帯上に縦位の突帯がかぶさっているので、横位の施文が先行していることがわかる。

器面は全面的に滑らかで、箆磨きされたうえに丹彩が施こされているが、部分的に剥落している。丹彩とはべつに、黒色の物質を意識的に塗布したのではなかろうかと観察できる部分もある。内面は横方向のナデ調整で、胴部上半は輪積痕がのこる。

もう1点の壺形土器は、主体部のほぼ中央の北壁際から検出された。その位置から推測して、棺外に供献されていたものであろう。現存部は、壺形の胴部のみで最大高さ14cm、器厚4mmと薄く、胴部最大径は28cmをはかる。器面は刷毛目調整をしたのち、縦位に箆磨きを念入りに施している。内面は横ナデ調整で、下半には輪積痕がのこる。

玉類は、主体部中央の南北30cm、東西20cmの範囲で、棺床からの高さ8cm以内から検出されている。鉄鏃片は、棺床直上から検出されている。これらは、あきらかに棺内にそえられた副葬遺物類である。

これらの玉類を倍率25倍の単眼鏡で詳細に観察してみたところ、貫かれた孔の両端には 顕著な磨滅痕が認められた。この磨滅は、そこに紐をとおして被葬者が生前に佩用してい たことを窺わせる。それを丁重に遺骸にそえ、死してなお玉類に不老・不死を託したので あろうか。玉類のもつ呪術性の一班がしのばれるのである。

なお、勾玉の材は稀少な琥珀製で2/3近くを欠損していた。この破損が故意のものかどうかを確認するため、主体部の土壌を完璧に水洗選別してみたが、破損仲間は検出できなかった。副葬品に供されたときには、すでに破砕されていたということであろうか。

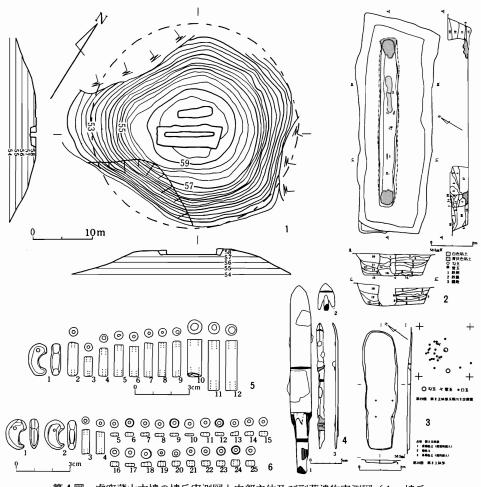
#### (2) 虚空蔵山古墳

「占地景観〕虚空蔵山遺跡は、神奈川県横浜市緑区荏田町319-1番地他に所在する(第1

図2)。遺跡は、鶴見川の一支流である早淵川の氾濫原に突きでた北西から南東に延びる 多摩丘陵の先端部に位置する。早淵川は、この丘陵の東側を南流し、虚空蔵山遺跡の南側 で南東に流れをかえるため、遺跡からは上・下流の氾濫原を一望することができる。

昭和56年8月~57年6月にかけて実施された発掘調査では、縄文時代中期の竪穴住居址2軒、弥生時代後期の竪穴住居址7軒のほか、古墳時代の遺構・遺物としては、高塚古墳1基、方形に周溝が巡る台状墓が1基発掘調査されている。そのほかに古墳時代前期の竪穴住居址1軒と同後期のそれが49軒発掘調査されている。とうぜん小論では、高塚古墳である虚空蔵山古墳が話題の中心となる。古墳名は、そこに虚空蔵菩薩を祀る祠があったことから由来している。

古墳は、並列する方形の台状墓ともども早淵川沖積地からの視覚を十分に意識しながら



第4図 虚空蔵山古墳の墳丘実測図と内部主体及び副葬遺物実測図(1・墳丘 図,2・第1主体部,3・第2主体部,4・第1主体部出土の鉇,5・ 第1主体部出土の玉類,6・第2主体部出土の玉類)

構築されたものと調査者は推測している。

[墳丘規模と墳形] 墳丘は裾部にまで沢がはいり込み,また墳丘南側は中世頃に削平を受けて変形をしている。さらに墳丘の裾部は,いわゆる削り出しによって整形しているため,正確な墳丘規模をたしかめることはむつかしい。いちおう現存部での状況から,墳丘径約 $30\,\mathrm{m}$ ,高さ約 $5\,\mathrm{m}$ ,墳形は不整円形と報告されている(第 $4\,\mathrm{M}$ 1)。

このように円墳で、墳丘径約30m、高さ約5mといえば、かなりの大形の古墳である。加えて報告書では、「墳麓部の削り出しの範囲や盛土の状態などから本来は径35m前後」と推測されている。

[墳丘の築造] まず墳丘裾部を削り出し、その後に盛土をしている。盛土は削り出し整形によって生じたローム土・泥岩などが多量に混入した暗黄褐色土・暗褐色土・暗灰色土を用いたもので、墳頂部で80cm、裾部で10cm前後盛られている。盛土は、搗き固めながらおこなったもので、順序は外周裾部からはじめて、徐々に墳丘中央にむかい、最後に墳頂部を固めている。

[内部主体] 内部主体は、墳丘中央部から北東方位を主軸にして2基検出された。調査者は、南寄りの長大のものを第1主体部、その北側1.5mのところから検出されたものを第2主体部と呼称している(第4図2・3)。これらの特徴を要約すると

- (1) 第1主体部は、旧表土中に長さ約10m、幅3~3.7mの墓壙を掘り込み、そのなかに 木棺を直葬している。墓壙の堆積土は、泥岩が多量に混入した暗黄褐色土・暗褐色土な どで構成されている。
- (2) 木棺のサイズは、外法最大長8.2m、幅80~90cmで、深さ70~95cmをはかる。主軸方位は $N-59^\circ-E$ で、主軸と直角に交差する断面形は、U字状になる。また両小口には、青灰色粘土が充塡されていたほか、木棺の東側底面には、棺に沿って長さ1.7m、幅80cmの範囲に白色粘土が敷かれていた。
- (3) 木棺の埋葬過程は、①旧表土中に墓壙を掘る。その際、木棺を安置する部分は若干余分に掘り窪めておき、その部分の土は壙底にとどめておく。②木棺の安置とともに、壙底にとどめておいた土でかたく搗き固める。③そのあと墓壙内を10~40㎝の厚さで丁重にかたく搗き固めていった。

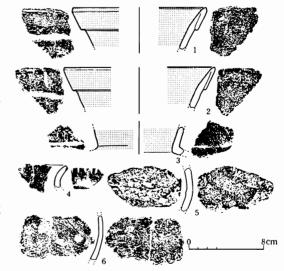
以上は第1主体部である。つぎに第2主体部を要約しておく。

- (1) 墓壙は第1主体部と異なり、盛土した封土中から掘り込んだもので、その底部が10cm ほど旧表土中におよんでいる。主軸方位は、第1主体部とほぼ同一方向でN-54°-E をはかる。
- (2) 墓壙の規模は、最大長5.8m、幅1.1~1.7mをはかる長方形で、深さは70~80cmと推測されている。しかし、確認できる旧表土中への掘り込みは10cmほどである。 これらの特徴から、第1主体部には、墓壙中に割竹形木棺が直葬されてたのであろう。

一方,第2主体部は,報告書では「擴穴」とのみしか記されていない。 事実,遺構の遺存状態からは,組合 せ式木棺が存在したのか,割竹形木 棺かの判断がむつかしい。墓壙の規 模などは,久地伊屋之免古墳の第2 主体部と類似するところもあるので, 組合せ式木棺の可能性を想定してお きたい。

[出土遺物] 第1主体部と第2主体部からは、副葬遺物が検出されている。

第1主体部の棺床底面からは、鉄剣・



鉄鏃・鉇が各1点、軟玉製勾玉・碧玉 第5図 虚空蔵山古墳墳丘盛土下出土の土師器拓影製管玉が各1点、緑色凝灰岩製管玉10点が検出されている(第4図4・5)。それぞれの出土位置と遺物の形態は、第4図2に示したとおりである。とくに鉇は、全長20.2cm、刃長3cmをはかる大形の優品で、茎部には2~3重に巻いていたと思われる布が遺存していたという。

第2主体部の壙底からは、滑石製勾玉2点、滑石製管玉1点、緑色凝灰岩製管玉1点、滑石製臼玉21点が検出されている(第4図6)。

第1・2主体部以外では、墳丘頂部周辺の盛土下の旧地表面から土師器――壺・甕形を呈する五領式の小破片約20点――破片が出土している(第5図)。これらは葬・祭の儀礼にあわせて、意識的に破砕して撒布したものであろう。

第1主体部と第2主体部における相関性を整理してみると、つぎのようになる。

これと類似する相関性は,久地伊屋之免古墳の第1主体部と第2主体部でもいえる。

この関連をべつの言葉におきかえれば、両古墳とも第1主体部の被葬者こそが当該古墳の真の造墓者であろう。第2主体部も、第1主体部と方位を揃えるなど顕著な類似性が窺えるので、とうぜん親族の者が埋葬されたのであろうが、木棺の形態が長大な割竹形木棺でなく、小形の組合せ式木棺であった可能性がたかい点は考慮する必要がある。たとえば虚空蔵山古墳第2主体部の被葬者像を少し大胆に推理すれば、副葬遺物が玉類のみである点から女性の可能性がたかく、よって第1主体部に葬られた豪族の伴侶、ないしは姉妹というような血縁者ではなかったかと推測しておきたいと思う。

## ふたつの高塚古墳の年代観

いささか唐突に、前章では久地伊屋之免古墳と虚空蔵山古墳というふたつの高塚古墳の 解説にはいったので、ここで順序は逆になるがすこしくその理由を記し、しかる後に築造 時期の年代観などに触れていきたい。

周知のとおり南武蔵の高塚古墳の調査・研究は、おもに多摩川中・下流域や鶴見川流域などに分布するそれを対象に、積年にわたって精力的に実践されてきた経緯がある。とくに昭和40年代になると、鶴見川の支流である谷本川流域からは、前方後円墳・前方後方墳・円墳からなる稲荷前古墳群が発見されたり、最近では多摩川下流域左岸で野毛大塚古墳の学術調査が実施され、複数の内部主体を含む帆立貝式前方後円墳の全容があきらかにされるなど、その成果は十分刮目にあたいする。

これに対して、おなじ鶴見川の支流である矢上川流域では、戦前に調査された大形の前方後円墳である白山古墳や観音松古墳が、三角縁神獣鏡や豊富な鉄製品・玉類などの存在からあまりにも著名であったため、この地域の前期古墳文化は、これらの前方後円墳の歴史的評価を基軸に据れば多くが理解できるものと考えられてきた。

こうした固定的な観念にすくなからざる衝撃を与えてくれたのが、久地伊屋之免古墳で あり、虚空蔵山古墳の存在であった。

繰り返しになるが、表1にふたつの高塚古墳――久地伊屋之免古墳と虚空蔵山古墳――の主要な属性を整理してみた。

まず、ふたつの高塚古墳に共通する要素をあげてみる。

表1 久地伊屋之免古墳と虚空蔵山古墳の比較表

(長さの単位はメートル)

|          | 墳形 | 墳丘径                    | 墳丘高                                 | 墓  |                 | 内部主体  | 副葬・供献遺物  |
|----------|----|------------------------|-------------------------------------|--|-----------------|---|--|
| 久地伊屋之免古墳 | 円墳 | 東西径 16.0 南北径 17.0 (版築社 | (築造時)<br>推定<br>1.8~<br>2.0<br>大の盛土) | (第1主体部)<br>長さ 9.7<br>幅 3.26<br>深さ 0.6<br>(第2主体部) | 長楕円形            | (第1主体部)<br>長さ 7.8<br>幅 0.5~0.7<br>深さ 0.3~0.5<br>(割竹形木棺)<br>(第2主体部)<br>長さ 4.45<br>幅 0.6~0.9<br>ほ組合せ式木棺か) | (第1主体部)<br>鉄鎌1、瑪瑙製管玉1、<br>ガラス製小玉9、蛇紋岩製薬玉1、<br>琥珀製勾玉1、<br>(第1主体部・棺外)<br>壺形土器 2<br>(第2主体部)<br>なし |
| 虚空蔵山     | 円墳 | (推定)<br>径35            | 5.5                                 | (第1主体部)<br>長さ 9.7~1<br>幅 3.1~3<br>深さ 0.8~1       | 10.5<br>3.7 長方形 | (第1主体部)<br>長さ 8.2<br>幅 0.8~0.9<br>深さ 1.1<br>〔割竹形木棺〕   | (第1主体部)<br>鉄剣1、鉄鎌1、絶1、<br>軟玉製勾玉1、碧玉製管玉1、<br>緑色選灰岩製管玉10<br>(第1主体部・上面)<br>土師器破片                  |
| 古墳       |    | 1 77                   | <br>地形の<br> <br>出しが主                | (第2主体部)<br>長さ 5.8<br>幅 1.1~〕<br>深さ(推定)           | } 長方形           | (第2主体部)<br>〔組合せ式木棺か〕  | (第2主体部)<br>緑色凝灰岩製管玉1<br>滑石製勾玉2、滑石製管玉1、<br>滑石製白玉21  |

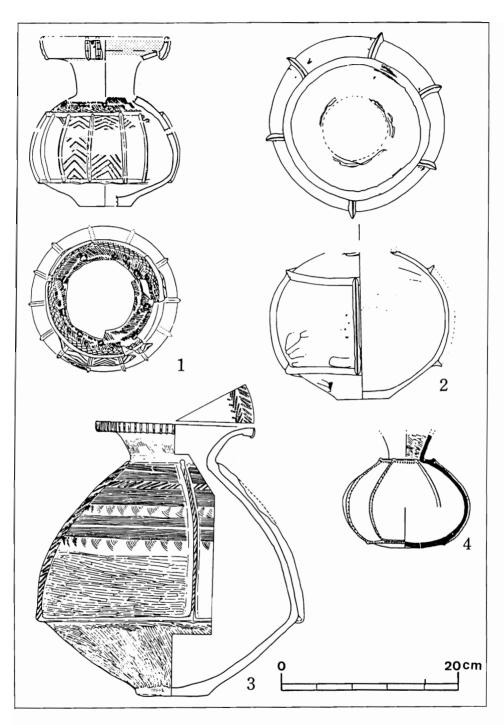
- (1) 墳形が、円墳と推測される。
- (2) 墳丘中央部に第1主体部を設ける。それは明確な墓壙をもつもので、その中心部に長大な割竹形木棺を直葬する。つまり割竹形木棺壙を内部主体とする。
- (3) 墳丘中央部の第1主体部の脇には、親族の追葬を推測させる小形の第2主体部が第1 主体部と主軸を同じくするようにして設けられている。ただし木棺の形態は割竹形でな く、組合せ式の可能性がたかい。
- (4) 副葬遺物は比較的にすくない。玉類が主体で、若干の鉄器がともなう。 これらの共通的な要素に対して、つぎのような異なる属性も指摘できる。
- (1) 墳形はおなじ円墳であるが、虚空蔵山古墳の方が墳丘径・墳丘高ともあきらかに大振りである。
- (2) 久地伊屋之免古墳の封土は旧地表上に盛土しているのに対し、虚空蔵山古墳の墳丘はほとんどが自然地形の削り出しで、そのあとに若干の盛土をしている。後者の盛土は、 裾部から墳頂部にむかってかたく搗き固めるように地業している。
- (3) 久地伊屋之免古墳の割竹形木棺の小口部上方には、明確な供献土器がともなう。 ということになろう。

つぎは、肝腎なふたつの高塚古墳の築造時期である。通常、築造時期の比定には、副葬・ 供献された土器などが有力な論拠にされるが、それに墳丘形態・墳丘規模・埋葬施設・副 葬の品々などを加えて総合的に判断したほうが、より客観性はたかまろう。

まず、ふたつの高塚古墳の墳丘中央の第1主体部が、長大な割竹形木棺壙であった点は、 時期比定のおおきな拠りどころとなる。

割竹形木棺は、時期が新しくなるにしたがい長さを減じてくるとされている(白石1985)。 現在までのところ、4世紀末から5世紀初頭の築造が考えられている千葉県浅間様古墳 (浅川1985)の10.7mが最長のものとして管見に触れている。おそらく、この時期前後が 長さの点ではピークであったのであろう。げんに近隣の高塚古墳では、横浜市緑区市カ尾 の朝光寺原古墳1号墳(円墳・5世紀第皿四半期)の割竹形木棺の場合は、長さ4.3 m、 幅75cmにまで減じ(岡本1968)、後期になると2~3 mのものが多くなる。こうした趨勢 を重視すれば、7.8 m(久地伊屋之免古墳)や8.2 m(虚空蔵山古墳)という長さは、まさ に古期の割竹形木棺である可能性を端的に示唆しているものと理解できる。

では、副葬・供献土器からみたらどうであろうか。虚空蔵山古墳の場合、ふたつの主体部から土器の検出はなかったものの、墳頂部周辺の盛土下の旧表土面から五領式期の破片が、破砕されたかのような状態で発見されている。後で比較する機会があろうが、白山古墳(柴田・森1953)の後円墳頂部の浅い封土中からも「土師器の破片を少量」、南粘土槨上面の封土中から「多量の土師器片」が発掘されている。こうした墳頂部周辺で土器を破砕する風は、関東地方の前期古墳ではしばしば認められている。虚空蔵山古墳の場合も土



第6図 縦・横位に突帯のある土器集成(1・山王山遺跡, 2・安戸星古墳, 3・伊場遺跡, 4・城郷中学校敷地遺跡)

師器は墳頂部周辺の盛土下の旧表土面から発見されている。これが葬儀の最終段階で完形の容器を故意に破砕するという重要な儀式の存在を示唆するものであったとすれば、五領期という形式表徴は、古墳の築造時期を比定する際の有力な根拠となる。これは長大な割竹形木棺を墓壙に直葬することが流布する時期とも見事に符号している。

久地伊屋之免古墳の場合は、第1主体部から口縁部と底部を欠く壺形土器が2個体出土している。うち主体部のほぼ中央の北壁際から検出された1点は、無文の胴部のみのため形式表徴は特定できない。その点、主体部の西端粘土上に供献されていた土器は完形品ではないが、その特異な文様からしておおいに問題になるところである。

この土器の最大の特徴は、頸部と胴下半部をめぐる横位の突帯、これと連結する2本1組で4単位の縦位の突帯にあることは明白である。私たちが知るかぎりでは、これと瓜二つという事例はない。類例をあげれば、高塚古墳では茨城県水戸市の安戸星古墳(全長28.3mの前方後方墳)、集落遺跡では神奈川県横浜市山王山遺跡、神奈川県横浜市城郷中学校敷地遺跡、静岡県浜松市伊場遺跡などからの土器があげられる(第6図)。

久地伊屋之免古墳出土例は、胴部最大径が30cmをはかるのに対して、安戸星古墳(茂木ほか1982)例は19.6cmであるから、まず小振りであることがわかる。加えて前者では、縦位の突帯が2本1組の4単位であるのに対し、後者では縦位1本の6単位で胴部を分割している。しかし、総体的なプロポーションは類例中ではもっとも似ている。安戸星古墳の調査者は、胴部の縦位突帯の類似性を西日本の弥生時代後期前半の土器に求めつつも、結論的には帰属時期の明言を避け、外的要素によって将来された可能性を示唆している。

集落遺跡のなかから類似する代表選手を選ぶならば、久地伊屋之免古墳と地理的にもさして遠くない横浜市港北区小机町の城郷中学校敷地遺跡(神沢1968)から発見された小形壺の弥生土器が最右翼であろう(写真 2 )。それは胴部で胴下半に横位の突帯、これを結ぶ



写真 2 神奈川県・城郷中学校敷地遺跡出 土の弥生土器(神沢勇一氏提供)

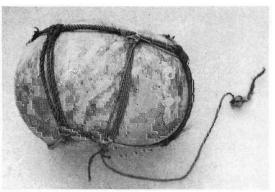


写真3 韓国・済州島のパク (渡辺誠氏提供)

ように間隔のあいた2本で4単位の縦位の突帯が貼り付けされている。

比較的最近の報告では、横浜市港北区岸根町の山王山遺跡(河野ほか1985)の第21号住居から類似した壺形土器が発掘されている。遺構の時期は、弥生時代後期の久ヶ原式期である。東海地方方面の資料では、浜松市西伊場の伊場遺跡(向坂ほか1982)YT5出土の「ひれ付土器」が著名である。胴部下半には、横位の突帯がめぐり、それと頸部を結ぶように縦位の突帯が4本貼り付けされている。時期は、弥生時代後期の伊場式期である。

おそらく安戸星古墳の調査者が、西日本の弥生時代後期の土器に類似を求めながら帰属 時期の明言を留保されたのも、あるいはこれを高塚古墳への供献時期に連動させると、あ まりにも時間的に齟齬感が生じるので、そこに躊躇が生じたのではなかろうか、という穿っ た見方もしたくなるのである。

ところで神沢勇一氏は、先の記した城郷中学校敷地遺跡発見の突帯付壺形土器を紹介された折、伊場遺跡の事例を考慮しながら、これらが南関東地方から東北地方南部の沿岸に点々と分布しているとし、それはおもに黒潮海路によって伝播したものではなかろうか、と重要な指摘をされた。とくに近年は、弥生時代後半から古墳時代前期にかけて、東海地方から多くの土器が南関東地方に搬入されている事実があきらかになりつつある。それらの出土遺跡の多くが、海や河川に面する立地景観に分布するところから、有力な伝播経路としては、相模湾から三浦半島、千葉へ抜けるルート、あるいは多摩川を遡及するルートなどが比較的具体的に指摘されている(比田井1985)。

この海という視点からみると、韓国・済州島のパク(ヒョウタンの一種、日本のカンピョウにあたる)が、本土器の文様・器形を考えるうえで示唆的であるという御教示を名古屋大学の渡辺誠教授から頂いた。それは写真3でわかるように、縦・横を紐で結び、とくに縦は複数の紐でかたく結縛するものである。横位の突帯が1本、縦位のそれが2本1組というところまで類似する。もちろん、わが国の弥生・古墳時代の考古資料と地理的・時間的に隔絶した彼地の民族資料とを比較して短絡的な結論を導く心算はないが、半面、海洋関係の資料中に久地伊屋之免古墳の供献土器に類似したモチーフが存在する事実は、おおいに興趣をそそられるところである。

このように久地伊屋之免古墳の第1主体部の割竹形木棺に供献されたような縦位と横位を突帯で結ぶ土器は、弥生時代後期の壺形土器に類例が散見できなくないし、また海路による伝播という状況証拠もあがりつつある。しかし、それをもって久地伊屋之免古墳や安戸星古墳の築造時期に比定することは、現状では古墳編年観からすれば明確に否定されよう。では、割竹形木棺内に副葬された玉類などに時期比定につながる資料が含まれていないものであろうか。

玉類のうち、管玉は太くてずんぐりした瑪瑙製のもので、弥生時代から発生期の古墳にかけて多くみられる碧玉製の細長い形態とはあきらかに異なる。

琥珀製の勾玉は、前記したように葬祭用に破砕されていた可能性がたかい。この琥珀製の勾玉の類例は、従来東国では少ないとされてきたが、最近では千葉県浅間様古墳で勾玉を含む多量の琥珀製玉類が発掘されているほか、群馬県角淵古墳(後藤1937)、茨城県丸山1号墳などからも出土している。

久地伊屋之免古墳は、肝腎な供献土器の年代観や出自観が特定しがたいという大きな課題をのこすが、小形の円墳にしてはあきらかに長大な割竹形木棺である点、あるいは量的には少ないが玉類に瑪瑙製・琥珀製の管玉や勾玉、それに鉄鏃などを確実に副葬していることから総合的に判断すると、築造時期は都出編年(都出1979)でいう前期古墳のなかでも最末期の4世紀第IV四半期、降っても5世紀初頭までと推測できる。一方、虚空蔵山古墳の場合は、主体部の副葬遺物から築造時期を特定することはむつかしいが、長大な割竹形木棺壙の存在や墳丘盛土下の旧表土面から発見された土器(五領式期)を参酌すれば、久地伊屋之免古墳とほぼ同時期の築造が推測できるのである。

## 多摩川・鶴見川流域の古墳群の動勢

多摩川・鶴見川流域は、南武蔵でも有数な高塚古墳の集中地域である。つぎに先学の研究成果に依拠しながら、おもに前期古墳の地域的な動勢を整理してみよう(第7図)。

## A. 田園調布 · 野毛古墳群

東京都大田区田園調布から世田谷区上野毛にいたる古墳群で、多摩川の流れを南西方向に望む。初現期の古墳は、墳丘長100m前後をはかる4世紀代の前方後円墳の宝莱山古墳や亀甲山古墳で代表される。最近では野毛大塚古墳の学術調査によって、5世紀前半の帆立貝式前方後円墳から、長大な割竹形木棺壙と豊富な副葬遺物が検出されている。多摩川流域で最古の埴輪を随伴する西岡32号墳は、野毛大塚古墳とほぼ同時期である。

#### B. 砧•狛江古墳群

東京都世田谷区瀬田から狛江市にいたる古墳群で、前記Aの上流域にあたる。多摩川の流れを南方向に望む。代表的な初現期の古墳としては、5世紀初頭の前方後方墳である砧中学校7号墳があり、Aよりも若干遅れて出現する。

#### C. 久地·津田山古墳群

川崎市高津区久地から津田山につづく丘陵部に位置する古墳群で、多摩川の流れを北方向に望む。小論でとりあげた久地伊屋之免古墳がここに属する。津田山からは、津田山1・2号墳(円墳)が発掘調査されているが、時期的には5世紀末まで降ろう。

#### D. 加瀬 · 日吉古墳群

川崎市幸区加瀬から横浜市港北区日吉にいたる矢上川沿いの古墳群。矢上川は鶴見川の

一支流。初現期の古墳は、墳丘長100m前後をはかる4世紀後半代の前方後円墳である観音松古墳やそれにすこし遅れた白山古墳に代表される。加瀬台に築造された了源寺古墳は5世紀中葉、そしてこのグループと少し離れるが、矢上川を遡及した野川に位置する北根古墳は、4世紀末から5世紀初頭ごろの古墳である。

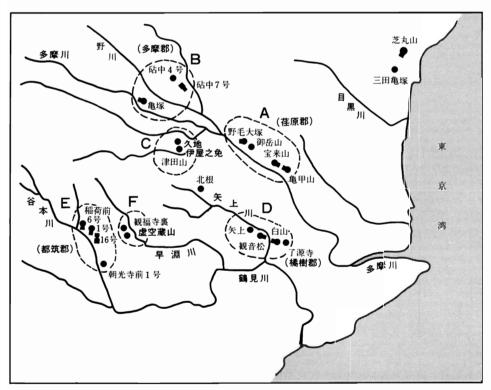
## E. 大場古墳群

横浜市緑区大場の谷本川沿いの古墳群。谷本川は鶴見川の一支流。初現は墳丘長32mの前方後円墳である稲荷前6号墳と墳丘長38mの前方後方墳である稲荷前16号墳で、4世紀後半代の築造である。その後、5世紀初頭の前方後円墳である稲荷前1号墳につづく。おなじ流域には、5世紀第Ⅲ四半期の築造で、長さ4.3mの割竹形木棺壙をもつ墳丘径37mの朝光寺原古墳の1号墳が位置している。

### F. 荏田古墳群

横浜市緑区荏田の早淵川沿いの古墳群。早淵川は鶴見川の一支流。初現期の古墳には、 小論でとりあげた虚空蔵山古墳が位置する。その後、5世紀初頭の観福寺裏古墳へと推移 していく。いずれも円墳である。

便宜的にA~Fの6古墳群に分けてみたが、各群間には墳形・墳丘規模・副葬遺物・内



第7図 多摩川・鶴見川流域の前期古墳分布図

部主体の種類などで相互に異にする部分と同じくする部分とが複雑に錯綜する。

例えば、地理的に連続しているAとBを比較してみよう。まずAの初現期古墳の墳形は 前方後円墳であるが、Bでは前方後方墳であり、時期的にもほぼ半世紀近く遅れる。ただ 内部主体が、墳形の違いにかかわりなく粘土槨である点では共通している。

AとDは、古墳の初現時期をほぼ同じくし、墳丘長・墳形も100m前後の前方後円墳で共通する。内部主体も大形の粘土槨・木炭槨で共通し、副葬遺物も鏡・鉄器・玉類などがいずれの古墳からも豊富に検出されている。ただAでは、初現期古墳の次階梯に割竹形木棺壙をもつ帆立貝式前方後円墳(野毛大塚古墳)が位置づくことと、5世紀初頭の段階から埴輪の囲繞がある点では、Dと様相を異にしている。

Eは、古墳の初現が4世紀後半代で、墳形に前方後円墳をふくむ点ではA・Dに共通する。ただEには、同じ時期に前方後方墳がふくまれる点、墳丘規模があきらかに小形である点、それに連動して副葬遺物は玉類が少量で、鏡・鉄器などは随伴していない点などでA・Dとは異なる。とくにDとの比較で、単純に墳丘長が1/2とか1/3とか表現するが、これを容積にしたボリュウム感に置きかえると1/4なり1/6になる点は十分留意する必要がある。

CとFは、古墳の初現時期こそA・D・Eに比肩しうるが、墳形はC・Fとも当初から 円墳であり、しかも内部主体が割竹形木棺壙をもつ点で、それ以外の古墳群とは明確に峻 別される。

このように多摩川・鶴見川流域の4世紀後半代から5世紀代の高塚古墳群は、各群がき わめて個性的に、しかも独自の歴史的環境を醸成しながら展開していたことがわかる。

また各群の比較から少し視野をひろげて、多摩川の右・左岸の対照をしてみると、埴輪の受容については左岸では5世紀初頭頃であるのに対し、右岸の鶴見川流域では5世紀末頃というように、約1世紀近い懸隔がある。しかも早淵川・谷本川沿い(小論のE・F)では、6世紀代の高塚古墳でも埴輪樹立の風が確認されていない。一方、左岸の高塚古墳で、割竹形木棺を内部主体としているのは、確実なところでは野毛大塚古墳のみで、右岸では久地伊屋之免古墳・虚空蔵山古墳以外にも、朝光寺原古墳の1・2号墳などが知られている。つまり割竹形木棺の受容をめぐっても、地域差のようなものが窺える。

かつて甘粕 健氏は、鶴見川水系の小論でいうDとEの比較のなかで、三角縁神獣鏡を含む多くの鏡や鉄器、そして埴輪の囲繞も受容できたDと、それらの遺物に疎遠なEとの関連性に触れ、Eの首長グループは「前方後円墳を造営して、ヤマト政権との結合を表示してはいるが、ヤマト政権と直接接触することがなく、おそらく下流の、日吉・加瀬の首長(小論でいうD)を介して間接的な結びつきを持っていたに過ぎなかったであろう」と相互に従属的な同盟関係があったと推測された。つまり「ヤマト政権の進出が日吉・加瀬の首長の支配権を強め、(橘花郡と都筑郡の)郡領域を超えた首長の政治的な連合の形成

を促進する作用を及ぼした」とされたのである。また、鶴見川の支流である谷本川・恩田川・早淵川流域には、遺跡群のありかたから弥生時代には有力な農業共同体が形成されていたが、次階梯で有力な古墳群をみることはなかった。つまりこれは、Eの首長グループが「より優勢な、日吉・加瀬の首長に従属的に連合し、さらに上位のヤマト政権に結びつくのも、階級的な同盟によって在地の共同体に対する自己の支配を維持・強化する必要から出ていることが理解されるであろう」とされた(甘粕1975)。言葉をかえれば、ヤマト政権一Dの首長一Eの首長一谷本川・恩田川・早淵川流域の農業共同体(ここには高塚古墳は築造されていない)、という一元的できわめて構造的な支配体系を想定されたのである。

これは昭和50年初頭に到達した代表的な見解として高く評価されよう。だが、その後久地伊屋之免古墳が、そして虚空蔵山古墳が相次いで発掘され、さらに多摩川中・下流域左岸の古墳調査が著しく進捗した現在、はたしてこうした見解がどこまで有効なのか、私たちはふたつの古墳をふまえながら、その史的背景を少しく素描をしてみる必要性を感じたのである。

## ふたつの高塚古墳の史的素描

これら古墳の史的素描には、当面ふたつの方法があろう。ひとつは、古墳を含む当該遺跡の総体的な分析から迫る方法、もうひとつは、その遺跡をとりまく周辺遺跡群――むろん、高塚古墳を含む――との相関性を検証するなかから素描する方法である。

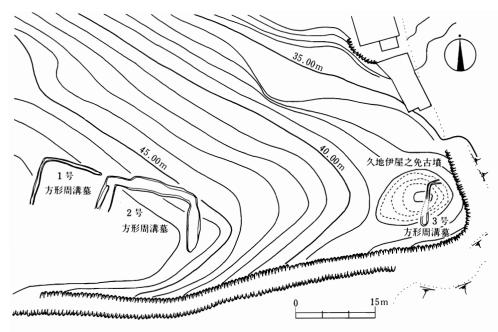
まず前者の方法で、久地伊屋之免古墳と空間を同じくする久地伊屋之免遺跡を検証して みる。

久地伊屋之免遺跡中における久地伊屋之免古墳を語るとき、極めて重視されるのが、3 基の方形周溝墓の存在である(第8図)。

2基(1・2号墓)は、西調査区から発掘調査されている。西調査区は、久地伊屋之免 古墳が位置する東調査区を見下ろす地区にあり、比高差は8.5m前後ある。 2基の特徴を 整理してみると

- (1) 周溝中から発掘された土器の形式表徴から判断すると、1号墓から2号墓へとつづき、 築造年代の下限は、4世紀第II四半期前後と推測できる。
- (2) 1号墓の西溝と2号墓の東溝がぴったりと重複するのは、当初から計画された設計仕様であろう。つまり造墓の主体者は、系譜を同じくしている可能性がたかい。
- (3) 1号墓の最大長が $13.5\,\mathrm{m}$  であるのに対し、2号墓のそれは $20.5\,\mathrm{m}$  で、きわめて大形化し、面積的にもいちじるしく増大している。

つまりここには、造墓主体者の系譜的な連続性と地域指導者としての基盤の強化が秘められているようにも理解できる。しかも造墓の年代的な下限が、4世紀第II四半期前後で



第8図 久地伊屋之免遺跡方形周溝墓(1~3号)と久地伊屋之免古墳の相関図

あると,久地伊屋之免古墳の築造年代 ─ 4世紀第IV四半期 ─ ともさしたる時間的径庭をおかないことになる。

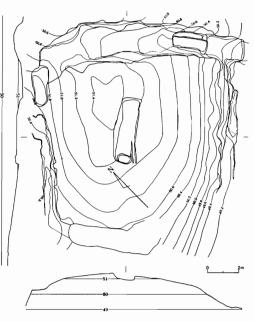
2号墓は最大長20.5mをはかるもので、いわゆる大形方形周溝墓の典型例といえる。東日本では、栃木県向北原遺跡(橋本1986)の最大長36mがもっとも大形のものとして報告されているが、東京湾西岸地域の集計(佐藤1986)では、計測可能な165基中、一辺長が20mを超えるものは、たったの8基(5%)である。つまり、一辺長が20mを超えるような大形のものは、きわめて稀少な存在であることが統計的にも瞭然としている。

こうした大形方形周溝墓に葬られた被葬者層について、向北原遺跡を調査された橋本澄 朗氏は、「共同体成員のなかでの有力家族層ではあるが、まだ辛うじて成員との繋がりを確保している、階級的には未成熟な被葬者の姿が想像される」という。言葉をかえれば、次階梯には絶対的指導者へと転身できるだけの政治的基盤を確保しつつあった被葬者像が浮かびあがってくる。一方の3号方形周溝墓は、久地伊屋之免古墳の封土下の東半分にかかるようにして発掘された。各種の制約があって完掘できなかったのと、土器を検出できなかったので、築造時期の特定はむつかしい。しかし、層位の原則から3号方形周溝墓の築造が先行することは自明の理で、あえて地形景観などから推量すると、両者の重畳は偶然とは思えず、先行する低墳丘墓[方形周溝墓]を意識しながら久地伊屋之免古墳は築造されたのではなかろうか、とさえ想察される。両者は、おそらく多摩川への眺望、あるいは沖積地から仰ぎみたときの視覚というものが十分意識されていたことであろう。

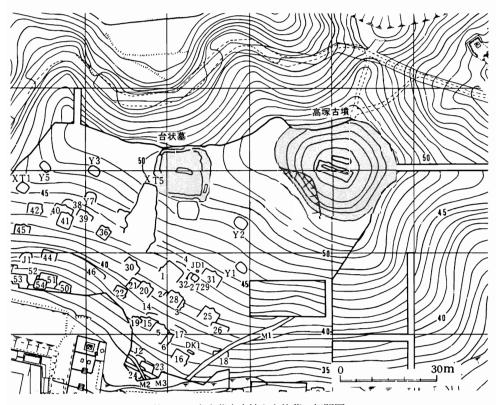
このように久地伊屋之免古墳と1~3 号方形周溝墓の相関性は、時間軸の展開や相互に占拠する空間的な位相、ことに2号周溝墓はきわめて大形で、そこには絶対的指導者出現にむけての胎動が十分に窺える点などから総合的に推測して、久地伊屋之免古墳の造墓者は、方形周溝墓の被葬者との系譜的な連繋のなかから出現したと想定することもあながち牽強付会にはならないであろう。

虚空蔵山古墳が位置する虚空蔵山遺跡 も、これに類似した歴史的環境にある。

虚空蔵山古墳は、4世紀終末期の割竹 形木棺壙をもつ円墳であるが、その南西 約40mの位置から、報告書でいう方形周



第9図 虚空蔵山遺跡の台状墓実測図



第10図 虚空蔵山古墳と台状墓の相関図

溝墓が1基発掘調査されている(第9図)。平面形は長方形で、規模は径 $15 \times 17$  mをはかる。つまり大形の部類に属する。報告書には「裾部は削り出しを行い形づくられた」もので、「北西側は自然の傾斜を利用して部分的に、南東側は早淵川の流路に面するため、視的効果を考え丁寧な削り出しを行っている」とある。内部主体は、墳丘中央部に長方形の壙(長さ $4.5 \times 1.5$  m、深さ $10 \sim 40$  cm)1基と北東溝の東端に、いわゆる溝中土壙(長さ $2.3 \times 0.8$  m、深さ50 cm)が1基発見されている。墳丘と主体部との相関性は、報告書の実測図からもよく窺えるわけで、その実態は報告書でいう方形周溝墓というよりは、自然地形を削り出して墳丘をなし、その四囲に方形の溝が巡る「台状墓」といえよう。

立地景観は第10図でわかるとおり、約20度の南傾斜をもつ丘陵の尾根部に虚空蔵山古墳と意識的に並列するかのようにして築造され、ともに早淵川の沖積地にひろがる氾濫原を睥睨している。とくに虚空蔵山古墳と比較したとき、平面形状が「方」と「円」という相違はあるものの、ともに自然地形を削り出し、明瞭な墳丘のなかに主体部を構築している点、その主体部の主軸方位も早淵川の流路に平行するかのように、台状墓が $N-51^\circ-E$ 、虚空蔵山古墳が $N-59^\circ-E$ で、ほぼ同一方位を指向している点は重要である。

方形の台状墓からは遺物が一切検出されていないので、築造時期の特定はしかねるが、前記してきたような立地景観の類似性、自然地形を削り出すという墳丘築造技術や主体部方位の共通性などから推測して、おそらく方形の台状墓から虚空蔵山古墳へと推移したのであろう。しかも被葬者相互には、系譜的なつながりさえ想定できる。

このように前期の高塚古墳をもつ久地伊屋之免遺跡と虚空蔵山遺跡の生成・発展を個別的に分析してみると、かつて甘粕 健氏が指摘されたような、ヤマト政権を頂点とする支配体制が地域の隅々まで一元的に貫徹してたとする論理ではもはや説明しきれない事実が積み上げられているのである。

では、上記の素描にもうすこし色づけを加えるため、周辺遺跡の情況を探訪してみることにしてみよう。

まず、久地伊屋之免遺跡の周辺では、南西方向に弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡が集中している(第11図)。例えば、久地伊屋之免遺跡とは台地つづきに、緑ヶ丘霊園が造成されている。地形景観から判断して、この広域な平坦部分に古代遺跡が埋蔵されていたことは間違いないが、墓地の造成が昭和30年代から進められていたため、ほとんど発掘調査されることもなく遺構・遺物は湮滅してしまった。ただ、昭和45年6月、土取り工事中に3軒の竪穴住居址が発見され、うち1軒から五領期の甕・壺・高杯が出土している。この小面積の調査からも容易に察することができるように、この緑ヶ丘霊園内遺跡が久地伊屋之免遺跡、なかんづく久地伊屋之免古墳の生成期に深い関わりをもっていたことは十分推測できよう。

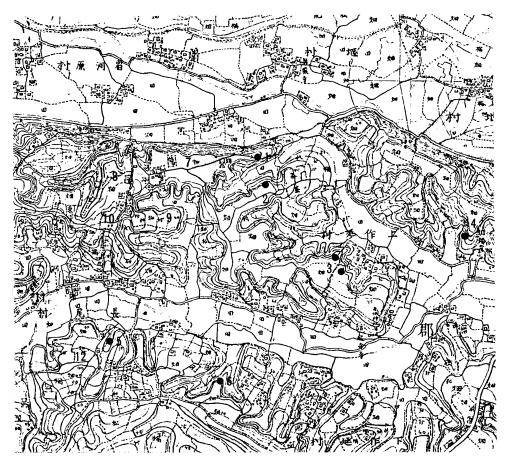
緑ヶ丘霊園内遺跡を南西方向にいくと,長尾の下原遺跡につづく。下原遺跡は縄文時代

後・晩期の集落址として著名であるが、それ以外にも弥生時代の竪穴住居址 4 軒、弥生時 代前野町期から古墳時代五領期の竪穴住居址が 1 軒調査されている。

下原遺跡を南方向にいくと,長尾鯉坂遺跡と長尾東高根遺跡になる。この両遺跡は,現 在,東名高速道路によって東西に分断されているが,明治時代の迅速図から判断すれば, 下原遺跡とあわせて同一遺跡と認定したほうが適切であろう。

長尾東高根遺跡は、神奈川県指定史跡として現状保存されているので、今後史跡整備などの特別の事情が生じないかぎり発掘調査する機会はなかろう。史跡指定以前の試掘調査では、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落址であることが確認されている。

長尾鯉坂遺跡(増子1982)からは、方形周溝墓が2基発掘調査され、久地伊屋之免遺跡との関連性ではもっとも直截的である。すなわち1号墓は、溝3本で「コ」の字状になる平面形状であるが、その規模は大きく、溝外側の計測で20.57mをはかる。奇しくも、久



第11図 久地伊屋之免古墳と周辺遺跡(1・久地伊屋之免古墳, 2・下作延稲荷塚 古墳, 3・津田山古墳, 4・日向古墳, 5・長尾古墳, 6・上作延南原古墳, 7・緑ヶ丘霊園内遺跡, 8・長尾下原遺跡, 9・長尾東高根遺跡, 10・長尾鯉坂遺跡, 11・平風久保遺跡, 12・平遺跡)縮尺 2 万分の 1

地伊屋之免遺跡の2号方形周溝墓の20.5mと規模を同じくする。一方,2号墓は最大長11.7mで,久地伊屋之免遺跡の1号方形周溝墓にちかい。長尾鯉坂遺跡の方形周溝墓からは,遺憾ながら副葬土器など時期を特定できる遺物は発見されていないが,久地伊屋之免遺跡の成果を参酌すれば,1号墓から2号墓へ変遷し,その築造時期も4世紀前半代であった可能性は、想定してよいのではなかろうか。

以上の4遺跡のうち、緑ヶ丘霊園内遺跡と下原遺跡は大河川の多摩川の沖積地を見下ろす台地上に位置するが、長尾鯉坂遺跡と長尾東高根遺跡は、小河川の平瀬川側から湾入した谷戸に劃された台地上にある。その意味では、つぎに記する平風久保遺跡も平瀬川沿いに展開した弥生時代後期集落址の典型といえる。

平風久保遺跡〔東泉寺上遺跡〕(持田ほか1988)の丘陵尾根部分からは、朝光寺原期にほぼ限定される17軒の竪穴住居址が発掘調査されている。詳細は報告書に譲るが、遺構のなかには、長径が10m前後をはかる大形住居址が5軒も含まれているほか、銅鏃とか箱清水系の高杯なども検出されている。かなり広域的に文物の交流ができた集団が、この地に存在したことは紛れもない事実である。しかし、いま挙げたような比較的規模の大きな集落址だけが比櫛していたわけではない。例えば、同じ平瀬川沿いの平遺跡(渡辺・村田1971)のように、久ガ原期・弥生町期・前野町期の三時期に竪穴住居址が各々2軒づつ散在するような小規模なムラも確実に存在していたのである。

また第11図の地形図から窺えるように、地勢からみれば周辺にはまだまだ数多くの古代 遺跡が存在していたものと推測されるが、その部分は既に開発化され、遺跡の様態がまっ たくたどれないのは甚だ遺憾である。

このように、久地伊屋之免遺跡周辺の弥生時代後期から古墳時代にいたる集落址を概観してみると、そこには単純な歴史観では捉えきれない地域史が垣間見られる。なかんづく、長尾鯉坂遺跡の1号方形周溝墓は、規模的には久地伊屋之免遺跡のそれに比肩でき、おそらく築造時期もほぼ雁行していよう。つまり方形周溝墓の被葬者が絶対的な指導者へと転身し、高塚古墳の築造が可能になる層に発展する胎動のようなものが、隣接しあう久地伊屋之免遺跡と長尾鯉坂遺跡の大形方形周溝墓から窺知できたわけで、それを支えた拠点的な集落址が、緑ヶ丘霊園内遺跡や長尾東高根遺跡であったのは間違いなかろう。

つぎに虚空蔵山遺跡周辺の集落址を見てみよう。

虚空蔵山遺跡の隣接地では、赤田地区遺跡群の発掘調査が日本窯業史研究所によって実施され多くの成果があがっている。発掘調査を担当された吉田好孝・渡辺 努両氏の御教示によると、深い谷戸が湾入した丘陵上には弥生時代後期の集落址が9遺跡存在するが、弥生時代終末から古墳時代初頭につづく遺跡は、No.6遺跡のみであるという。

No. 6 遺跡からは、弥生後期18軒、古墳初頭 4 軒が発掘調査されている。このうち弥生終末期のものは 4 軒であるという。これだけであると、比較的小規模な集落址のように思

われるが、じつはNo. 6 遺跡の中心部は調査区外にあり、しかもそこはすでに湮滅していまっているという。つまり調査された地区は、遺跡範囲のごく縁辺部で、本来は相当に大規模な集落址であったと考えられる。さらに吉田・渡辺両氏の御教示によると、この深い谷戸に展開する弥生後期の集落址は、一般的な通念とは逆に、谷戸奥部のほうが時期的に古く、早淵川に近づく谷戸出口にむかうほど新しくなるという興味深い傾向があるという。ちなみにNo. 6 遺跡は、明らかに谷戸口部の集落址で、台地の先端に位置する虚空蔵山遺跡は、ここから東南東方向へ約1 kmの距離にある。つまり虚空蔵山古墳の位置は、巨視的にみれば、谷戸部に展開する弥生後期集落址の延長線上にある。

虚空蔵山遺跡の調査後、北側に位置する観福寺北遺跡(北原1986)や釈迦堂遺跡(渡辺1989)の発掘調査がなされ、五領期の住居遺構などが発掘されているが、今のところ断片的である。さらに近年も発掘調査が計画されているようなので、その成果がおおいに注目される。

## むすびと今後の課題

いささか根拠薄弱な推論を混えながら,久地伊屋之免古墳と虚空蔵山古墳,そしてそれ に関わる歴史的背景を縷々素描してきた。

このふたつの高塚古墳の存在は、昭和50年初頭に鶴見川水系の前期古墳群の動向から甘粕 健氏によって提示された見解、すなわちヤマト政権を頂点にして、隣接しあう地域豪族間相互にも主従関係があり、その支配の論理はさらにその下位の農業共同体にも貫徹していた、とする理解に対し、それと異なった歴史観が新たに成立しうる可能性を主張している点に一定の意義をみだすことができる。

とくに虚空蔵山古墳との関連でいうならば、有力な古墳群をみることがなかった、と目されていた地域のど真ん中から出現した前期古墳であるだけの、そのインパクトは無視できない。加えて、古墳と40mの距離を挟んで隣接しあう方形の台状墓は、前記したように立地景観が虚空蔵山古墳といちじるしく類似し、さらに自然地形を削り出して墳丘を整形する築造技術や主体部方位にも共通性が認められる。方形の台状墓から虚空蔵山古墳という時間的変遷が正鵠を得ているものであるならば、この地で高塚古墳が初現するまでの胎動は、まさに在地豪族の動向のなかに求める思考こそが正当性をもってこよう。

たしかにC. 加瀬・日吉古墳群, E. 大場古墳群, F. 荏田古墳群相互に認められる地域性は, 客観的に色づけできなくはない。例えば, 周知のとおり加瀬・日吉古墳群は, 墳丘長100m弱の前方後円墳で, 三角縁神獣鏡を含む古鏡類や玉類・鉄器などが多数副葬され, 被葬者はのちの武蔵国造職とのつながりさえ想定できる。これに対し, 大場古墳群内の高塚古墳は, 墳丘長が30m代になり, 墳形も前方後円墳だけでなく, 前方後方墳が含ま

れる。しかも副葬遺物に古鏡類や鉄器が含まれず,この点からもあきらかに劣勢である。とくに在地豪族の自立性が色濃いとされる前方後方墳が,前方後円墳と時期的にも先行もしくは雁行している点は示唆的である。この点でも甘粕 健氏の見解は,部分的な修正が必要であろう。そして在地豪族の自立性をさらに濃厚に主張しているのが,虚空蔵山古墳を含む荏田古墳群ということになる。この古墳群では,墳形も出現当初からあきらかに円墳一辺倒で,しかも隣接する方形台状墓に葬られた人物との系譜的なつながりさえ考えられるのである。

一方,久地伊屋之免古墳を含む久地・津田山古墳群を概観してみても,大枠としては類似した歴史的環境が素描できる。

久地伊屋之免遺跡からは、まず久地伊屋之免古墳につながる確率がたかい方形周溝墓が発掘調査されている。それも年代的な下限は4世紀第Ⅱ四半期前後で、最大長が20.5 mというきわめて大形のものである。またべつの1基は、久地伊屋之免古墳の墳丘下に重畳するようにして発見されている。

こうした久地伊屋之免遺跡本来がもつ歴史的環境に加えて、周辺に位置する緑ヶ丘霊園 内遺跡、長尾東高根遺跡、長尾鯉坂遺跡などで垣間見られる知見、例えば前二者は弥生時 代後期から古墳時代初期にいたる時期の大集落址である可能性がたかいこと、また後者で は、久地伊屋之免遺跡と同様に4世紀前半代の築造と推測できる最大長20m余りの方形周 溝墓が発掘調査されているという事実を看過することはできない。最大長20m余りの方形 周溝墓が、いかに傑出した存在であったかは再び繰り返さないが、ともかくもそうした歴 史的環境が久地・津田山・長尾周辺の地に、徐々にではあるが着実に醸成されていたから こそ久地伊屋之免古墳は出現し得たのであろう。

ただ久地伊屋之免古墳の評価のなかでもっとも苦慮するのは,第1主体部の西端粘土塊の上位から発見された,縦・横位に紐状の粘土突帯を貼りつけた壺形土器の出自や年代観がいまひとつ明瞭にできない点である。この土器が,現在までに私たちが得た乏しい情報のとおり,関東地方から東海地方の海岸沿い,ことに東海以西の弥生後期の土器に親縁性があるとすれば,この高塚古墳の被葬者は,単に在地で傑出していた豪族という評価だけでは不十分となる。つまり,加瀬・日吉古墳群中の三角縁神獣鏡(白山古墳)で代表されるヤマト政権とは異なるルートで西方の権力と連合していた豪族像を描く必要性が生じてくるからである。

報告書刊行後、折りをみて東海地方から畿内の弥生土器周辺の事情に精通されている関係者に類例を照会しているが、なかなか良好な情報を得るにはいたっていない。引き続き 蒐集に努めていきたいと思っているので、諸兄の御教導をお願いする次第である。

ところで、ふたつの高塚古墳が生成した背景を考えるうえで、早晩取り組まなければならない課題のひとつは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての周辺集落遺跡の解明で

ある。緑ヶ丘霊園内遺跡、長尾東高根遺跡、長尾鯉坂遺跡の現状は既にふれたとおりであるが、参考までにこうした相関性を知る一例として、日吉・加瀬古墳群と川崎市中原区神 庭遺跡の集落址を見てみよう。

神庭遺跡(関・大三輪1974)は、縄文・弥生・古墳時代にいたる複合集落址で、白山・観音松古墳とは矢上川を上下すること 3 kmの位置にある。集落址の主体は、弥生後期から古墳時代初期にある。内訳は久ガ原期の竪穴住居址15軒、弥生町期20軒で、この間にやや増加する。つぎに前野町期と五領期になると、その数はいちじるしく増加し、両時期をあわせると50軒は優に超える。しかし和泉期になると 2 軒に激減、そして後期の鬼高期が 9軒で、ようやく復興する。

神庭遺跡の報告書がいまだ概報しか出されていないので、これ以上の分析はできない。 ただ神庭ムラの興亡史に限れば、白山・観音松古墳の築造時期とつよい相関性があること は確実で、これら古墳の築造がいかに広範な地域共同体と連動した記念物であるかは首肯 できる。同様な視点から、久地・津田山古墳群と周辺集落址の関連性が、既往の知見に加 えて、将来もっと実証的に歴史復元できないものかと期待しているところである。

最後に、ポスト久地伊屋之免古墳・虚空蔵山古墳はどうなるのであろうか。

久地・津田山古墳群,すなわち多摩川に直面する丘陵とその南方を流れる平瀬川を挟んで位置する丘陵上には、現在知るかぎり久地伊屋之免古墳以外に津田山古墳、下作延稲荷塚古墳、日向古墳、長尾古墳、上作延南原古墳が確認されている(第11図)。

このうち、下作延稲荷塚古墳(浜田1992)は墳丘径23.5 m, 高さ2.9 mの円墳で、馬の埴輪が発見されたということから6世紀末頃の築造が推測されている。日向古墳(佐藤・伊東1988)は墳丘径30 m, 高さ4.5 mほどの円墳で、円筒埴輪・形象埴輪(人物)の囲繞が確認されている。6世紀末ごろの築造と推測されている。津田山古墳(伊東1965)は2基からなり、1号墳は墳丘径26 m, 高さ2.7 mの円墳、2号墳は墳丘径29 m, 高さ3.3 mの円墳である。2号墳の封土中からは和泉期の高杯1個体が発見されているので、5世紀末まで降ろう。長尾古墳と上作延南原古墳は、ともに未発掘で、前者は墳丘径11 m, 高さ2 mの小円墳、後者は墳丘径16.3 m, 高さ2.5 mの円墳である。遺憾ながら築造時期は特定できない。

このような調査研究の現状から、久地伊屋之免古墳の被葬者によって確立された覇権が どう継承されたものか、その追跡は容易ではないが、古墳相互の位置関係とか築造時期の 継続性などを考慮すれば、とうぜん津田山古墳の被葬者には、直接か1代程度の世代を挟 んで継承されたことであろう。ただ、この地に確立された覇権がその後も強固であったか どうかは疑わしい。というのも、津田山1・2号墳がともに墳丘径30m弱、高さ3m前後 の円墳で、規模的には明らかに発展しているが、肝腎な内部主体は学術調査したにもかか わらず確認できなかったからである。内部主体が未検出であった理由については、一般的 には未完成説が人口に膾炙しているが、発掘調査された伊東秀吉氏は、この時期になると 内部構造がいちじるしく簡略化するので、木棺などを直葬した可能性を考慮されている。 いずれの説をとるにしても、この地に確立された覇権にすでに衰微のようなものを垣間見 ることができるわけで、周辺集落址の発掘成果が、将来これに加味できれば、歴史像はさ らに鮮明になろう。

ポスト虚空蔵山古墳については、谷ひとつを挟んで北北東約160mの台地先端に位置した観福寺裏古墳(北原1986)が続くものと考えられる。この古墳は、墳丘径約15m、周湟が続っているのでそれを含めると直径約19m、高さ2.2m前後の円墳となる。墳丘の築造は、虚空蔵山遺跡の台状墓や虚空蔵山古墳と同様に、地山を削った後に盛土したものである。内部主体は検出されなかったが、周湟中より出土した壺・坩形土器から5世紀初頭の年代が導きだされている。観福寺裏古墳以後については、いまのところ明確でないが、吉田好孝・渡辺 努両氏の御教示によると、観福寺裏古墳のさらに北側の台地先端にも高塚古墳と思われる高まりが2、3ヶ所確認できるという。今後の解明に期待したい。

甘粕 健氏ら先学が再三指摘されているように、加瀬・日吉古墳群と大場古墳群とでは、相互の勢力基盤に優劣があるのは明白で、さらにいえば、初現期から墳形が円墳で、割竹形木棺壙を内部主体とする荏田古墳群とは、もっと峻別する根拠が明快である。三者の関係をきわめて比喩的に表現するならば、大・中・小豪族の割拠ということで、おそらくこの三者間は勿論のこと、周辺地域の豪族を含めて、覇権をめぐる合従連衡がしばしば繰り返されたことであろう。

その歴史がどこまで具体的に復元できるか、それはこれからも続くであろう高塚古墳や 周辺集落址の調査にかけられているのである。

\*

小論をおこすにあたっては、次に記する方々から貴重な御指導や資料などの提供を受けている。明記して深く感謝の意を表する次第である(敬称略・五十音順)。

今井康博 神沢勇一 小池 汪 鈴木重信 須山幸雄 寺田良喜 浜田晋介 橋本澄郎 吉田好孝 渡辺 努 渡辺 誠

とくに早稲田大学久保哲三教授には、久地伊屋之免古墳報告書作成に際し、わざわざ川崎考古学研究所までお出掛け頂き、遺物を手にして懇切な御教示を得た。その後、しばらくして、先生の悲報に接しようとは――。思い出しても悲痛のかぎりである。今、この小論をおこすにあたって、改めて生前の御教導の数々に思いをめぐらす次第である。

(なお小論で引用した図版は、各報告書などから転載させて頂いたもので、一部加除等させて頂いたことを明記し、寛恕を願うものである)

#### 注記

- (1) 久地伊屋之免古墳の墓壙充塡土は、ローム・ブロックとローム粒であったが、虚空蔵山古墳では 泥岩が多量に混入した暗黄褐色土・暗褐色土であったし、栃木県山崎古墳1号墳では鹿沼軽石土で あった。このように墓壙充塡土は、地域によって異なるわけで、その観察はおろそかにできない。
- (2) この種の内部主体を墓壙とせず、槨とみる考えも当然ある。ただ、故久保哲三教授の御教示によると、栃木県宇都宮市愛宕塚古墳では、断面U字状の舟形木棺埋設部の両端セクションが層状的に一致していた。したがって、はじめに大きく壙を掘って一旦築土し、墓主の死が確認された後、舟形木棺のサイズに合わせるように壙内を掘りあげたものと推測されている。小論でとりあげたふたつの高塚古墳の木棺も、ほぼ同じ過程を経たものであろう。小論では、はじめに掘られる墓壙の存在を強く意識して割竹形木棺壙とした。

久保哲三 1990 『下野 茂原古墳群』字都宮市教育委員会。

- (3) 世田谷区教育委員会の寺田良喜氏の御教示を得た。
- (4) 間壁葭子氏によると、一古墳の中心的埋葬が2体である場合、性別がわかるかぎりではまず男女であるという。

間壁葭子 1991 「古墳と女性」『歴史評論』No. 493号。

- (5) 地域分類にあたっては、世田谷区郷土資料館の特別展『多摩川の古墳』1984を参考にしていることを明記しておく。
- (6) 最近,多摩川・鶴見川流域の古墳出現前夜の様相に論及された森 達也氏は、この地の古墳の出現は、弥生後期の在地勢力が伸展し、高塚古墳を生む政治集団に変質したという視点を強調される。小論で触れたように、古墳前夜の集団の経済基盤を重視する点では私たちも賛意を表する。しかし、白山古墳の三角縁神獣鏡や豊富な鉄器類の副葬を直視するならば、この地にヤマト政権の側からの覇権が確実に及んでいた事実はもっと高く評価すべきであろう。

森 達也 1992 「東国における古墳出現の一様相」『古代探叢』Ⅲ。

(7) この種の問題については、岩崎卓也氏の見解が注目される。すなわち関東地方の弥生後期末から 古墳時代前期に盛行した高杯が、伊勢湾地方で成立した欠山式系統であることから、まず関東と伊 勢との強いつながりを想定された。一方、奈良県纏向遺跡における搬入土器のうち、畿外の半数は 伊勢湾地方のものであったことから、東日本と近畿圏との関係は、伊勢湾を介すると考えられた。 つまり近畿の首長層と直結していたのは、伊勢湾地方の首長であって、東日本の首長はそれを介し て王権と連合していたに過ぎず、しかも近畿と伊勢湾の首長は、長大な埋葬施設を祭祀のイデオロ ギーとして共有する、という共通の基盤にたっているという。また関東地方では、古墳出現期に東 海系土器が伝播し、割竹形木棺の採用期には東海系土器が消滅、近畿系の土器が流布するという。 岩崎卓也 1988 「埋葬施設からみた古墳時代の東日本」『考古学叢考』中巻。

こうした事象が認められているだけに、久地伊屋之免古墳の縦・横に突帯をもつ土器などは、その出自が注目されるのである。

(8) この前期古墳や周辺集落址で見られる盛衰が、『日本書記』安閑紀(534年)の武蔵国造職継承をめぐる内乱と四屯倉設置に関する記事と関連するものかどうかは、常に議論になる。たしかに安閑紀の記事と考古学的な事象との間には、約1世紀の時間的なズレがある。しかし石野博信氏は、5世紀後半からヤマト政権内に大王位継承をめぐる動揺がつづき、それに連動して各地の豪族が一連の反乱を興したとみ、安閑紀の記事は、そうした背景のもとで後の編纂時に仮託されたものであるという。つまり安閑紀の事件を約1世紀遡らせれば、考古学的な事象と矛盾しないことになる。

石野博信 1985 「連載講座 古墳時代史 反乱伝承と古墳(2)」『季刊考古学』第12号。

- (9) 例えば、白山古墳や観音松古墳の墳丘下からは、弥生時代後期の竪穴住居址が発掘されている。 甘粕 健 1963 「古墳時代」『横浜市史』第1巻、横浜市。
  - また最近、川崎市市民ミュージアムが実施した夢見ヶ崎古墳群の調査でも弥生時代後期の竪穴住 居址が発掘されており、公園部分全体が弥生後期から古墳時代にかけての集落址であろう、という 推測が可能になってきた。
- (III) これを単純に在地豪族の権力基盤が脆弱していったと理解するか、あるいは(8)の注記のところで触れた安閑紀の記事に連動させて、屯倉設置という権力が介入されたその影響とみるかは、さらに考古学的な事象とのつきあわせが必要であろう。

#### 参考文献

浅川 幸一 1985 「(大厩) 浅間様古墳」『市原市文化財センター年報・昭和59年度』 市原市文化 財センター。

甘粕 健 1975 「古墳の形成と技術の発達」『岩波講座 日本歴史』 1,岩波書店。

伊東 秀吉 1965 「川崎市津田山古墳」『川崎市文化財調査集録』第1集,川崎市教育委員会。

岡本 勇 1968 「朝光寺原A地区遺跡第1次発掘調査略報」『昭和42年度横浜市域北部埋蔵文化 財調査報告』横浜市域北部埋蔵文化財調査委員会。

河野 喜英ほか 1985 『山王山遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告・8, 神奈川県立埋蔵文化財センター。

神沢 勇一 1968 「東海地方の弥生式土器」『神奈川県立博物館だより』第3号,神奈川県立博物館。

北原 實徳 1986 『神奈川県横浜市観福寺裏遺跡』,日本窯業史研究所。

後藤 守一 1937 「上野国佐波郡玉村町大字角淵古墳」『古墳発掘品調査報告』帝室博物館学報・ 9,帝室博物館。

後藤 守一・大塚 初重 1957 『常陸丸山古墳』丸山古墳顕彰会。

佐藤 善一・伊東 秀吉 1988 「川崎市内の高塚古墳について」『川崎市文化財調査集録』第24集, 川崎市教育委員会。

佐藤 敏行 1986 「東京湾西岸地域における方形周溝墓の研究 I 」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』 IV, 東京都埋蔵文化財センター。

柴田 常恵·森 貞成 1953 「白山古墳 第六天古墳調査報告」『日吉加瀬古墳』三田史学会。

白石太一郎 1985 『古墳の知識・1-墳丘と内部構造-』東京美術。

関 俊彦・大三輪龍彦 1974 『神庭遺跡第2次調査概要』。

都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26巻3号,考古学研究会。

都出比呂志 1986 『竪穴式石室の地域性の研究』昭和60年度科学研究費補助金研究成果報告書, 大阪大学文学部国史研究室。

浜田 晋介 1992 「川崎の埴輪」『川崎市市民ミユージアム紀要』第4集,川崎市市民ミユージア ム

橋本 澄郎 1986 『向北原』, 益子町教育委員会。

比田井克仁 1985 「外来土器の展開 - 古墳時代前期の東京を中心として - 」『古代』78・79合併号, 早稲田大学考古学会。

增子 章二 1982 『長尾鯉坂遺跡発掘調査報告書』,川崎市教育委員会。

向坂 鋼二ほか 1982 「伊場遺跡 遺物編3」『伊場遺跡発掘調査報告書』第5冊,浜松市教育委

員会。

茂木 雅博ほか 1982 『常陸安戸星古墳』水戸市教育委員会。

持田 春吉ほか 1988 『東泉寺上遺跡』, 高津図書館友の会郷土史研究会。

渡辺 努 1989 『横浜市緑区釈迦堂遺跡』、日本窯業史研究所。

渡辺 誠・村田 文夫 1971 「川崎市平遺跡発掘調査報告」『川崎市文化財調査集録』第7集, 川崎市教育委員会。

#### (追記1)

小論の校正時に、『横浜市史』資料編21(横浜市、昭和57年3月)の存在を知り、その中で甘粕 健氏が「市カ尾横穴群の歴史的性格」と題する考察部分を執筆されていることを遅ればせながら知った。甘粕 健氏は、上記の文献で『岩波講座 日本歴史』1(1975)の執筆以後、虚空蔵山古墳で代表される荏田古墳群の存在を踏まえながら、都筑地方の古代史の動向に触れられている。小論に関係する部分を何点か要約しよう。

まず、古墳時代前期の虚空蔵山古墳から後期の矢崎山古墳を経て、後期後半の赤田古墳群につづく 円墳の系列は、早淵川流域を統合支配した単一の歴代首長墓であった(435頁)。そして、古墳時代前 期の都筑地方は、谷本川流域を基盤とする市カ尾地区の首長(小論でいう大場古墳群)と早淵川流域 を中心とする荏田地区の首長(小論でいう荏田古墳群)の二系列の首長の共同統治のもとにあった。 ただし古墳の墳形・副葬遺物の内容などから判断して、両者には身分差があり、それはさしずめ都筑 地方を支配する王と副王のような関係にあった(443頁)と推測されている。

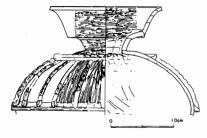
昭和50年時点での見解に較べたとき,新たな発掘成果を踏まえて見解に修正が生じてくるのは責められない。ただし私たちは,小論で重点的に触れたように,古墳出現前夜の地域動向などを微視的に分析してみれば,荏田古墳群が本当に単一の歴代首長墓としてたどれるのか,あるいは市カ尾地区の首長が王で,荏田地区の首長が副王であったのかは,軽々には論断できないという立場にたつ。特に,主要な生産基盤である河川流域に発達した沖積地を背景に,豪族間には覇権をめぐるめまぐるしい合従連衡があり,しかも彼らの勢力基盤は墓制からも窺えるように弥生時代後期以後のそれを基本的には継承したものであると想定している。

いずれにしろこの種の問題は、今後の調査研究のなかでさらに詳細に詰めていく必要性を感じているところである。

#### (追記2)

ごく最近,福島県会津の男檀遺跡の第1号方形周溝墓から粘土紐で縦・横位に突帯をつけた壺形土器が出土していることを知った。時期は古墳時代前期後半。意匠は,久地伊屋之免古墳の事例に類似する。

古川 利意ほか 1990 『男檀遺跡・宮東遺跡・ 中西遺跡』会津坂下町文化財調査報告書,第16集, 会津坂下町教育委員会。



# 中世鎌倉火鉢考

― 東国との関連において ―

河 野 眞知郎

## 1. はじめに

かなり以前からときどき,東国で中世遺跡から土器を発掘した担当者に,鎌倉の土器との対比を求められることがあった。多くの場合それは「かわらけ」であって,鎌倉の編年観が必ずしも東国に通用するものでないことも,かなりあった。その際逆に「こんな土器は出ていませんか」といって「火鉢」の破片を見せると,「いや,見かけませんね」という言葉が返ってくる場合が多かった。鎌倉の中世層にごく一般的な火鉢が,なぜ他の地域で出土しないのか不思議に思ったことがある。しかし報告書をあさってみると,少量ながら各地で火鉢の出土は知られている。

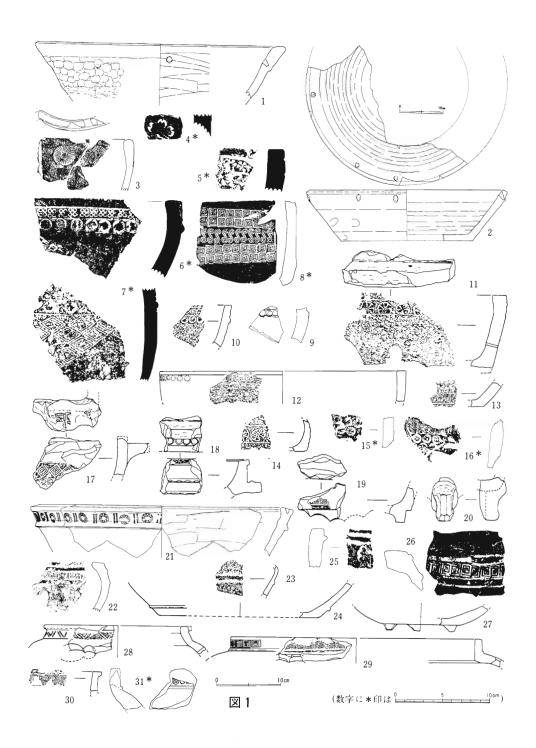
鎌倉の火鉢については、これまで断片的にしかまとめてこなかったので、そろそろきちんと分類・編年を提示しなければいけないと感じていたところである。今回本誌上を借りるにあたって、単に鎌倉の火鉢をまとめるに終らせず、火鉢のあり方をめぐって鎌倉と東国の関連をもさぐってみたいと思う。

## 2. 東国各地での火鉢の出土

東国の中世遺跡での火鉢の出土は、鎌倉以外では微々たるものと言えそうである。これは中世遺跡の調査例が少ないからではなく、住居内で火鉢を使用するような習慣が、寺院や城館などを除いて普及していなかったためと考えられる。そうした中で管見に入った限りではあるが(筆者の怠慢で報告書あさりも充分にはしていないのだが)、東国での火鉢の出土例を少し見ておこう。

図1-1は神奈川県宮久保遺跡出土の、土器質浅鉢形の火鉢である。内面のナデ、外面の指頭痕などは鎌倉の分類(次項参照)のIC類に似るが、口唇形態はIB類に似る。内壁の穴は外面に貫通していない。鎌倉以外の東国では最古の例といえよう。2は栃木県下古館遺跡出土の、瓦質に近い焼きの火鉢で、貫通しない複数の穴が内面にあく。口唇形態は異なるが鎌倉のIC類に近いものと思われる。

3 も下古館遺跡出土で、瓦器質輪花状の火鉢で大きな菊花文スタンプを捺す。鎌倉のⅢ 類そのものといえよう。4 は神奈川県称名寺境内出土で、大きめの桜花文スタンプを捺す。



小片だがやはりⅢ類と見てよかろう。

5~7も称名寺境内出土。瓦器質で小型スタンプを沈線間または横位に並べて捺し、連珠貼付文を加えたりする。鎌倉のIV A類に相当する。称名寺は北条氏の一流たる金沢氏の寺であるから、鎌倉文化圏内とも言えるわけで、火鉢の出土が多いのも異としない。8は福島県梁川町茶臼山西遺跡(東昌寺跡)出土で、小型スタンプを横位に密に捺し、香炉類の可能性もあるが、IV類に近いものといえよう。9は埼玉県川越市天王遺跡出土で、連珠貼付文がみられることから、IV類と考えられる。10~14は静岡県韮山町御所之内遺跡(堀・越御所跡)出土で、小型スタンプを沈線内または横位に捺しており、鎌倉のIV類に相当する。なお11は口唇がやや内に引かれIV B類に近いかもしれないし、14は香炉類の可能性がある。15・16は茨城県水府村山入城出土で、小型スタンプが密に捺され香炉の可能性もあるが、IV類に近いと言えよう。17・18は堀越御所出土で鍔の付くIV C類に当る。鎌倉でも数少い角形の火鉢である。19も堀越御所の肘木状の飾りの付く脚部片で、鎌倉のIV類によく見られるものである。20も堀越御所例だが獣脚ふうの破片で、香炉の大きいものかもしれない。

21は川越市天王遺跡出土で、口縁直下の凸帯間に小型の花文スタンプを捺し、鎌倉のV類に相当する。22は川越市会下遺跡出土で、凸帯間に雷文スタンプを捺す。口縁が内弯する形などは鎌倉の御成小学校内の例(図7-13)によく似ている。V類の典型といえようか。23・24は堀越御所出土で、凸帯を有することからV類とみなせるが、23は土風炉であるかもしれない。25・26は茨城県山入城出土で、凸帯と小型スタンプの組み合わせはV類とみなせる。26は22とよく似ている。27は堀越御所出土の底部片で、これの脚を板状脚とすればV類あたりに入れうるが、無文であることと胴の形状からは大きな香炉の可能性が強い。28~31はV類と関連すると思われる土風炉で、28~30は堀越御所出土、31は梁川町東昌寺跡出土である。土風炉の出土は東国でも決して少なくないと思われるが、火鉢との文様の共通性からV類と同時期以降の所産と考えられる。

 $IV \cdot V$ 類の出土が目立つ韮山町御所之内遺跡は、鎌倉幕府の執権北条氏の本貫地であり、京都系の手づくねかわらけをはじめとして鎌倉と共通する遺物を多く出土している。このように、火鉢類の出土は寺院跡や城館跡に集中していて、農村部での出土はまず皆無といえそうである。また  $I \cdot III$  類の出土はごくまれで、ましてや鎌倉のかわらけに似た II 類は他地域にはなさそうである。そしてIV類以降の火鉢と土風炉・香炉類は、割合に広く出土するとみてよかろう。そこには、中世前期の段階では東国各地にまだ都市的・上流指向的な生活が取り入れられておらず、15世紀以降に在地勢力が寺院や城館を中心に発展を遂げたことがみてとれそうである(土風炉を含めて考えるならば喫茶の普及と関連するともいえよう)。ここにあげた以外にも東国各地での火鉢の出土例はもっとあるのだが、本稿はその集成を目的とするわけではないので、あえて割愛させていただく。

## 3. 鎌倉出土の火鉢の分類

### (1) 分類の基準について

考古学における"土器"の分類は、「型式」設定とその細分という形で行われるべきだが、鎌倉の火鉢の場合、同一の胎土・焼成・整形技法によって異なる器形が作られていたり、同一器形でも胎土・焼成に大きな差があったりして、従来の分類法を直ちに適用することは問題の所在をかえって見失う恐れなしとしない。そこでこれまでも筆者はそうしていたのだが、鎌倉で経験的(感覚的)にしてきた分類を、ここでも踏襲しておきたい。中世の土器は自給自足の品ではなく、商品として流通するものである。しかも大消費地鎌倉への土器供給は単一系統の(同一の型式変化を遂げるような)工房の生産量では賄いきれなかったと思われる。複数の工人集団がシェアを競いあっていたと考えた方がよさそうである。火鉢についても、その生産個体数はそう多くはなかっただろうが、上の考えで分類に当った方が妥当と思われる。基本的には以下の6類に分類できよう。

## (2) I類(図2)

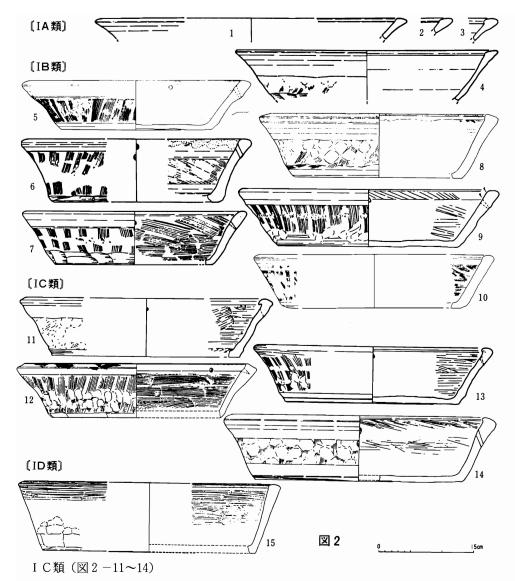
概して土器質で、丸浅鉢形の器形をとるものをまとめた。胎土・焼成と整形などから、A~Dの4類に細分しうる。

#### I A類 (図2-1~4)

側壁の外傾がより開いた形で、口唇の断面が三角形に近いものである。胎土はきめこまかいが粗砂、礫砂を含み、まれに輝粒をも交え、焼成は硬めである。往々にして胎芯は灰黒色で、器表は白色ないし肌色を呈する。胴部はやや薄く、底板は胴より厚めである。底板上に粘土紐を巻き上げて成形したと思われる。まれに截頭円錐に近い突起状の脚が付く。口縁下には孔を有さないようだ(焼成後穿孔の例はある)。鎌倉での出土量は I B、 I C 類に較べると十分の一以下と少ない。

#### IB類 (図2-5~10)

側面観は I C類と同様の逆台形を呈するが、口縁は外反気味にやさしい丸味をおびる。内面は横〜斜位のナデ、外面は口縁下まで横ナデで、胴は指頭痕とハケ目を残し、底脇は横のナデ(へラも使うか)が強い。外底には砂の付着が顕著である。脚が付く例はみつかっていない。 I C類との差は胎土と焼成で、この類は中砂を多く含み軟質で、暗灰褐色を呈するもの多く、より土器的といえる。中には図2-8、10のように口唇内側にふくらみをもつナデ方をしたものもある。口縁下には内面から外面へ焼成前に穿孔したものが目立つが、穴の数は一定せず、貫通していないものもある。この類では口縁内面の上から1/3 ほどに火熱を受けた痕を留める破片が多い。鎌倉での出土量は I C類とほぼ同等で、市街地100 ㎡当510~数十片出土することも珍しくないほど多い。



I B類より口唇端が膨れ、内面側に凸帯状に張り出し、断面形が釘頭状を呈する。整形は I B類と殆どかわらないが、ナデはよりこまかく、外面指頭痕がより目立ち、底脇のナデも鋭い。胎土は砂が少なめで少量の軟礫を含み、焼成はごく硬く締っていて、 I B類に比し持ち重りしない。外底は砂底で、 I B類同様底板上への巻き上げ作りと思われる。やはり脚は付かない。口縁下で穿孔もみられるが、貫通しないものもある。口縁内面に火熱を受けたものも多くあり、 I B類と使用法の上での差はなかったようだ。

## ID類(図2-15)

形は丸鉢形だが胴の立ち上がりは深く、口縁は直口的で丸味をおびる。胎土はこまかな 粉質で微砂を交え、焼成は軟質だが軽い。外面に指頭痕等はなく、口唇から外面上部にか けては、Ⅲ類にみられるような磨きに近いナデが横位に施される。例が少ないので孔の有無は不明だが、おそらく無いと思われる。瓦器質と言って良いようなもので、Ⅲ類と関連するか過渡期的なものかもしれない。今のところ鎌倉でもごく僅かしか出土していない。

#### (3) Ⅱ類(図3.4)

分類法上問題なのはこの II 類の置き方である。この類は形態にかかわりなく "かわらけ質" であるという一点で括っているからだ。他の類が多かれ少なかれ瓦や瓦器に近い土器で,胎土・焼成に幅をもつのに対し,II 類はかわらけと共通の砂混り粘土で,黄褐色ないし暗褐色を呈し,軟質の焼きである。そして器形にかかわりなく(角形を除くが),糸切り底かわらけと同様に回転台上で成形されている。つまり,糸切り底のかわらけという在地に伝統的な土器の製作工人たちが,雑多な火鉢をも生産していたのではないかと考えられるのだ(実はかわらけ工房で作られたと思われる少量の異形品には,仏華瓶,高杯,広口小壺,土人形,土製円板などがある)。広い内容をもつこの II 類だが,出土量はごく少なく,市街地I00 ㎡当りII ~数片といった程度である。それを器形・整形で分類すると,以下II 6 類,あるいはそれ以上になる。

## II A類(図3-1~5)

胴に丸味をもつ浅鉢形で、口縁端が外方に肥厚ないし角張るように張り出す。底板は厚く、外底には糸切り痕を留めるものが多い。口縁内面に火熱を受けたものも多く、口唇の溶融したものさえ見られる。4のように胴部に焼成後穿孔をしたものあって、容器ではなく Ⅰ 類同様に火皿として使われたことがうかがえる。出土量は Ⅱ 類の中では多い方である。

#### II B類(図3-6~8)

口縁端が薄くなり外反する浅鉢で、角錐台に近い板状三脚を付ける。外底面は脚接着時にナデられているが、糸切りではないかと思われる。火処の埋設火皿でなく、Ⅲ類のように板床に置かれる火鉢をめざし、かわらけ工房の者が作ったのではあろうが、出土量はごく少量にすぎない。

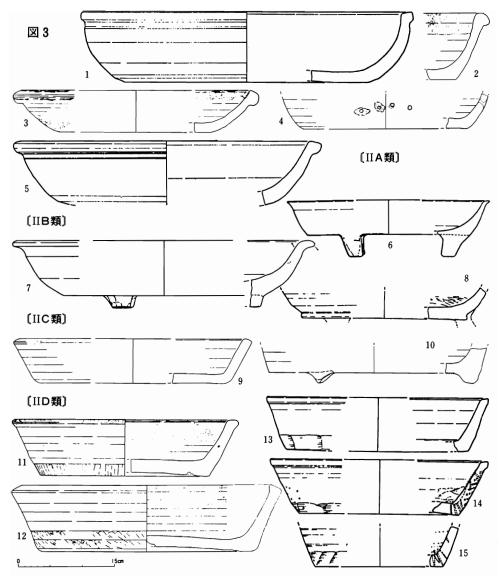
#### IIC類(図3-9, 10)

側面観逆台形をとる直口の浅鉢形で、10のように貼り付けの脚を付けるものもありそうである。出土例がごく僅かで、類としてまとめうるかどうか自信がない。

## ⅡD類(図3-11~15)

側面観逆台形の浅鉢だが、口縁は肥厚ないし外方に角張るようにつき出す。胴下部底脇に強い削りを加えるのを特徴とする。外底は糸切りである。14・15では焼成前に竹串のような細い棒で、貫通したりしなかったりする、一見無意味な刺突孔が多くある。これはⅡ E類にも見られ、この鉢が液体を入れる容器でないことは明らかだが、何のためのものかはわからない。口縁内面に火熱を受けたものもある。出土量はごく僅かである。

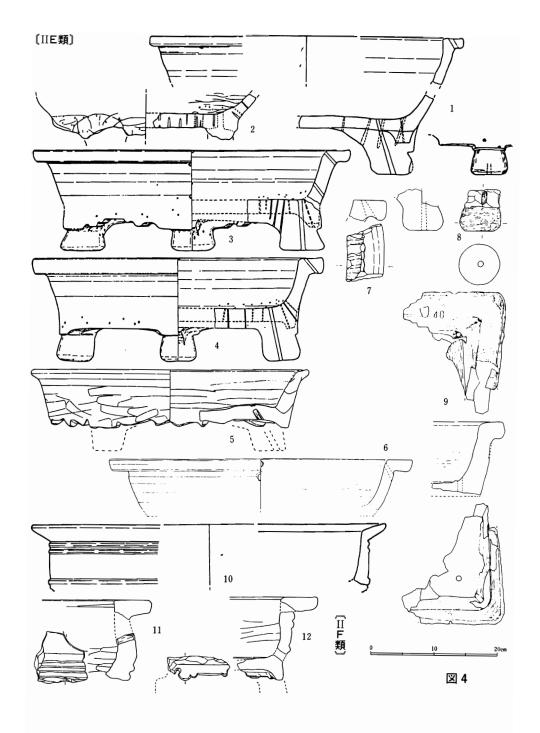
## Ⅱ E類(図4-1~9)



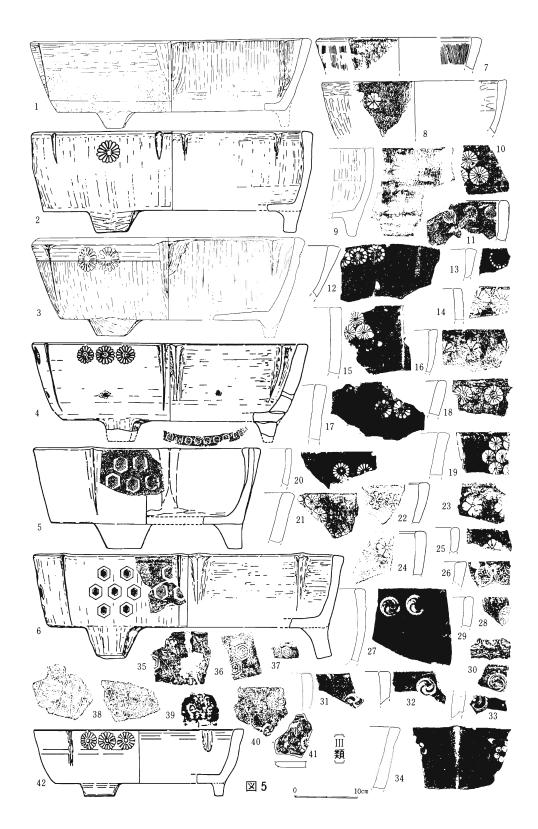
胴部が直線的か丸味をもつかで細分可能かもしれないが、どちらも口縁を折り倒したように外方に張り出す形をとる。太い円錐台状の脚が三つ付き、肘木ふう飾りをつけるものもある。円脚の中央と、口縁を上下に貫通する孔があけられる他、細い棒による刺突孔が胴下部に多数あけられるものもある。基本的には糸切り底であるようだ。IIB類同様の置き火鉢と思われるが、9の角形のものは破片を総合すると一辺40cmを超えそうで、それ自体が火炉であったとも考えられる。円脚は市内あちこちで出土しており、IIA類と同じくらいの数が生産されたと思われる。

Ⅱ F類 (図4-10~12)

Ⅱ E類の胴部に凸帯をめぐらせたものといえようか。12では円脚と肘木ふう飾りが付き



そうである。凸帯文はV類の火鉢に顕著だが, $\Pi$  F類の年代はそこまで降らない。出土量はまだごく僅かで, $\Pi$  E類との区別などはもう少し資料の増加をみないとわからない。



### (4) Ⅲ類(図5)

概して瓦器質で輪花状(六弁と思われる)を呈し、大型のスタンプを胴上部に配し、逆台形の板状脚(三脚)をもつ一群である。図5-7のように輪花状にならないものもあるかもしれない。この群は細分しようにもその手がかりに乏しい。胎土は、IB類に似た粗砂交り軟質土器ふうのものから、軟質礫を含む粗胎の瓦に似たもの、瓦器に似て粉質でチョークのような感じのものまで、変差が大きい。しかしいずれの土で作られたものも器面に磨きが施され、特に胴の縦方向の磨きが顕著で、器表は黒色処理することを基本としている。すなわち、まったく瓦器的な土器といえる。京都で使われていた火鉢を、鎌倉で模倣したのではないかと思われる。底板外面は砂底で(この点西国とは異なる)、板状脚との接着面には粗いひっかきを加える。内底には38、39のごとき斜格子暗文を入れたものが目立つ。スタンプ文は菊花文が多く(実に変差が多いが)、六弁輪花の各弁中央に1個〜数個を捺す。少数ながら桜花文や亀甲文、三巴文などもあり、西国のものより多彩といえる。異種文様が同一個体に捺されることはなさそうである(文様の集成や同笵関係の検討はまだなれていない)。鎌倉での出土量はほぼIB、IC類に相当するほど多く、鎌倉時代後期以降に置き火鉢が家屋内に定着したことがわかる。

### (5) IV類 (図 6, 図 7 - 1 ~12)

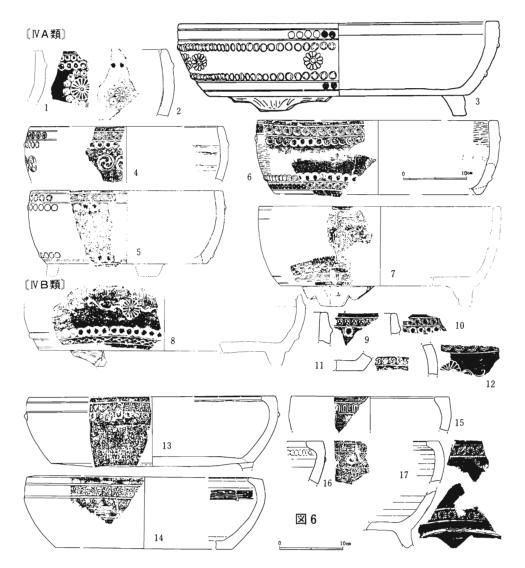
概して瓦器質で、沈線間の小型スタンプ文と連珠貼付文を特徴とする一群である。A、B類とした扁球胴の一群と、C類とした鍔をもつ一群とは別類にした方が良いのかもしれないが、共通した要素もあるので、今回はあえてこの群に括っておいた。

#### **Ⅳ** A類(図 6 − 1 ~12)

扁球状の胴部と肘木ふう飾りの付く板状三脚を有し、口唇端は角張り気味の直口である。胎土は瓦器的な粉質のものから軟礫を含む瓦的なものまでやや幅があるが、焼成は軽く硬めで、土器的なものはまず無い。器表はきわめてよく磨かれ黒色処理され、光沢をもつものも多い。スタンプは口縁と底脇の横位沈線帯間に、小型のものが密に捺される。小型の菊花文が多いが、雷文、三巴文、花菱文、木瓜文などもみられる。その胴寄り下、上側に連珠貼付文がほぼ例外なく付されるようである。連珠文帯間の胴中位に大型の(ただしⅢ類に較べると作りのこまやかな)スタンプが捺されるものもある。二種類以上のスタンプが併用されることもまれではない。底板内面はナデで暗文は入らず、外面は砂底である。鎌倉での出土量はⅢ類に比して激減し、市街地100㎡当り数片といったところで、寺院址に出土の中心が移りそうである。

## ⅣB類(図6-13~17)

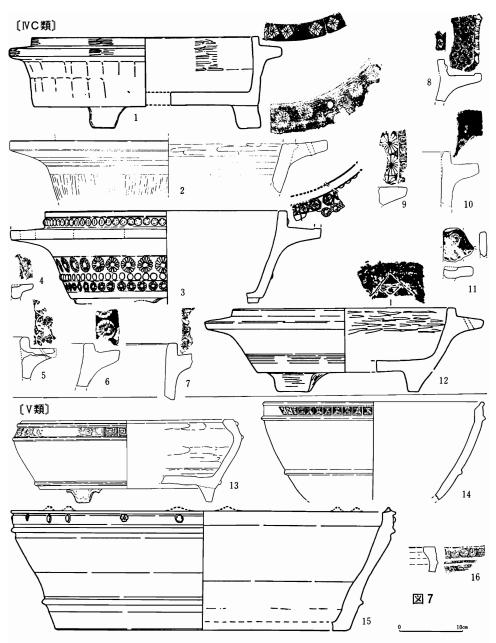
外観はIVA類とさして変わらないが、口縁上端がほぼ水平となり、端部が内方へ引き出される形をとる。この口縁形態はVI類に顕著で、何らかのつながりが考えられる。脚はIVA類より小ぶりで退化したものになりそうだ。胎土はほぼ瓦器質だが、表面の色調に近世



鉛瓦と似た光沢をもつものがみられる。沈線帯間に小型スタンプを並べるのはIVA類と同じだが、胴下部のスタンプ帯がなかったり、連珠文帯が省略されたり、全体にIVA類より後出の退化した一群と考えられる。出土量はIVA類より更に少なく、 $V \cdot VI$ 類同様に寺院関係の場所でごく少量出土するにすぎない。

## ⅣC類(図7-1~12)

浅鉢形の胴の口縁下に広く厚い鍔を付けた一群で、鍔部を中心にスタンプ文を施す。器形の類似からひとくくりにしたが、1,2,12のような単純な鍔付き鉢と、3,8のような細かい装飾をもつものは系譜を異にする可能性がある。いずれも胎土は瓦器質か瓦質で硬い焼きだが、前者の中には土器に近い砂混り胎土で軟質のものもある。器表は磨かれ黒色処理されるが、後者では黒色化せず銀灰色を呈するものもある。スタンプ文様は大きめ



の菊花文や花菱文を鍔上に一列に捺したものから、大小の組み合わせまで多彩であり(異種スタンプの組み合わせがあることはIII類と異なる)、かつ 3、8 のように連珠貼付文を伴うものもある。あるいは、II類の中に成立した鍔付き的な器形が $III \cdot IV$ 類の製作者にひきつがれ、それぞれの施文法で似た製品を作り出していたとも考えられるが、後述の同笵スタンプをもつ例(図11-3、4)が異る胎土であることからすると、同一製作集団による一群の製品の中の変差の範囲内と考えられなくもない。鎌倉での出土量はIVA類よりや

や少ないくらいであるが、市街地での出土もかなりある。

### (6) V類(図7-13~16)

凸帯文をもつことを特徴とする一群である。口唇外端とその下に凸帯がめぐり、その間に雷文や三巴文(巴の頭は膨らむ)のスタンプを配し、胴下部に一本の凸帯をめぐらすのが基本のようだ。胎土はやや粗く、瓦器質というより瓦に近いが、器表は磨かれ滑らかである。13、16のようなIVB類から発したようにみえる扁球胴のものと、14、15のような開いた鉢形のものがあり、二群に細分すべきかもしれないが、いまだ例数に乏しい。この他に玉縄城では角鉢形のものも出土している。鎌倉での出土量はごく僅かで、一応類設定がしうるという程度である。

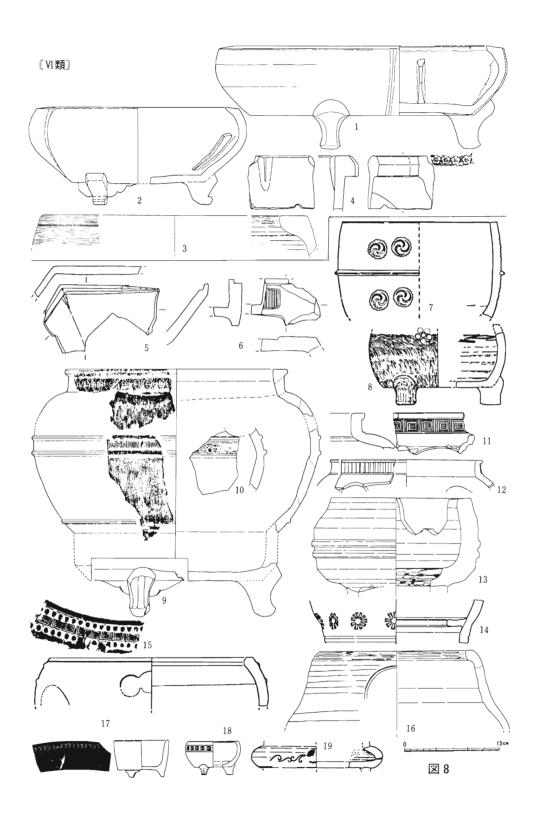
### (7) VI類(図8-1~4)

IVB類の文様を失ったものといえるかもしれない。扁球胴で口縁は水平に内に張り出すが,脚は獣脚系統の形になる。また内部に強化のためか,縦の肋状貼付を付すことも異なる。胎土は白っぽい粉質で,器表はよく磨かれにぶい光沢ある黒色を呈する。最も似た焼きものとしては近世鉛瓦があげられようか。図8-4は角形で口縁外面に小スタンプを有するが,内面に肋状貼付をもつのでこの類に入れておく。図8-1,2のような形は近世江戸遺跡でも見られるようであり,近世につながる一群とみなしうるだろう。鎌倉には中世末の資料はごく少なく,VI類は寺院でわずかに見られるにすぎない。

### (8) その他の参考品(図8-5~9)

火鉢などというものは、一戸の家でそう多くの個体数を消費できるものではなかったろうから、生産量もたいしたことはなかったろう。火鉢だけを専業的に作っていたのでは、土器工人たちの生活は成り立たなかったろうから、火鉢以外の製品を併せ生産した可能性を考えてみる必要がある。瓦質・瓦器質の製品で鎌倉の火鉢と同系の工房で生産されたと考えられるものには、香炉や土風炉類があげられる。図8-7、8のような小型手焙りとも香炉ともつかない形のものは、皿類あるいはIVA類の火鉢生産者が作り出した異形品かもしれない。9~12のような典型的な土風炉は、凸帯文間に雷文などの小型スタンプを捺しており、V類との共通性がうかがわれる(もちろん器形のおこりは西国にあり、奈良火鉢でも両形の生産がなされているようだ)。そうすると13~16のような異形の土風炉も火鉢との関連を考えてよいかもしれない(13は土器質ゆえにIIF類の、14は大型スタンプからIIIの、15は文様からIIIの、16は無文ゆえIIIの人鉢に対応するか)。ただこれらの品はあまりに特異で、例数(出土量)がきわめて少ないため、現時点では結論は下せない。

小香炉類についても、小型スタンプ押捺や連珠貼付文などからIVA類の火鉢と関連づけ うるが、このような形態は西国の瓦器の中に早くから見られるものであり、また東国でも 火鉢とは別系統ではないかと思われるほど広範囲で(少量ながら)出土していて、必ずし



も鎌倉の火鉢と関連させる必要はないのかもしれない。図8-5, 6 は六角ないし八角形の火舎香炉のたぐいと思われるが,類例に乏しい。香炉以外にも瓦器質製品では燭台などが見られるが,そこまで手を広げると推測ばかりになってしまうので,将来の問題として残しておくこととする。

## 4. 鎌倉出土の火鉢の編年

火鉢は生産個体数がそう多くなかったろう上に、消費地での廃棄は割れた破片の散乱といった状態になるので、一括資料をもとにした編年作業などは望むべくもない。さらに鎌倉の遺跡の土層は、前代までのゴミ(遺物)をまき込んだ土が移動させられていて、遺構(覆土)出土品の一括性はまず信用できない。そうした状況下で火鉢の編年を試みるとなると、ある程度時間幅のある包含層出土品を型式的に配列することと、発掘現場での体験的(感覚的)判断にもとづかなければならなくなってしまう。ここで述べる編年観もかなり感覚的なもので、将来良好な一括資料が出てくるならば、訂正されてしかるべきものであることを初めからことわっておく。

さて、鎌倉における火鉢の起源はというと、これははっきりしない。少なくともかわらけの I 類に伴う形での火鉢は、これまで知られていない。市街地の遺跡をざっとみわたしてみると、13世紀中葉頃に I 類の A  $\sim$  C が確立するように思われる。今小路西遺跡(御成小学校内)でも中世第  $3 \cdot 4$  面あたりまでは I 類が大部分を占めており、 I B  $\cdot$  I C 類の年代を13世紀中葉から14世紀前葉に置けそうである。 I A 類は新しい層からの出土がみられないようなので、少し先行する可能性がある。 I D 類は III 類に近い技法が使われており、14世紀に降らせた方がよさそうである。 I 類は鎌倉の火鉢の初源ではあるが鎌倉独自に成立したものではなく、京都で使われていた瓦器の中の一形態(鉢または洗)がモデルになっていると思われる。

Ⅱ類は多彩な内容をもつが,Ⅲ E類の円柱脚片が御成小学校内第 5 面で出土しており,13世紀中葉には I 類を追うようにして生産が開始されていたと思われる。おそらくは I 類の生産開始を見たかわらけ製作工人が,自分たちなりの火鉢作りを始めたのだろう。その際に置き火鉢を作ったことは,そのモデルの有無を今後探らねばならない。 II 類をかわらけ工房の産品とするならば,その盛期は13世紀後葉から14世紀中葉に置けるが,南北朝期に降ると思われるものは II E, II F 類くらいで,意外に短かい時間の所産であったのかもしれない。

■類の破片は御成小学校内の中世第4面には出土しており、 I・II類にそう遅れることなく生産を開始したと思われる。しかし最もシェア獲得に成功したのは、 I 類衰退後の14世紀中葉を中心とした年代と思われる。これは消費者の好みによる変化ではなく、火鉢を

| 類別     | 年代 | 12 | 50 13 | 300 1 | 350 14 | 100 14 | ļ50 15 | 500 15 | 550 |
|--------|----|----|-------|-------|--------|--------|--------|--------|-----|
| I<br>類 | A  |    |       | ,     |        |        |        |        |     |
|        | В  |    |       |       |        |        |        |        |     |
|        | С  | 1  |       |       |        |        |        |        |     |
|        | D  |    |       |       |        |        |        |        |     |
| II     | A  |    |       |       |        |        |        |        |     |
|        | В  |    |       |       |        |        |        |        |     |
|        | С  |    | 100   |       |        |        |        |        |     |
|        | D  |    |       |       |        |        |        |        |     |
|        | E  |    |       |       |        |        |        |        |     |
|        | F  |    |       |       |        |        |        |        |     |
| III    | 類  |    | 4     |       |        |        |        |        |     |
| ▼類     | A  |    |       |       |        |        |        |        |     |
|        | В  |    |       |       | 100    |        |        |        |     |
|        | С  |    |       |       |        |        |        |        |     |
| V      | 類  |    |       |       |        |        |        |        |     |
| VI     | 類  |    |       |       |        |        | 3      | 109/11 |     |
| 土風炉    |    |    |       |       |        | 7      |        |        |     |
| 小香炉    |    |    |       |       |        |        |        |        | N.  |

表1 各類火鉢の存続年代

板床に置くという生活様式(住居様式)の変化によるものと思われる。むしろこの類のモ デルとなったであろう西国の瓦器火鉢の年代が、どれだけ遡るか気になるところである。

Ⅳ類も、IV A類の出現は早くも13世紀の末頃にはありそうだが、盛行期はおくれる。おそらくはⅢ類を駆逐しつつ、14世紀後葉~15世紀前葉がピークと思われる。IV B類はA類の簡略化であると考えられるが、15世紀中葉頃にピークがあるのではなかろうか。IV C類のうち大型のスタンプのものはⅢ類と併行する14世紀前~中葉に、小スタンプをもつものは同末~15世紀に降りそうである。Ⅲ類とIV類は同じ機能をもつ器であり、盛行の前後関係はあるものの、併行する時間もかなりあったと思われる。出土量の差からすると、鎌倉の人口の激減する14世紀末~15世紀前葉の後に、IV類の盛期があると思われる。

V類は15世紀に入っての出現と考えられる。御成小学校内第 5 次調査出土の図 7 −13などは、伴出遺物から15世紀中葉かもう少し降る年代を与えられそうである。一方玉縄城出土の角火鉢は確実に16世紀代に降ると考えられ、この類の年代位置を示してくれる。奈良火鉢もⅣ B 類や V 類は15世紀からの年代になりそうだし、また各地の凸帯文をもつ土風炉も15世紀以降になろうから、V 類の年代もほぼ絞られてこよう。

VI類をIVB類の無文化ととらえるならば、あるいは15世紀代に始まっていたかもしれないが、鎌倉出土のものは八幡宮廿五坊出土例の伴出かわらけを見ても、16世紀以降とみた方がよさそうである。下限は近世にずれ込みそうだが、このあたりは鎌倉に資料が少なく、他地域で解明されることを期待したい。

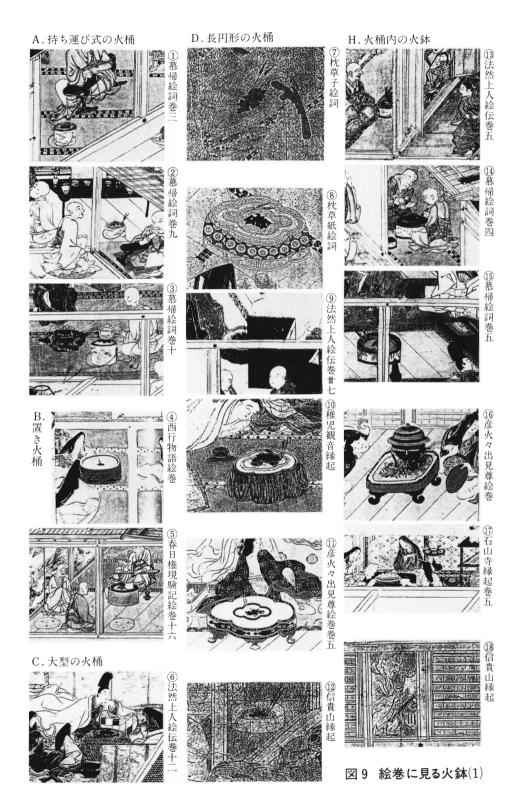
以上のように漠然とかつ感覚的な年代観を表1にまとめておいた。各類の間には併行する時間がかなりあるが、これは火鉢が一系的な型式変化をおこす土器ではなく、複数の工房が異なる製品を生み出し、時にはシェアを競っていたことと理解したい。鎌倉においてはこれ以上に年代を絞り込むことは、よほど良好な層序や一括資料に恵まれない限り困難で、東国各地で少量ながら出土する火鉢とその伴出遺物を、今後詳細につき合わせてゆく必要があろう。

# 5. 火鉢の使われ方

遺跡から出土する土器火鉢は多くが破片になって捨てられたものであり、家屋内での使用状況を示すような出土例は鎌倉でもごくまれである。そこで極めて安易な方法ではあるが(また多くの先学の行なったところでもあるが)、絵巻物資料により火鉢の性格を考えてみたい。もちろん現存する絵巻物の画家たちは畿内西国の人々であり、本稿のごとく東国の考古学資料に直接あてはめる危険性は承知しておかねばならない。ただし、分類の項でも少しく触れたように、鎌倉の火鉢は京都で使われていたものをモデルとしていたようであるから、まったくの的はずれとはならないはずである。図9・10は筆者がざっとあさったところで目に付いた火鉢類の絵で、土風炉と香炉類は含めなかった。

図9-①~⑪はいわゆる「火桶」であって土器火鉢ではない。清少納言が『枕草子』の中で「火桶の炭も白き灰がちになりてわろし」と言っているのはこのたぐいであろう。木 芯の塗りものか巨木を刳りぬいたものと思われる。家屋内の板敷部分に置かれ、内部に灰(あるいは砂)を入れて炭火を保つところは、火鉢と用法の上で変わりはない。ただ考古学的な遺物としては残りにくいものだろう。

⑫は12世紀後葉成立の『信貴山縁起』に登場する、土器火鉢の最古の例と思われる。尼公が旅の途中で一夜の宿を借りた寺の坊の一角に描かれている。曲物の中に丸浅鉢形の火鉢が納められ、火箸も二本そえられている。⑬~⑮は外見は塗りの火桶であるが、中に丸



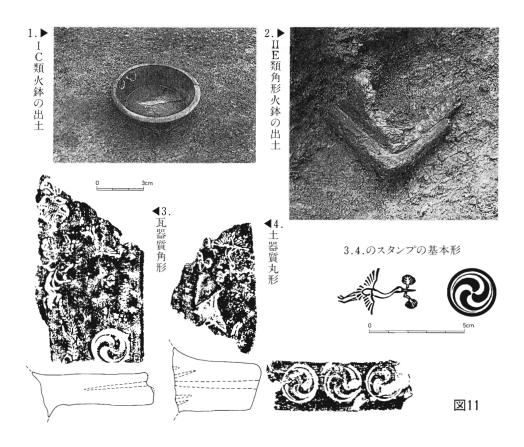


火鉢を据え込んでいるように見える。どうやら丸浅鉢状の土器火鉢は何かの中に据えられて使われていたようである。⑤~⑥でも丸火鉢は角火桶や火炉内に据えられている。これらの丸火鉢は鎌倉の I 類としたものが相当すると考えられる。 I 類の火鉢は多くのものが口縁内面に火熱を受けた痕跡を留めており,鉢内で火を焚いたことが瀝然としている。鎌倉の若宮大路の西側,北条時房・顕時邸遺跡(鶴岡旅館地点)では,長屋ふうの複室の板壁掘立柱建物の一室の囲炉裏跡に,I A類と思われる火鉢の底部が座った状況で検出されており,丸浅鉢形の火鉢の使われ方を知ることができる(ただし全てのI 類が "埋設火皿"であったと極端に考えることは避けるべきだろう)。

②は有名な『絵師草子』の酒宴の場面に描かれるもので、輪花形でなく丸形に描かれてはいるが、側面に 2 個ひと組みの大型菊花文スタンプが表現されていて、III 類に相当すると考えてよかろう。鎌倉のIII 類は京都で使われていた形を模したと思われるので、絵巻の年代(建武新政頃か)に京・鎌倉にこの手の火鉢があって良いわけである。20~②は樽胴(扁球胴)形で小さめのスタンプが表現されており、さらに色も紫色系に塗られ、瓦器質のIV類(とくにIV A 類)をあらわしたと考えられる。III・IV類は板状の三脚を付け、外側面に文様をもつことから、絵巻に見るように板床にじかに置かれたものであることは明らかである。③のではごていねいに脇に炭桶まで描き込まれている。

こうした火鉢には(火桶でもそうだが)火箸が付きものである。鎌倉でも鉄製で茎(なかご)をもち木の柄の付けられる火箸(一見鉄鏃のように見えるが刃部は無い)や、把む部分を捻った火箸が、いたる所で出土している。兼好法師は『徒然草』第213段で、

「御前の火炉に火をおく時は火箸してはさむことなし。 主器よりただちに移すべし。されば転び落ちぬ様にこころえて炭を積むべきなり。 八幡の御幸に供奉の人、浄衣を着て手にて炭をさされければ、ある有職の人、「白きものを着たる日、火箸を用ひる苦しからず」と申されけり。」



と書いており、炭のつぎ方までわかって面白い。

なお、②、❷は絵を描く場に火鉢が登場するもので(❷は中国の様子を描いたものだから、青磁のような青色の鉢を用いている)、顔料か何かをあたためるための火に、持ち運び容易な火鉢が使われたことを示している。火鉢の用途を「手焙り」とか暖房用に限定する必要のないことを示してくれよう。

また®と®では、胴部に縦長のスリットの入った"あんか"状の火鉢が描かれている。 西国はいざ知らず、鎌倉ではこの形の土器は今のところ知られていない。

②は、中世の調理の様をよく示す資料としてとり上げられることの多い、『慕帰絵詞』巻二の南滝院の厨房の場である。五徳を据える角形の火炉は側面にスタンプ文らしきものが描かれ、四隅に脚があってどうやら土器の角火鉢と思われる。スタンプ文様からはⅢ類とみなせるが、鎌倉での角形火鉢出土例は、Ⅱ類とⅣ類以降にしかない。しかし火炉としての大型火鉢があることは確かで、その例として今小路西遺跡(御成小学校内)北谷3面出土のものをあげうる(図4 -9 、図11-2 )。これは、最高級の武家屋敷の奥座敷(後世の「会所」ともいうべきか)たる礎石建物の傍にあった方形土壙とそのすぐ外の溝から、強い火熱にあってバラバラになった角火鉢が出土したものである。方形土壙は奥座敷での宴会などのために酒肴を調える厨房とみなせ、内部には焼けた石材などが散乱していて、ここに角火鉢が火炉として据えられていたことと思われる。

③、②は土器火鉢が植木鉢(盆栽)に転用された様を示すものである。③の両側のものはIV類らしい扁球胴に描かれるが、中央のものはII類ともIV類ともつかない、鎌倉には見られない器形である。②は成立年代の降る絵巻物資料で、IV類というよりはVI類に近いのではないかと思われる。絵の描かれた時代に存在した火鉢を忠実に写したともいえるし、三個セットの盆栽棚という様式化したものともとらえうるが、火鉢が植木鉢に転用されることが確かにあったわけである。先に触れた御成小学校内の北谷三面では、大棟に瓦を使用した建物(平安貴族の寝殿建物に相当しようか)が取り払われた跡地が貝混り海砂敷きの庭にされており、そこに I C類の丸火鉢が正位置で置かれていた(図11-1)。この火鉢は焼成時に底にヒビが入ったようで、底板の片側が橙色を呈しており、容器としてしは底ぬけの状態になっていたものである。それが庭にポッンと置かれていたことからすると、植木鉢に転用されたとみてよかろう。

こうして見てくると火鉢という名称で括れる土器も、使用者によって様々な使われ方をされたことがわかる。生産者はある決った形の土器を生産するが、使用者は自分の側の事情でそれらを使い分けるのである。これが古代までの土師器とは異なる、"商品"としての中世土器のあり方であろう。同様のことはかわらけについても言える。かわらけを「一回限り使用の清浄な食器」と位置付けることは誤りではないが、灯明皿にも呪物にもいかようにも使いうるのである。甕の底部はいつでもこね鉢に転用しうる。土器を考える際に、

用途まで考慮に入れて型式設定と編年を立てることは、中世以降の段階では通用しないであろう(もちろん、ある用途をめざした製品が作られることもあるのだが)。火鉢についても、その生産のあり方は"土器生産"として別にとらえ、使用され方は消費地遺跡でこまかに探っていくしかあるまい。

# 6. 火鉢の生産をめぐって

鎌倉では大量の火鉢が消費されているが、その生産工房址はこれまで検出されていない。これはそのまま "奈良火鉢"を搬入していたという議論にはならないことは、先の分類と編年で見てきた通りである。鎌倉の火鉢は中世前期には、大消費地鎌倉へ向けての在地生産品であったはずだ。しからばどのような生産体制があったかとなると、消費された品から推測するしかない。分類の項でも述べたように、火鉢の胎土・焼成・整形技法は多彩で、複数の製作集団のあったことがうかがえる。特にⅡ類としたかわらけ質の火鉢は、鎌倉に膨大な量の土器を供給していたかわらけ工房において、副次的に生産されたものと思われる。鎌倉のかわらけは鎌倉以外の地方へ搬出されたり波及したりする力がなかったようで、Ⅱ類の火鉢も鎌倉以外には見られないし、生産量も専業者とは思えないなど少ない。また生産した品も多彩というより、的が絞れずあれこれ手を出したという印象である。

すると問題なのは、徹底的に "浅鉢" という器種を作った I 類の生産者の性格である。 I 類の内部の差異は I B・I C 類間の胎土・焼成である。ある見方をするならば、同一の 技法をもった者が、質の異なる粘土を前にして、ちょっとした口縁の違いや指の力の入れ 具合を変えたと考えることもできよう。 I 類を生み出すような土器生産集団は、鎌倉の在 地の者の中には見出せない。まったくの憶測になるが、こうした焼きものを生み出せる力をもつとすれば、それは瓦の生産者ではないだろうか。鎌倉には次々と寺院が創建されて おり、多数の瓦工人が集められたと思われるが、彼らの中にどこかで "瓦陶兼焼" のあることを知る者がいて、瓦作りと共に(その間に)火鉢に手を出してはいなかっただろうか。 鎌倉の寺院の瓦にも胎土・焼成が火鉢 I 類に似たものがある。胎土分析等の手法で探って みる必要があろう。

これらに対し、Ⅲ類、ⅣA・B類、V類などの火鉢は、西国の瓦器火鉢に範をとっているように思われる。しかし整形技法などは西国と同一ではなく、モデルを求めるものの鎌倉向けに鎌倉周辺で生産されたものと思われる。これらの類の生産者は、かわらけ工房や瓦工房には求められそうにない。西国で瓦器大型製品を作っていた者の移入か、技術習得者の流入による新系譜の工房の成立を考えねばならない。特にⅢ類が細分しえないほどまとまった製品内容をもち、まとまった量を生産していることは驚きでさえある。東国各地でⅢ類の出土がごくまれなのは、一つには鎌倉に向けての工房の成立段階にあったことを

も表わしているのではなかろうか。Ⅳ類は瓦器質のものとしてⅢ類より質の高い製品であり、Ⅲ類を追いぬくべく競合する工房が生産に拍車をかけたのではないかと想像される。ところがⅣA~ⅣB類の盛行する時期は、運悪く鎌倉は都市としての衰退期に当り、火鉢の需要者は減ってしまう。東国各地でⅣ類以降の火鉢の出土が増えるのは、火鉢の需要層である武士や僧侶、富裕商人層が、各地に分散したことによるであろう。Ⅳ類以降の火鉢生産者はあるいは鎌倉周辺に留っていたかもしれないが、生産地を他に移した可能性も考えられる。Ⅴ類、Ⅵ類および土風炉の鎌倉でのあり方は、寺院や残存武士居館などに少量みられるだけで、それだけのために火鉢生産者が鎌倉周辺に居残ったとは考えにくいところがある。やはり東国のどこかに移って、鎌倉も含むより広い流通圏を確保しようとしたとみる方が妥当であろう。この辺のことも、同類の火鉢の胎土分析などで、近い将来明らかにしうるであろう。

以前にも触れたことはあるが、図11-3、4が同笵スタンプを施文していながら、器形 (丸形と角形)、胎土 (土器質と瓦器質) に差があることは、火鉢の製作者が (生産個体数の少なさゆえにか) あまり土を選ばなかったのではないかという疑問が残る。少なくとも肉眼観察の限りでの土器の質の差がある以上、生産者の差を考えたがるのが考古学徒の常である。各類の時間的推移と生産者をめぐる推論も、異質の製品が同一工房で作り出されている (極端に言うなら、一ヶ所で土器屋も瓦器屋も共働しているとか、素地作りとスタンプ捺しが分業化している) としたら、夢想以外の何ものでもなくなる。やはり製作工房址の検出と、製品の胎土分析を急がねばならないだろう。

# 7. まとめにかえて

「火鉢」というある "用途"を示す言葉で一種の土器をくくっため、論点が錯綜し、それを充分解きほぐせたかどうか自信はないが、少なくとも鎌倉には "火鉢" といってくくれる土器があり、ある時期以降は東国全体にかかわる土器になることは、わかっていただけたことと思う。

鎌倉の火鉢の初源である I 類は、何か別の容器に入れられるか、板床上に火炉を据えるか、床から切りおろした囲炉裏に埋設されるかして使われるようだ。つまりそのような火処をもつ住居形態によって需要される土器であった。これが鎌倉に多くあって東国各地に見られないことは、鎌倉の「都市住居」が東国の農村社会の中からもたらされたものでなかったことを示してくれよう。それを武士居館の簡略化と見るか縮小密集化とみるかはともかくとして、狭い土地に長屋的な建物をつめこみ、建物の部屋(あるいはブロック)ごとに火処を設け、暖房兼灯火兼煮炊の用を足した、都市特有の器であったとさえ考えられる。鎌倉が都市として繁栄する13世紀末以降には、板の間に置く"手焙り"的な火鉢が増

加する。これは平安宮廷以来の持ち運びできる「火桶」の再現であり、より上流志向的な器といえる。したがって鎌倉が人口集中した都市でなくなってしまうとき、寺院や武士居館に火鉢は残るものの、都市で一時の虚栄を楽しんだ"都市住居的火鉢"は消え、東国各地の寺院・城館へ上流的「火桶」である置き火鉢のみが拡散してゆくこととなったのであろう。このように考えるならば、在地の農民層に鎌倉の火鉢が広まらないことも理解できるのではなかろうか(同様のことは陶磁器やかわらけについても当てはまるだろうし、近世に至っても東国の農家での火鉢の使用はごく限られている)。もし東国でⅢ類までの火鉢を出土する所があれば、鎌倉との強い関係を想定しなければならないし、Ⅳ類以降のものを見るときは、鎌倉をも一消費地とみるくらいの広い目をもたなければならなくなる。県考古学会誌上を借りて、あまりなじみのない中世鎌倉のことを長々と書いたが、鎌倉の特異性がわかってしまえばそれを東国の中に位置づけることはできやすいわけで、火鉢という土器の一部からでも東国の中世を考える端緒になればと願っている。

#### 註

- (1) たとえば、拙稿「家の中の火」(『よみがえる中世3-武士の都鎌倉』,平凡社,1988) や、同「鎌倉の搬入土器と在地土器」(『中近世土器の基礎研究WI』,日本中世土器研究会,1992)など。
- (2) 挿図の出典は稿末に一括する。
- (3) 註1の1992文献と本稿とでは、**Ⅱ・Ⅲ**類の順を逆にしている。編年的位置を考えると、本稿での分類の方がよかろう。
- (4) 報告書未刊。『掘り出された鎌倉』, 江ノ電沿線新聞社, 1981, P. 47に小さな写真がのっている。
- (5) 本稿ではスペースの関係で小香炉類の図は割愛した。註1の1992文献で少しく触れている。
- (6) かわらけの分類についてはここで細かく触れる余裕はないが、回転台成形の最古のものが I 類である。拙稿「鎌倉における中世土器様相」,『神奈川考古』第21号,1986などを参照されたい。
- (7) 伴出遺物を含めた資料紹介が本誌に掲載されているはずである。
- (8) 中央公論社版『日本の絵巻』,『続・日本の絵巻』よりさがした。
- (9) 鎌倉考古学研究所の斎木秀雄が提唱している町屋的建築物である。同氏「板壁掘立柱建物の 提唱」、『中世都市研究』第1号、中世都市研究会、1991参照。
- (10) 斎木秀雄も鉢形手焙りと囲炉裏を関連づけている。同氏「囲炉裏考」,『中世都市研究』第2号,1992参照。
- (11) 拙稿「スタンプが語る土器作り」,『よみがえる中世3』, 平凡社, 1989。

#### 插図出典一覧

- (図1-1) 神奈川県埋蔵文化財センター『宮久保遺跡・I』, 1987。
- (図1-2,3) 栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区(昭和60年度埋蔵文化財発掘調査概報)』,1986。

- •(図 $1-4\sim7$ ) 横浜市埋蔵文化財調査委員会「史跡称名寺発掘調査概報(第2次)」,『昭和47年 度横浜市埋蔵文化財調査報告書 II』,1973。
- (図1-8, 26, 31) 福島県梁川町教育委員会『茶臼山西遺跡,輪王寺跡』,1991。
- (図1-9, 21) 川越市教育委員会『川越市天王遺跡第7次』, 1992。
- (図1-10~14, 17~20) 韭山町教育委員会『国指定史跡「伝堀越御所跡」御所之内遺跡発掘調査報告書(予備調査~第3次調査)』, 1985。
- (図 1 15, 16, 25) 日本城郭史学会『山入城 I』, 1989。
- ・(図1-22) 川越市遺跡調査会『登戸南・会下・浅間下遺跡調査報告概要』, 1988。 鎌倉関係
- (図 2 1 ~ 4, 6, 7, 図 3 6, 8, 13~15, 図 4 1, 10, 図 5 2, 4, 6, 10, 23, 29, 30, 35, 36, 39~42, 図 7 5, 11, 図 8 8, 19) 千葉地遺跡発掘調査団『千葉地遺跡』, 1983。
- (図 2 5, 8, 10, 図 3 2 ~ 4, 9 ~ 12, 図 4 6 ~ 9, 図 5 1, 3, 9, 12~21, 25~28, 31~34, 図 6 1, 7~12, 図 7 2, 6, 9, 10, 図 8 3) 鎌倉市教育委員会『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』, 1990。
- (図 2 9, 11, 13, 図 3 7, 図 5 37, 38, 図 8 5, 6) 諏訪東遺跡調査会『諏訪東遺跡』, 1985。
- (図 2 −12, 15) 「北条泰時・時賴邸跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』, 1987。
- (図 2 14) 「北条時房・顕時邸跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』, 1988。
- (図3-1,5,図4-3,4) 北区鎌倉学園用地内遺跡発掘調査団『光明寺裏遺跡』,1980。
- (図4-2)「政所跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』,1992。
- (図 4 5) 「若宮大路周辺遺跡群」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6』, 1990。
- (図4-11,12)「北条時房・顕時邸跡」、鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』 1987。
- (図 5 5, 11, 図 7 1, 図 8 7) 長勝寺遺跡発掘調査団『長勝寺遺跡』, 1978。
- (図 5 7, 図 6 14, 15, 図 7 3, 4, 16, 図 8 1, 4, 10, 12) 鶴岡八幡宮境内遺跡発掘 調査団『鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査報告Ⅱ』, 1987。
- (図 5 8) 「長谷小路周辺遺跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』, 1991。
- (図5-22, 24, 図6-2) 「名越ヶ谷遺跡」、鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』, 1986。
- (図5-43,図6-3,図7-12,図8-15) 釈迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団『浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡』、1989。
- (図6-4) 鎌倉市教育委員会『今小路西遺跡(御成小学校内)試掘調査概報』,1990。
- (図6-5) 覚園寺境内遺跡発掘調査団『覚園寺境内発掘調査報告書』, 1982。
- (図6-6) 下馬周辺遺跡発掘調査団『下馬周辺遺跡』, 1992。
- (図 6 −13, 図 8 − 9, 18) 「横小路周辺遺跡群」鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6 』, 1990。
- (図6-16) 鎌倉市教育委員会『極楽寺旧境内遺跡』,1980。

- (図6-17) 建長寺境内遺跡発掘調査団『巨福山建長寺境内遺跡』, 1991。
- •(図7-7)「若宮大路周辺遺跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』,1986。
- (図7-8) 台山藤源治遺跡発掘調査団『台山藤源治遺跡』, 1985。
- (図7-15) 今小路西遺跡(御成小学校内)第5次調査,報告書準備中。
- (図 7-14) 神奈川県立埋蔵文化財センター『裏八幡西谷遺跡』, 1984。
- (図 7 15, 図 8 11) 「浄妙寺旧境内遺跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 1 』,1985。
- (図 8 2, 17) 「明月院旧境内」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5』, 1989。
- (図 8 13) 「北条泰時・時頼邸跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5 』, 1989。
- (図8-14) 鎌倉市教育委員会『向荏柄遺跡発掘調査報告書』,1985。
- ・(図8-16) 「無量寺ヶ谷遺跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』,1992。

# 小田原城における 戦国から近世初頭の陶磁器群の様相

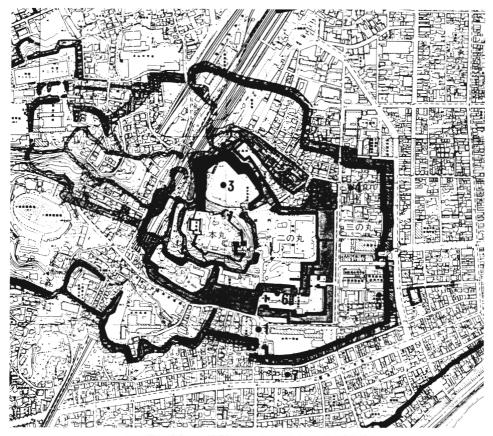
諏訪間 順

### はじめに

小田原城とその城下は、戦国期には後北条氏の本拠地として、関東の政治・経済・文化の中心的な都市であるとともに、箱根をひかえた東海道の交通拠点としての役割も担っていた場所であった。後北条氏は、城下に大工・絵師・刀工、鍛冶屋、外郎(製薬売)など各地から商工業者を招へいし、市場の整備などを行うとともに、小田原用水と呼ばれる上水道の整備をはじめとする都市基盤の整備も併せて行った。こうした都市整備は、小田原城の縄張の拡張や改変と同時に繰り返され、天文年間(1532~1551)には都市としての形が作られたものと推測される。

この小田原城及び城下は、ここ10年の間に史跡整備や市街地の再開発に伴う調査が急増し、現在までに80箇所を越える地点が調査されている(塚田1990)。こうした調査によって、後北条時代から幕末、さらには明治時代に至るまでの遺構と遺物が数多く検出されている。そして、各調査地点の遺構の変遷の検討や絵図・文献等との対比などから小田原城の発展過程が部分的ではあるが明らかにされつつある(塚田・諏訪間・大島・山口1991)。特に、出土陶磁器の編年網が整備されたことにより、検出された遺構に年代観が与えられ、相互に比較検討できるようになったことが、こうした検討の基礎となっている。この陶磁器の変遷観は、15世紀から19世紀末までの約500年間を新出陶磁器を指標に小田原 I 期からVII期までの7期に区分しているもので、筆者等は「小田原編年」と呼んでいる(塚田他1988・大島1990・山口1991・諏訪間1993)。各期の内容は質・量ともに豊富な時期ばかりとはいえないが、一消費(都市)遺跡において遺跡の形成時期から廃絶時期を通して陶磁器の編年が組まれていることは少なく、この点で貴重であると考えている。

さて、筆者は戦国期の小田原城について簡単に報告する機会があり、その中で、戦国期の陶磁器群についての概要を述べたことがあるが、紙面の都合により十分な説明と資料提示ができなかった(諏訪間1992)。本稿では、戦国期の小田原城の陶磁器群を中心に、出土事例の集成を行い、消費地遺跡小田原での戦国期から近世初頭の陶磁器群の変遷について若干の検討を行うことにする。



第1図 位置図(三の丸以内) 1. 箱根口跡 2. 焰硝曲輪 3. 城米曲輪 4. 山本内蔵邸跡第IV地点 5. 大久保弥六郎邸跡 6. 二の丸中堀 7. 欄干橋町遺跡

# 1 小田原編年

小田原城及び城下の陶磁器群の変遷は、既に何回か検討を加え、その内容を提示している。1988年に「小田原城及び城下における陶磁器群の変遷」として、『貿易陶磁研究』№ 8 に発表したのが最初である(塚田・大島・諏訪間1988)。これは、中国染付、志野・唐津、初期伊万里、伊万里くらわんか碗といった陶磁器を新出陶磁器として捉え、その出現を画期として、I期からV期までの大別を行ったもので、最初の「小田原編年」である。その時点では、15世紀~19世紀までを取り扱いながらも、資料提示は16世紀から18世紀までであった。その後、大島慎一氏によって資料の増加により、かわらけ、漆器、瓦を含めた小田原城及び城下の出土遺物の変遷観がまとめられ、江戸時代末期に出現する瀬戸染付磁器の出現をもってVI期が設定された(大島1990)。続いて、山口剛志氏は、これまでほとんど検討されていなかったかわらけの形態分類を行い、各形態の消長を陶磁器群の変遷

と対応させその変遷と画期について検討が行った(山口1991)。さらに、筆者は、明治時代に入って出現する型紙摺り・銅板摺りなどの所謂「印版染付」を指標に小田原VII期を設定した。(諏訪間1993)。この間、これまで基準資料として挙げられていた遺跡の報告書が相次いで刊行され、遺構一括出土陶磁器の資料化が進んできている(井上1989、降矢1990、井上1992a、井上1992b)。

小田原編年は、以上簡単に振り返ったように、資料の増加により、随時追加検討が行われているもので、まだ、確立したものとして考えていない。特に、各期の組成の内容や遺跡毎の差異を充分把握しきれていない面もあるが、こうした点は今後も修正を加え、消費地遺跡小田原の地域編年を整備していきたいと考えている。

# 2 出土事例とその位置付け

ここでは、戦国期~近世初頭の一括遺物を出土した主要な調査地点の概要とその出土遺物について説明する。説明にあたっては、明染付は小野分類(1982)、かわらけについては山口分類(山口1991)に従う。なお、提示した実測図は縮尺1/4に統一してあり、大型品である甕・擂鉢・瓦は1/6である。

### (1) 箱根口跡

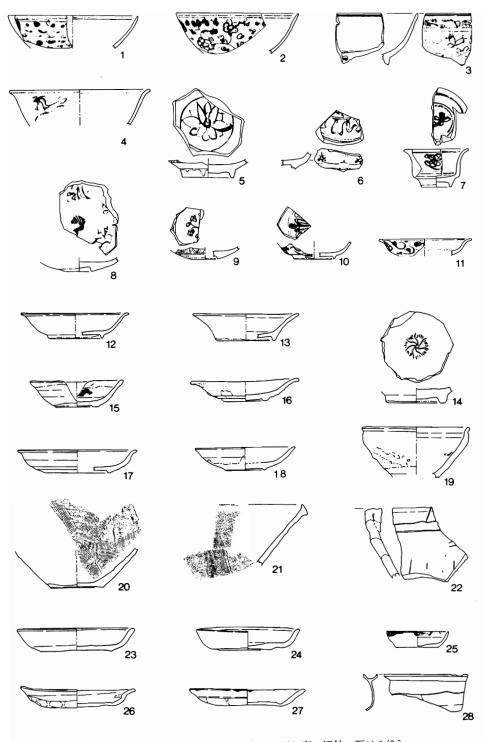
箱根口は、三の丸・箱根口門から二の丸へ至る一帯である。1986年から87年にかけて排水路改修工事に伴う調査が実施され、近世化工事以降の姿を示す正保図(1644~1647に成立)以降の城絵図には描かれていない、3本の堀、溝、水路、井戸等が検出された(諏訪間・井上1992)。

#### 1号堀出土遺物 (第2図1~28)

1号堀は断面 V 字状の堀で、幅約4 m、長さは75 m以上、深さ2.5~3 m程度の規模を持つ。箱根口跡では最も下層から検出された遺構である。覆土下層を中心に染付、白磁、青磁、灰釉皿、鉄釉皿、天目碗、擂鉢、甕、鉢、かわらけ、羽釜等が出土している。

 $1 \sim 11$ までが明の染付である。碗は,胴が緩やかに開く「蓮子碗」で小野分類(小野 1982)のC群が主体を占めるが( $1 \sim 3$ ),口縁部端反りのB群(4)や見込みが平坦で広く,腰部が張るD群(6)なども少数ではあるが存在する。また,腰部が張る端反りの小杯もある(7)。皿は底部が碁笥底のC群( $8 \cdot 9$ )と口縁が端反り,外面に唐草文,見込みに十字花文を描くB1群( $10 \cdot 11$ )とで構成される。白磁は,端反りの皿C群がほとんどを占め(12),高台から外反気味に立ち上がるもの(13)は1点のみであった。青磁はいわゆる稜花皿(14)などが認められたが,極めて少ない。

灰釉はすべてが皿で、口縁部のみに施釉する縁釉皿(15)と、外面腰部から高台内が無



第2図 箱根口跡 1 号堀 [S=1/4 ただし甕・擂鉢・瓦は 1/6 ]

釉で削り出し高台のもの(16)、端反りで全面に施釉するものがある。鉄釉皿(17・18)は全て端反りであり、底部が碁笥底(18)のものもある。灰釉、鉄釉ともに瀬戸・美濃産である。擂鉢もほとんどが瀬戸・美濃産で(20・21)、1点だけ備前産のものがある。甕は常滑産である(22)。

かわらけは破片数で約1,300点あり、陶磁器と含めた総数約3,650点の86%を占める。 A 類 (ロクロ成形で底部を糸切りするもの)(23~25)55%、B類(手づくね形成で、底部を指頭成形するもの)(26・27)45%の割合である。羽釜は薄手のものが出土している(28)。

1号堀出土の陶磁器は、染付碗C群、染付皿B1群・C群を中心とし、文様が飛馬文や十字花文、蓮弁文等によって構成される染付と窖窯段階末の縁釉皿と大窯段階初期の端反り皿の存在によって年代が押さえられる。こうした特徴を持つ陶磁器群は、小野正敏氏によって第Ⅱ期として15世紀後葉から16世紀前葉に位置付けられている(小野1985)。類例としては、天文6年(1537)に作られ、天文23年(1554)に焼亡したと考えられている島根県新宮党館や福井県一乗谷Ⅲa遺構面、江戸城竹橋門第Ⅱ期の遺構群(古泉1991)などが挙げられるが、小野氏の第Ⅱ期でもより後出の様相を持つ新宮党館に対比させ、天文年間を中心とした16世紀第2四半期に位置付けておく。

#### 1号井戸 · 1号溝出土遺物 (第3 図29~37)

1号井戸は、上部に石組施設を持つ井戸で、調査の所見から1号堀の埋没後に構築されたと考えられる遺構である。陶磁器は、いわゆる「菊皿」と呼ばれる白磁皿D群 (29)、瀬戸・美濃産の肩があまり張らず、腰部に鉄化粧を施している天目碗 (30)、同じく瀬戸・美濃産の擂鉢 (31) がある。かわらけは、手づくねのB類 (32・33) が主体を占める。

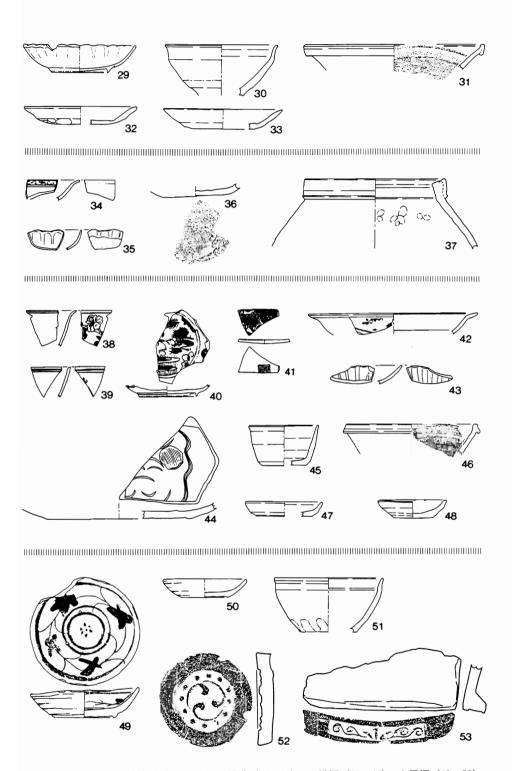
1号溝は1号堀の埋土中に構築されている溝で、口縁内面に四方欅文をもつ端反りの染付皿でB2群(34)、青磁「菊皿」(35)、器形不明の白磁小破片、ロクロ形成のかわらけA類(36)、口縁が外側に折り返され胴部に密着するタイプの常滑産の甕(37)が出土している。

1号井戸・1号溝の出土遺物は、染付皿B2群、白磁皿D群、青磁の菊皿など箱根口1号堀にはみられない新しい器種が含まれている。このセット関係は、小野氏の第Ⅲ期にみられる内容で、16世紀後葉に位置付けらているものである。類例としては、和歌山・根来寺第Ⅲ地区、福井・一乗谷Ⅲc期に類例を見ることができ、16世紀第3四半期頃の特徴として捉えて良いものと考えている。また、16世紀第2四半期に位置付けられた1号堀が埋没した後に構築されていることからも、16世紀第3四半期頃という年代は妥当であろう。

#### 2 号堀出土遺物 (第 3 図38~48)

2号堀は1号堀を切って構築されている障子堀で、多量の漆器、木製品とともに染付、 白磁、青磁、灰釉、初山、常滑甕、かわらけ、瓦が出土している。

磁器は中国製の染付と青磁がある。染付碗は、底部片がないので「饅頭心」になるかは



第3図 箱根口跡1号井戸(29~33), 1号溝(34~37), 2号堀(38~48), 3号堀(49~53)

不明だが、おそらく染付碗E類に分類できるもの(38・39)と、染付皿E類(40・41)である。これらの染付は、碗・皿とも輪郭を描いてから内側を染め濃みする「万暦様式」 (矢部1983) がほとんどを占める(38~41)。青磁は「菊皿」である(43)。44は灰釉皿、45は初山窯の碗か小杯で、46は擂鉢で瀬戸・美濃産である。かわらけは8点のうち、7点が糸切り底のA類である。

2号堀は染付皿 E 群, いわゆる「万暦様式」で占められるようになり、白磁、青磁の量は減少する。「万暦様式」は天正18年(1590)に廃絶された東京・八王子城で多くみられることから、16世紀第4四半期に位置付けられる。特に天正年間の後半の指標となるものと考えている。また、2号堀は障子堀であったが、小田原城では障子堀の構築年代は天正13年(1585)に構築されたといわれる「新堀」、天正18年(1590)直前に構築されたといわれる「大外郭」など、これまでの城郭研究で天正年間の後半に構築されたといわれる縄張で検出されている。こうしたことからも、この堀の出土遺物の年代は天正年間を遡ることはないといえる。

### 3号堀出土遺物 (第3図49~53)

3号堀は1号堀を直交するように切って構築されている堀で、幅約16m、深さ約5mを測る。覆土は最下層に15cm程の水中堆積層があるだけで、その上層は10m2の大の大管体とした埋め土により一気に埋め立てられた状況が観察された。この埋め土から多量の瓦とともに若干の陶磁器が出土している。

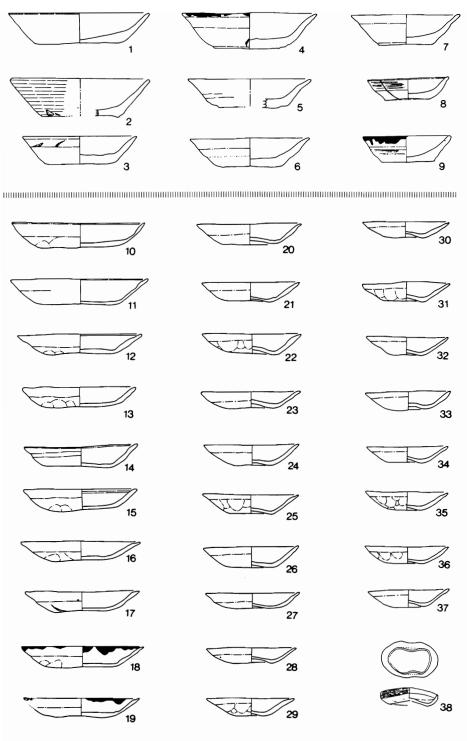
磁器は、図化していないが、口縁が内湾すると思われる染付皿、端反りになると思われる白磁皿の破片がある。志野皿は鉄絵のもの(49)と文様を描かないものとがある(50)。 天目碗は鉄化粧が施されたもの(51)、かわらけは小破片でA類・B類が2点ずつである。 瓦は大量に出土しているが、軒丸瓦(52)と軒平瓦(53)ともに数種類同笵で占められていることから、新規に屋根に葺いたものが一括で廃棄されたものと考えられる。

3号堀は稲葉氏による近世化工事の姿を示す正保図に描かれていないことから、寛永9年(1632)以前であり、志野が含まれていることから16世紀末から17世紀初頭に位置付けられる。出土遺物の年代や堀の覆土の状況から慶長19年(1614)の大久保忠隣の改易に伴う破却によって埋め立てられた可能性が高い。

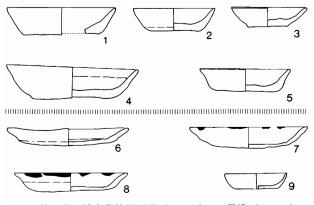
### (2) 焰硝曲輪

焰硝曲輪は城米曲輪の北西に位置する曲輪で、道路建設に伴う調査が実施されている。 この調査で焰硝曲輪の肩部や曲輪内部の地業層が検出された(降矢1991)。 2 - 2 - 3 区 では最下層の地業層とその上層の地業層 C 面から層位的に形態の異なるかわらけが出土し ている。

#### 最下層出土遺物 (第4図1~9)



第4図 焰硝曲輪最下層 (1~9), 上層 (10~38)



第5図 城米曲輪最下層 (1~5), 1号溝 (6~9)

2-2-3 区最下層からはかわらけが多量に出土した。いづれも厚手の糸切り底のかわらけで,やや器高が高く口縁部が直線的に立ち上がるものと( $1\sim3$ ・9)やや外反するもの( $4\sim8$ )がある。前者は山口分類 A 1 類に,後者は A 2 類に分類される。かわらけ

以外の出土遺物はないが、上層出土の陶磁器とかわらけとの層位的な関係から、15世紀末から16世紀第1四半期に位置付けておく。

#### 上層出土遺物 (第4図10~38)

2-2-3 区上層(地業層 C 面)からは、多量のかわらけと若干と陶磁器が出土している。かわらけは全て手づくね成形の B 類で、底部が平らなもの( $10\sim19$ )、底部中央が盛り上がるいわゆる「へそかわらけ」と呼称されるもの( $20\sim37$ )、いわゆる「耳皿」(38)等によって構成される。こうしたかわらけには図示していないが、中国染付 C 群で外面に花唐草文や連弁文が描かれるものや灰釉皿、天目碗が共伴している。これらは16世紀前半~中葉に位置付けられると考えられるもので、箱根口 1 号堀とほぼ同時期か若干後出するものと考えたい。

### (3) 城米曲輪

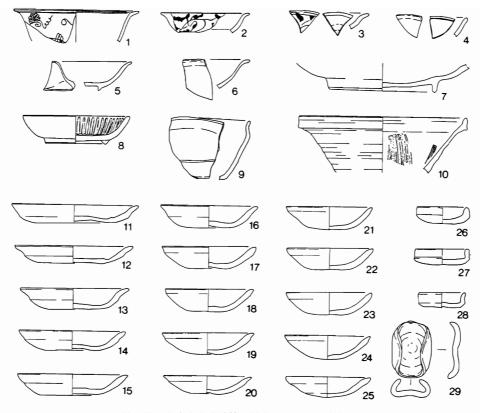
城米曲輪は近世小田原城本丸の北東側に位置する曲輪で、史跡整備を目的とした遺構確認調査が実施されている(塚田・諏訪間1984)。ここでは、近世の米蔵跡と考えられる礎石列や、掘立柱柱穴列、溝等多くの遺構が検出されている。また、この曲輪は谷地形を埋め立てして盛土整地が繰り返し行われたことが確認された。この盛土整地は深いところで約3mにも及んでいた。

#### 最下層出土遺物 (第5図1~5)

第3トレンチ東端(E 2 -13グリッド)の最下層(G L から-3 m)からかわらけ 5 点が一括で出土している。いずれも厚手の糸切り底のもので,器壁が直線的に立ち上がるもの( $1\sim3$ )とやや外反するもの( $4\cdot5$ )があり,A-1 類とA-2 類に分類できる。

これらのかわらけは城米曲輪の最も古い時期に形成された整地層から出土したことや、焰 硝曲輪最下層と同じ形態であることから、15世紀末~16世紀第1四半期に位置付けておく。

#### **1号溝出土遺物**(第5図6~9)



第6図 山本内蔵邸跡第IV地点 かわらけ廃棄層

第1トレンチ西端で確認された1号溝では、若干の陶磁器とともにかわらけが出土している。かわらけはほとんど手づくねのB類で占められるが( $6\sim8$ )、糸切り底で内湾するもの(9)も見られる。これらは共伴する染付などが明らかではないが、かわらけの形態に、箱根口1号堀との類似性が認められることから、16世紀第2四半期を中心とした年代に位置付けておく。

### (4) 山本内蔵邸跡第IV地点

本地点は小田原城三の丸の東に展開する武家屋敷地に位置し、幕末には山本内蔵邸(やまもとくらてい)があったことからこの名称で呼ばれる。調査は診療所併用住宅建設工事に伴い行われたもので、障子堀、溝、かわらけ廃棄層等の遺構が検出された。(諏訪間1990 b)

#### **かわらけ廃棄層出土遺物**(第6図1~29)

明染付,白磁,瀬戸・美濃灰釉陶器,擂鉢,常滑甕,そして多量のかわらけが出土している。染付は,口縁部が屈曲する碗(1),端反り皿(2~4),端反りの白磁皿(5~7),瀬戸・美濃産は,内面に丸彫の縦縞を持つ灰釉皿(8),天目碗(9),擂鉢(10)などがある。かわらけは,集計していないがおそらく1,000点以上の破片数があると思われるが,

ほとんどが手づくねのB類で、中型  $(11\sim15)$ 、小型  $(16\sim25)$  に分けられ、底部から口縁部にかけて直立する小型のもの  $(26\sim28)$ 、いわゆる耳皿 (29) も特徴的に認められる。糸切り底を呈するA類は数点と極めて少ない。

これらの陶磁器群は、口縁部が屈曲する染付碗の存在から小田原  $\Pi$  b 期に位置付けてきたが(大島1990)、丸彫の灰釉皿やその他の陶磁器からは16世紀第 3 四半期の特徴を示していると思える。また、へそかわらけは焰硝曲輪上層と系統的につながるもので、その他の  $\Pi$  b 期には認められない。このため、ここでは16世紀第 3 四半期から第 4 四半期前半にかけての幅で捉えておくことにする。

### (5) 大久保弥六郎邸跡

本地点は小田原城三の丸の東に展開する武家屋敷地に位置し、幕末には大久保弥六郎邸があったことからこの名称で呼ばれる。調査は消防署の車庫建設工事に伴い行われたもので、石列、石組、集石、方形竪穴、井戸、土坑など戦国期から近世の遺構が密集して検出された(杉山他1992)。

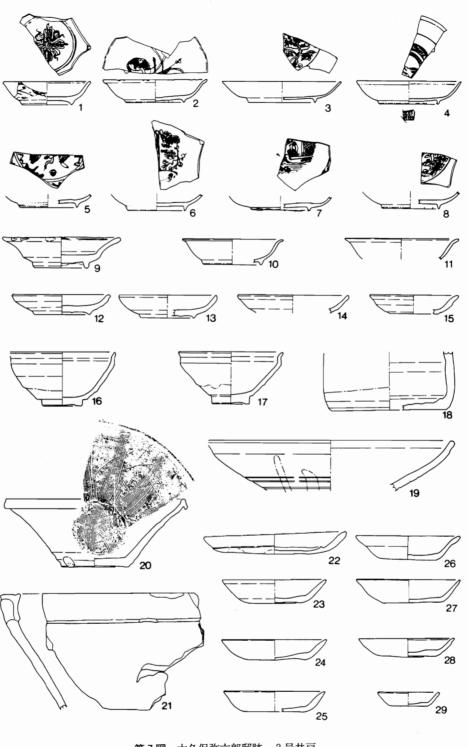
### 3 号井戸出土遺物 (第 7 図 1 ~29)

3号井戸は直径3~3.9m,深さ4.4mを測る遺構で、報告者によって井戸とされるが、壁面に足場と思われる掘り込みがあり、外周に小ピットが並んで検出されていること、さらには湧水点まで達していないことなどから、別の遺構の可能性もあるものである。この遺構からは、明染付、青磁、白磁、灰釉、鉄釉、擂鉢、甕、かわらけ等の陶磁器群がまとまって出土している(井上1992 b)。

染付皿は、薄手で高台の断面が三角形を呈するもので占められる(2~8)。口縁部は端反りで波状になるもの(2)を除き、内湾するものが多い。絵付けは濃い細線で輪郭を描き、その内側を染め濃みするもので、草花や動物などが描かれている。これらは「万暦様式」と呼ばれているもので(2~8)、小野分類の染付皿E群に分類される。 1 点だけやや厚手でやや端反りになり、見込みに十字架文、外面に唐草文が描かれるやや古い様相を示す染付皿B 1 類がある(1)。青磁は稜花皿(9)で、1 と同様に伝世したものと考えられる。白磁は、端反りの皿C群がほとんどを占める(10・11)。灰釉はすべて全面施釉の皿で口縁部が内湾するもので占められる(12・13)。鉄釉は口縁部が内湾する全面施釉皿がほとんどであり、1 点のみ縁釉皿が認められる。また、18は鉄釉の壺、19は鉄釉の大皿などいずれも瀬戸・美濃産である。擂鉢は瀬戸・美濃産が多いが20は志戸呂産の可能性もある。甕は常滑産である(21)。

かわらけは破片数で235点が出土しているが、手づくねのB類は数点で、ロクロ成形のA類で占められる。

これらの陶磁器群は染付皿E類の「万暦様式」の存在から、八王子城との類似性が指摘



第7図 大久保弥六郎邸跡 3号井戸

できる。八王子城は天正後半期に築城され,天正18年(1590)に廃絶された存続期間の極めて短い絶対年代の明らかな城であるが,ここでの採集陶磁器やその後の調査資料と対比が可能である。灰釉皿も全てが内湾するもので,伝世したとおもわれる染付皿(1)と青磁皿(9)を除けば概ね天正後半期の年代を与えてよいと考えている。

### (6) 二の丸中堀

二の丸の南東部に位置し、二の丸の主部(藩主屋敷)と馬屋曲輪並びに馬出曲輪とを隔てる堀である。1983年~現在まで継続して調査が行われている。これまでの調査では、稲葉氏による寛永期の近世化工事によって成立した石垣や堀、その下層から後北条時代の障子堀、井戸や石組水路(馬屋曲輪1号水路)、さらに下層より、第1地業層、後北条時代以前の堀(銅門1号堀)など多くの遺構が検出されている(大島1990 b)。

#### 第1地業層出土遺物(第8図1)

御茶壺曲輪及び馬屋曲輪の最下層に暗黄褐色土で炭や焼土を含む地業層が広く展開している。この層中には土坑や溝等の遺構が確認されているがいずれも部分的な調査であるため詳細は不明である。本層から明染付や灰釉皿、鉄釉皿、かわらけ等が出土している。

明染付皿は、内面に玉取り獅子文が描かれる端反り皿で、染付皿B1類に分類される(1)。この他は灰釉の縁釉皿、厚手糸切り底のかわらけ等が出土している。染付皿は山梨県新巻本村出土例など15世紀後半まで遡る古いタイプである。こうしたセットは15世紀まで古くなる可能性があるものの、共伴するかわらけが、焰硝曲輪最下層や城米曲輪最下層と共通するものであることから、16世紀第1四半期に位置付けておく。

#### 馬屋曲輪 1 号水路(第8図2~7)

馬屋曲輪の第1地業層より上層で確認された石組水路で,覆土下層から明染付碗(2),明青磁碗(3),白磁杯(4),瀬戸・美濃製擂鉢(5),かわらけ(6・7)等が出土している。

染付碗はD類に分類されるもので(2),青磁碗は細線の蓮弁文が描かれるもの(3),かわらけは手づくね(6)が主体となっている。年代的には,遺構の層位的な関係とかわらけの型式的な位置付けなどから,16世紀第2四半期を中心とした時期に位置付けておく。

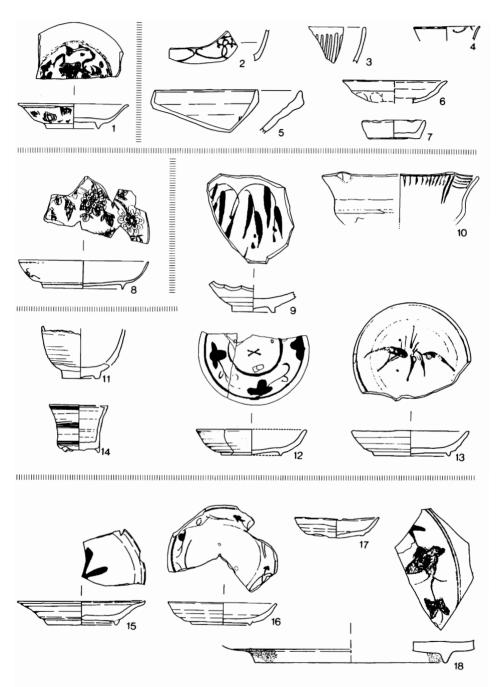
#### 銅門1号石垣(第8図8)

寛永期の石垣の裏から、矢穴を持たない慶長期の特徴を持つ石垣が検出されたが、その 石垣の目地を埋める土から明染付、唐津碗、天目碗が出土している。

染付は内湾する染付皿E類(8), 天目碗は鉄化粧しないものである。これらの陶磁器は、唐津碗の存在から慶長年間の17世紀初頭に位置付けたい。

#### 障子堀B類覆土上層(第8図9~13)

調査区の東半部の下層から確認された。宝永火山灰層より下層に位置し,後北条時代の



第8図 二の丸中堀 第1地業層(1), 馬屋曲輪1号水路(2~7), 銅門1号石垣(8), 障子堀B2類上層(9~13), 住吉橋橋台盛土(15~18)



第9図 欄干橋町遺跡 34号土坑

井戸を切っている。銅門桝形部分では寛永9年(1632)以降に普請した石垣内部まで続いている。覆土は水中堆積を示し、その上層の砂礫層から志野、唐津及び漆製品、瓦が比較的まとまって出土した。

唐津は皿(9)と向付(10)でいずれも鉄絵が描かれている。志野は鉄絵が描かれている皿(12・13)と碗(11)がある。また、香炉は産地不明であるが、志戸呂産の可能性がある。

これらの陶磁器群は上限を志野・唐津の出現時期である16世紀末、織部を含まないことから下限は元和以前と考えられる。遺物の年代観と砂礫混じりの搬入土が包含層であったという出土状態などから、箱根口3号堀と同じく、慶長19年(1614)大久保忠隣改易に伴う小田原城破却の状況を示しているものと推定している。

#### 住吉橋橋台盛土 (第8図15~18)

住吉橋橋台の石垣は、寛永9年(1632)以後数年の期間に成立したと考えられる。この橋台内の盛土中から織部(15)、志野(16)、明染付皿(18)、かわらけ(17)等が出土した。これらの陶磁器群は遺構の構築年代が1632年から数年の期間であると推定されることと、織部を含み、伊万里染付が含まれないことなどから1630年代の前半に位置付けたい。

### (7) 欄干橋町遺跡

欄干橋町遺跡は、後北条時代初期から現在まで続いている「外郎(ういろう)家」の屋敷地である。「外郎家」は、「透頂香(とうちんこう)」という丸薬の製造・販売をしていた特別な商人であった。1987年に薬工場建設に伴って調査を実施した(諏訪間1990c)。調査面積約70㎡の中に、土坑44以上、石組み水路、溝等が検出された。これらの遺構の内、土坑は全て切り合い関係を示しているため、その出土遺物の相対的な変遷を明らかにすることが可能である。

### 34号土坑出土遺物 (第9図)

本遺構は東西3.2m南北1.5m以上,確認面から2mを測る大型の土坑である。出土遺物は,明染付( $1 \cdot 2$ ),唐津皿(3),織部( $4 \cdot 5 \cdot 7$ ),志野( $6 \cdot 8 \cdot 10 \sim 13$ ),灰釉碗(15),天目碗(16) 鉄絵の灰釉碗(9),鉄釉瓶(17),擂鉢( $18 \cdot 19$ ) などが多量に出土した。この他に常滑甕や漆器碗,木製品等も出土している。

これらの陶磁器群は織部・志野が主体となっており、伊万里は含まれていない。小田原城での織部の出現は元和年間以降と考えており、この陶磁器群の廃絶年代は元和から寛永年間の前半期に(1615~1630年代)押さえておきたい。

# 3 戦国~近世初頭の陶磁器群の様相

以上,小田原城及び城下の戦国期から近世初頭(伊万里出現以前)までの陶磁器群(かわらけを含む)について,遺構出土の一括遺物について個々に事例を挙げ,組成と年代観について検討を加えてみた。前述のとおり,小田原  $\Pi$  期は  $\Pi$  a 期と  $\Pi$  b 期に細分が行われているが, $\Pi$  a 期は $\Pi$  5 世紀末から $\Pi$  6 世紀第 3 四半期までの約 $\Pi$  80年間の期間,北条早雲から4代氏政までの時代に相当する。この細分をしなければ,小田原城の発展過程を検討する時間軸とはなり得ない。ここでは,今回はその後の資料の増加や他の城館跡の成果を基にし,戦国期から近世初頭にかけての陶磁器群の変遷をまとめてみよう。

### Ⅱa 期古段階

主な資料としては、焰硝曲輪最下層、城米曲輪最下層、新道地点、二の丸中堀・馬屋曲輪第1地業層、同御茶壺曲輪第1地業層などが挙げられる。本期はかわらけA-1類を指標とする時期で、共伴する陶磁器の内容が不明である。本期のかわらけは、厚手のロクロ成形のもので、底部から口縁部に向かって直線的に立ち上がるタイプとやや外反するタイプが特徴的である。器高は本期以降のかわらけと比べて高い。また、手づくね成形のB類を含まない点も重要な点である。本期の年代は、各地点の遺構は地山直上に構築されていることから後北条時代の初期の曲輪形成に関する地業層であると考えられること、焰硝曲輪では、箱根口1号堀の出土遺物と対比できる染付碗C群や手づくね成形B類のかわらけとの層位的な関係により、本期を年代的には15世紀から16世紀第1四半期と想定しておく。なお、御茶壺曲輪第1地業層では、A-1類に類似する厚手かわらけと染付皿B1類が共伴する可能性があり、今後、本段階のかわらけに共伴する染付や灰釉が確認できる可能性もある。

#### Ⅱa 期中段階

主な資料は、箱根口1号堀、城米曲輪1号溝、焰硝曲輪上層などが挙げられる。年代的には、16世紀第2四半期を中心とした時期を推定している。本期は明染付碗・皿、白磁、灰釉皿、天目碗、擂鉢、甕、そして、多量のかわらけによって構成される。染付は、碗C群と端反り皿B1群、碁笥底皿C群が中心となる。文様は碗の外面に牡丹文、飛馬文、唐草文、皿は外面に唐草文、内面に十字花文や玉取獅子文が描かれる。白磁は端反り皿C類が中心で「菊皿」のD類は含まれない。青磁は「稜花皿」や「細蓮弁文碗」が認められるが、量的には少ない。国産陶器は甕が常滑産であるのを除けば、瀬戸・美濃産で占められる。灰釉皿は大窯段階初期の端反り皿が認められるが、窖窯段階の縁釉皿も一定量含まれる。本段階は内湾する皿は含まれない時期として捉えている。擂鉢はほとんどが瀬戸・美濃産で口縁部が外に膨らむタイプで占められる。かわらけは、前段階に特徴的であったロ

クロ成形のA類は器高が低くなり皿形になる。さらに、本段階より手づくね成形のB類が出現する。

#### Ⅱa期新段階

主な資料は、箱根口跡1号井戸、同1号溝などが挙げられるが、いずれも断片的な資料である。年代的には16世紀第3四半期を中心とした時期を推定している。本期は、前段階の組成に染付碗D類(饅頭心)、染付四方欅文と白磁菊皿のC群、青磁菊皿瀬戸・美濃産は灰釉皿が内湾するものが新たに加わることが指標となる。

#### Ⅱb期

主な陶磁器群は、箱根口跡 2 号堀、大久保弥六郎邸跡 3 号井戸、山本内蔵邸跡第IV 地点かわらけ廃棄層などが挙げられる。年代的には16世紀第 4 四半期を考えている。本期は、染付皿 E 群とした輪郭を細線で描きその中を染め濃みする万暦様式の染付の出現が画期となる。灰釉や鉄釉の皿は内湾するもので占められるようになる。本期には鉄釉皿に初山や志戸呂なども出現する。かわらけは手づくね成形の B 類が主体を占める山本内蔵邸跡かわらけ廃棄層、ロクロ成形 A 類を卓越する大久保弥六郎邸跡 3 号井戸とがあり、地点による差が激しく本期の指標とはなりにくいが、前者を II II 期中段階からの系統をひくものとしてやや古く捉えておきたい。

#### Ⅲa期

主な陶磁器群は、箱根口跡 3 号堀、二の丸中堀障子堀B類覆土上層等が挙げられる。本期は、志野・唐津の出現を画期とし設定される。前段階まで主体であった美濃灰釉皿はほとんどなくなる。年代的には天正18年(1590)以降、慶長19年(1614)までの時期を設定している。これまでのところ、後北条時代に位置付けられる遺構からは志野・唐津は出土していない。天正18年(1590)に廃城した八王子城や山中城においても認められないことから、慶長期になって出現するものと考えられる。堺、大坂城、岐阜城など畿内の遺跡でも志野の出現は慶長期、それも1600年直前とされていることから、小田原城でも同じように考えられよう。なお、本期以降は、瓦が普遍的に出土するようになる。志野・唐津とともに瓦の普及も近世化の指標となるといえる。

### Ⅲb期

主な資料は、欄干橋町遺跡34号土坑、同36号土坑、住吉橋土橋盛土などが挙げられる。 本期は織部の出現を画期として設定される。年代的には、伊万里出現までの時期で元和年間から寛永10年代(1615~1630年代)を設定している。

このように、小田原城における戦国期の陶磁器の変遷は小田原第 II a 期が16世紀第 1 四半期、同第 2 四半期、同第 3 四半期と 3 段階と、万暦様式の染付と灰釉丸皿によって特徴付けられる II b 期を加えた、 4 区分が可能になりつつある。近代初頭についても志野・唐津と織部という新出陶磁器の出現を画期として1630年代までを 2 区分することが可能であ

る。今後資料を増加させ補強していく必要があるが、こうした編年網の整備によってより 年代的にしぼりこんだ遺構の比較・検討ができるようになると思われる。

### おわりに

以上,小田原城出土の戦国から近世初頭の陶磁器とかわらけについて,各遺構単位で抽出し,組成と年代観について検討を加え,小田原編年のIIa期の細分を中心に変遷を検討してみた。

小田原城は、継続期間が長い遺跡であるが、年代の明らかな大火の焼土層、城主の交替等による大規模な縄張の改変など、年代を決める「定点」資料が少なく、時間軸の設定が難しいといえる。小田原城での陶磁器研究は、新出陶磁器を示準化石化した編年であるが、そろそろ、遺構単位の器種組成の内容や各生産地毎の型式的な検討へと展開していかなければならないと考えている。また、かわらけについても型式的な検討を踏まえてさらに議論を深めていかなければならないと考えている。本稿を執筆する前に小田原城の戦国期の陶磁器群はある程度蓄積がなされてきたとの認識から、当該期をまとめてみようと思ったが、出土例は多いものの、遺構一括の基準となるまとまった資料が少なく、また、出土していても帰属が明らかでなかったり、既に報告がなされていても図化されていないものなど、資料が提示できなかったものが多かった。こうした未発表資料の資料化をはじめとする小田原城の調査・研究の様々な問題点をどのように克服していくか、小田原城の調査に携わっている諸氏と共に考えていきたい。

筆者は小田原城の出土陶磁器群の編年網をより短いオーダーで捉え、時間軸とすること、そして、その細かい年代観で各調査地点の遺構の位置付けを行い、将来、20年のオーダーでの小田原城の縄張の展開・変遷が追えるようになればと願っている。本稿はそうした目論見の基礎的な作業の一端としてまとめさせていただいた。

最後になったが、本稿執筆にあたり、共に小田原城の調査研究にあたっている、塚田順正、大島慎一、山口剛志、井上由美子の各氏には様々なご教示を受けた。また、村田文夫氏には、執筆の機会を与えていただき、締め切りを過ぎた原稿を寛大に待っていただいた。以上の方々に深く感謝申し上げます。 (1993.1.27)

#### 引用•参考文献

井上由美子 1989 「V 検出された遺物」『愛宕山』小田原市文化財調査報告書第27集

井上由美子 1992 a 「VI (2) 箱根口跡の遺物組成とその変遷」『小田原城三の丸 箱根口跡』小田原市文化財調査報告書第37集 小田原市教育委員会

井上由美子 1992 b 「V 検出された遺物」『小田原城三の丸 大久保弥六郎邸跡』 小田原市文化 財調査報告書第36集

- 上田 秀夫 1991 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」 『関西近世考古学研究』 1 関西近世考古学研究会
- 内堀信雄他 1990 『千畳敷-織田信長居館伝承地の発掘調査と史跡整備-』岐阜市教育委員会
- 大島 慎一 1990 a 「小田原城とその城下の出土遺物」『小田原城とその城下』小田原市
- 大島 慎一 1990 b 「小田原城・二の丸中堀の調査」『小田原城とその城下』
- 小野 正敏 1982 「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- 小野 正敏 1985 「出土陶磁器よりみた15・16世紀における画期の素描」『ミュジーアム』416
- 小野 正敏 1988 「小谷城より出土した遺物について」『史跡小谷城』湖北町教育委員会
- 北野 隆亮 1990 「15・16世紀貿易陶磁器 1980年代の編年研究を中心として 」『貿易陶磁研究』Na10
- 古泉 弘他 1991 『竹橋門』東京国立近代美術館遺跡調査委員会
- 新藤 康夫他 1990 『八王子城跡』IX 八王子市教育委員会
- 杉山 博久他 1992 『小田原城三の丸 大久保弥六郎邸跡』小田原市文化財調査報告書第36集
- 鈴木 秀典他 1988 『大坂城跡』Ⅲ 大阪市文化財協会
- 鈴木 秀典 1990 「輸入貿易陶磁器の編年の検討−天正年間から江戸前期−」『貿易陶磁研究』 Na10
- 鈴木 正貴 1990 「尾張の城館遺跡出土の陶磁器-16世紀を中心として-」『考古学フォーラム I』
- 諏訪間 順 1990 a 「近世城郭」 『歴史考古学の問題点』 近藤出版
- 諏訪間 順 1990 b 「小田原城・三の丸遺跡(難波歯科地点)の調査」『小田原城とその城下』
- 諏訪間 順 1990 c 「小田原城下・欄干橋町遺跡(外郎邸)の調査」『小田原城とその城下』
- 諏訪間 順 1992 「小田原城における戦国期の調査」『考古学ジャーナル』353
- 諏訪間 順 1993 「Ⅵ (4)箱根口門跡出土の近代陶磁器と小田原Ⅵ期の設定について」 『小田原城三の丸 箱根口門跡』小田原市文化財調査報告書第40集
- 諏訪間 順・井上由美子 1992 「小田原城三の丸 箱根口跡』小田原市文化財調査報告書第37集
- 田代 道彌 1980 「小田原城」『日本城郭大系』 6 新人物往来社
- 塚田 順正 1990 「小田原城調査の現状と課題」『小田原城とその城下』
- 塚田 順正・諏訪間 順 1984 「史跡小田原城跡 城米曲輪』
- 塚田 順正・諏訪間 順・大島 慎一 1988 「小田原城及び城下における陶磁器群の変遷」『貿 易陶磁研究』No.8
- 塚田 順正・大島 慎一 1989 「史跡小田原城跡二の丸中堀の調査」『第13回神奈川県遺跡調査・ 研究発表会発表要旨』
- 塚田 順正・諏訪間 順・大島 慎一・山口 剛志 1991 「小田原城及び城下について」 『江戸遺跡研究会第4回大会 発掘された江戸時代』江戸遺跡研究会
- 藤澤 良祐 1991 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 降矢 順子 1990 『小田原城焰硝曲輪-都市計画道路栄町・城内線改良に伴う発掘調査-』小田 原市文化財調査報告書第33集
- 矢部 良明 1983 「八王子城出土の中国陶磁の特色」『八王子城』八王子市教育委員会
- 矢部 良明 1990 「出土陶磁器から見た小田原の文化」『小田原城とその城下』小田原市
- 柳谷 博他 1984 『本町小学校遺跡』小田原市文化財調査報告書第14集
- 山口 剛志 1991 「小田原城とその城下出土のかわらけについて」『小田原市郷土文化館研究報告』27

# 神奈川県指定史跡

# 「吉井貝塚を中心とした遺跡」の整備について

野内秀明

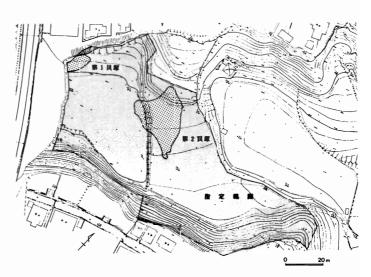
### はじめに

「吉井貝塚を中心とした遺跡」は、縄文時代の貝塚と集落址、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落址であると同時に「源平盛衰記」に記された怒田城に比定されており、ひとつの台地にいくつかの時期の性格の異なる遺跡が残された複合遺跡である。

遺跡の中心となる縄文時代の貝塚は、第1貝塚と第2貝塚の2地点に分かれ、早期後半、中期後半から後期初頭にわたる複数の時期の貝塚が層位的な秩序をもって堆積しており、昭和35年度に行われた第1貝塚の発掘調査では早期後半、中期後半の土器編年研究に多大な成果をもたらした。同時に下部貝層は早期の貝塚としては全国的にも屈指の規模であり、土器以外にも骨角器などが豊富に出土し、縄文時代早期の文化内容が明らかにされ、考古学史に残る遺跡となった。

また、「吉井貝塚を中心とした遺跡」のもうひとつの重要性は、台地上から展望される 周辺の景観にある。平作川流域に広がる沖積低地は、完新統の研究により内湾であった縄 文時代から近世までの環境変化が明らかにされており、さらに近世の埋め立てによる内川

縄文時代の典型的な



第1図 「吉井貝塚を中心とした遺跡」の指定範囲

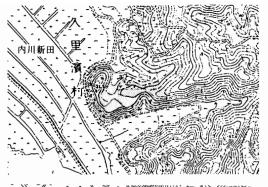
貝塚と集落址を中心とした複合遺跡,また台地からの展望の重要性などの点から,「吉井 貝塚を中心とした遺跡」は,現在7569.785㎡が神奈川県指定史跡に指定され,将来に向け て保存されているのと同時に,横須賀市内の小・中学校の社会科の授業の一環として,あ るいは博物館,公民館などの社会教育の学習の場として,市民の歴史探訪のコースのひと つとして現在広く利用されている。

# 調査の沿革と史跡指定への経過

吉井貝塚の存在は、既に明治20年代には研究者の間に知られており、当時の文献から若林勝邦や八木奘三郎らが吉井貝塚を訪れ、小規模な発掘を行ったことを知ることができる。しかし、これらの報告は貝塚の存在を知らせただけのものであり、吉井貝塚の内容について広く調査を進めていったのは、三浦半島を中心に地域研究を進めていた赤星直忠であった。赤星は大正10年にはじめて吉井貝塚の発掘調査を行って以来、資料の収集につとめ、昭和11年、昭和22年にも発掘調査を行い、その内容を明らかにしていった。昭和17年には、京浜急行線の久里浜延長に伴い、消滅した吉井城山横穴群の調査も行っている。

その後、昭和35年に吉井貝塚の存在する台地を切崩して北側の土地を埋め立てる計画が持ち上がり、この時に横須賀市博物館の事業として、昭和35年10月20日から翌36年3月19





#### 明治41年(大日本帝国陸地測量部)

水田地帯に突出した舌状台地が「吉井 貝塚を中心とした遺跡」であり、台地上 が畑地として利用されている以外、地形 の改変はない。整然とした用水路の配さ れた水田は万治年間(1658~1660)に開 発された内川新田である。



#### 昭和25年(地理調査所)

京浜急行線、旧国鉄横須賀線が久里浜 まで延長され、周辺の開発が始まってい る。また、京浜急行線の線路敷設に伴い、 台地西南部が切崩され、吉井城山横穴群 が失われたが、まだ旧地形をよく残して いる。



#### 昭和38年(横須賀市)

昭和36年に台地先端部が切崩され、北 西部の水田地帯の埋め立てが行われた。 この結果、第1貝塚の大部分が失われた。 京浜急行線の西側では宅地化および工業 団地化が進んでいる。



#### 平成元年(横須賀市)

神奈川県史跡指定以後の「吉井貝塚を中心とした遺跡」の現状であるが、台地直下まで宅地化が進み、特に南側の谷は埋め立てられ、大規模な団地となっている。



第3図 「吉井貝塚を中心とした遺跡」とその周辺の変遷

日にかけて第1貝塚の発掘調査が行われた。この調査は、野島貝塚の発掘調査以来課題となっていた茅山式土器の細分の解決に不可欠の遺跡のひとつが吉井貝塚であるとの認識のもとに行われた調査であった。

その結果,野島式-鵜ヶ島台式-茅山下層式-茅山上層式と編年の見通しが立てられていた中で,型式内容の不明瞭だった茅山上層式の内容が明確にされ,茅山式土器の細分がほぼ確立された。また,下部貝層から出土した豊富な漁撈具などの資料により,その文化内容は岡本勇にって縄文時代の時期区分論にまで発達する資料を提供することになった。

その後、昭和47年に吉井貝塚のある台地に住宅建設計画が持ち上がり、その事前調査として昭和47年12月23日から翌48年1月4日まで計画地内を対象に確認調査が行われ、第2貝塚の分布範囲、形成時期が把握され、また上下の貝層が良好に遺存していること、竪穴住居址などの生活遺構の存在が確認された。これにより、縄文貝塚としての吉井貝塚の重要性がひろく認識され、その保存が協議された。この調査が「吉井貝塚を中心とした遺跡」の史跡指定の直接の原因となったのものであるが、遺跡そのものの重要性に認識には、赤星らの研究の積み重ねがあったことは忘れてはならないことだろう。このようにして、昭和48年11月2日に4635.621㎡が史跡指定された(神奈川県教育委員会告示第12号)と同時に、12月に公有地化された。

指定地以外の包蔵地についても、横須賀市教育委員会によって公有地化計画が立てられ、昭和54年3月13日から3月31日にかけて史跡指定のための事前調査として発掘調査が行われた。その結果、台地全域に良好に遺構が残っていることが確認され、昭和55年9月16日に2934.164㎡が追加指定された(神奈川県教育委員会告示第13号)。その後、昭和56年から平成元年にかけて横須賀市によって公有地化が進められ、現在、史跡指定地はすべて公有地化がすんでいる。

# 整備事業について

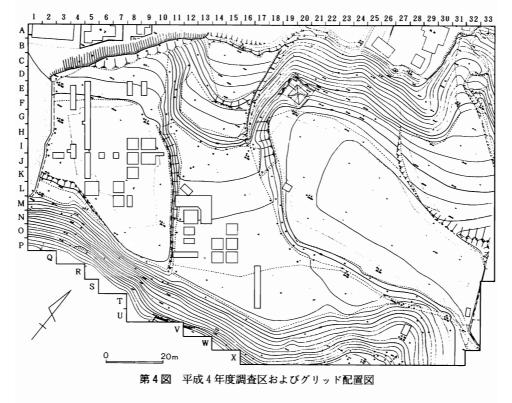
「吉井貝塚を中心とした遺跡」の整備事業は、横須賀市教育委員会の史跡保存整備事業として、神奈川県の指定文化財保存修理等補助金を受け、平成3年度から平成6年度かの4ヵ年の計画で実施されている。

平成3年度は、「吉井貝塚を中心とした遺跡」整備協議会が4回行われ、整備に係わる 基本構想が討議された。これらの討議を受けながら、神奈川県教育委員会文化財保護課と の連絡のもとに、横須賀市教育委員会事務局によって整備に伴う史跡地内に存在する公道 の問題、整備に係わる雨水処理など関連法規に係わる実務的な問題点の調査が行われた。 このような討議、基礎調査を踏まえ、第4回整備協議会によって、平成4年度以降の整備 事業の具体的な行程が決定された。 平成4年度は、整備にかかわる遺構の確認と展示資料とするための貝層のはぎ取りなどを主な目的として発掘調査が実施され、その結果をもとに整備協議会を経て、整備基本計画が作成された。この基本計画のもとに、史跡地の外周柵および、京浜急行線との境界の転落防止柵の設置など管理施設の工事を実施した。また、史跡地内に存在する公道の処理、境界未確定部分の確定などに係わる事務的な問題の処理を行った。

平成5年度には、横須賀市環境保全部公園建設課の協力を得て、史跡地内への進入路、 史跡地内園路、休憩施設などの周辺整備を行い、整備計画の最終年度である平成6年度に おいて貝層はぎ取り断面表示施設、竪穴住居・堀状遺構など遺構の平面表示、地形模型、 案内板、遺跡解説板、展望解説板などの教養施設、およびトイレ、水飲み場などの便益施 設の整備を行い、平成7年度以降、学校教育、社会教育および市民の活用に供する計画で ある。

# 平成4年度確認調査の概要

平成4年度の発掘調査は、整備基本計画作成のための資料収集を目的として行われた。 具体的な目的としては、整備時の遺構平面表示の資料として、過去の調査によって存在の 確認されている遺構のプランを把握すること、昭和47年度発掘グリッドを利用して、屋外



104

展示資料とする貝層断面のはぎ取りを行うこと、整備に係わる工事の掘削による遺構に及 ばす影響の資料を得ることなどであった。

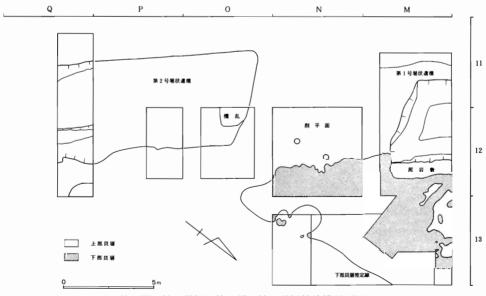
平成4年4月21日から4月22日に、株式会社応用地質に業務委託し、電磁波による地下 レーダー探査を実施し、その解析結果を参考として5月6日から8月31日にかけて発掘調 査を行った。

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居址1基(前期)、炉址1基(後期)、土坑2基、斜面貝層(早期後半、中期末葉~後期初頭)および貝層上のピット群、弥生時代後期~古墳時代前期の竪穴住居址9基、古代末期~中世にかけての堀状遺構2基、近世以降の造成層、方形竪穴状遺構1基、道路状遺構が検出された。現在整理作業中であるため、縄文時代の貝塚と堀状遺構の概要について紹介する。

### 縄文時代の貝塚

検出された貝塚は、従来第 2 貝塚と呼ばれていたものであり、 $H \cdot I 19$ 、 $M \cdot N 12 \cdot 13$  グリッドで検出され、M 12 グリッドにおいて第 1 号堀状遺構と重複していた。また、昭和 53年の発掘調査において、G 13 グリッド付近で検出された貝層は、第 3 貝塚と呼ばれていたものであるが、層序、層相、形成時期を同じくするものであり、第 2 貝塚の北限部分と考えられるものである。第 2 貝塚は、上部貝層群、混貝土層群、混土貝層群、下部貝層群からなっており、調査区内に存在する $O 12 \cdot 13$  グリッド付近に谷頭をもち、北北西に開く埋没谷の傾斜に沿って廃棄された状況で堆積していた。

上部貝層群はM12・13グリッドにその南限があり、G14グリッドにかけての分布をもつ



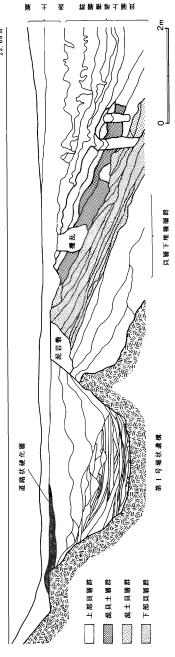
第5図 第2貝塚, 第1号・第2号堀状遺構平面図

ものと考えられ、層厚、面積ともに下部貝層群に比較して小規模であった。上部貝層群は中期末葉から後期初頭の土器群を包含し、後期の包含層に覆われていた。 貝層はイシダタミガイ・スガイ・レイシなどの岩礁性小型巻貝を主体として構成されており、その軟体動物構成種、混土率などから分層された2層の貝層からなる。

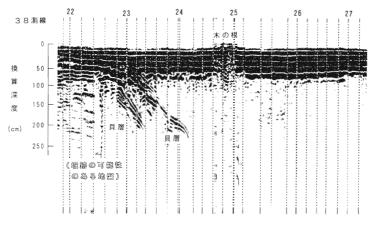
上部貝層群の検出面ないしは貝層中には柱穴状のピット群が検出されたが、これらのピット群は層位的に縄文時代後期の堆積層下あるいは上部貝層群中から掘り込まれており、貝層の形成と密接な関係をもつものと考えられる。また、ピットの断面形態は整然としたものであり、ピットの覆土中に貝殻の混入が認められない。つまり、立木痕などではなく、貝塚形成期間中に人工的な柱状の構築物があった可能性をもっている。

下部貝層群および混土貝層群はO12グリッド付近に その南限が想定され、H・19グリッド、G14グリッド におのおの西限、北限をもって分布しており、第1号 堀状遺構によって一部が壊されている。下部貝層群は 上部貝層群に比べて急な傾斜で堆積しているが、その 検出面の等高線は均等なものではなく、ゆるやかな傾 斜を示す部分と急な傾斜を示す部分とが交互に存在し た。その比較的ゆるやかな傾斜を示す部分には、層厚 の薄い数層の間層をもった混土貝層群が下部貝層上に 不整合に堆積していることが確認された。

下部貝層群および混土貝層群は、早期後半茅山上層 式土器を包含しており、発達の良いマガキを主体とし てハイガイなどの軟体動物種で構成されているもので あった。下部貝層群と混土貝層群とは、混土率が異な る以外に構成する軟体動物種、あるいは出土土器に変 化はない。つまり上部貝層群と下部貝層群とのように 明らかに時間差をもった堆積層としての違いではなく、 下部貝層群とその直上の混土貝層群との異なる層相を 示したふたつの堆積層は堆積構造上の密接な関係をも



第6図 第2貝塚,第1号堀状 遺構土層断面図 (M11~13グリッド北壁)



第7図 地下レーダー探査で検出された貝層と堀状遺構 (第38測線、M11~13グリッド北壁)



第8図 第2貝塚下部 貝層出土垂飾状 貝製品(約¾) (J10グリッド, イモガイ科)

つものであろう。このような堆積構造は、第1貝塚にも認められたも イモガ のであり、吉井貝塚下部貝層の特徴的な堆積構造を示しているものと考えられる。

検出された第2貝塚の概要は上述のようであるが、上部貝層群中に検出されたピット群の性格、下部貝層群で認められた堆積構造の様相などの問題点については、貝層断面のはぎ取りを行った部分で上部貝層群、混貝土層群、混土貝層群、下部貝層群すべてサンプリングを行っており、これらの水洗、分類など整理作業を通して検討したい。

なお、第2貝塚下部貝層(J10グリッド)から南海産であるイモガイを細工した垂飾貝製品が1点発掘されており、大いに注目される。

#### 堀状遺構

 $M11 \cdot 12$ グリッドにおいて第 1 号堀状遺構,O12,P12, $Q11 \cdot 12$ グリッドにおいて第 2 号堀状遺構が,現地形の傾斜面から平坦面に移行する部分にほぼ沿うような位置で検出された。

両堀状遺構の間は基盤層である三浦層群逗子泥岩層まで削平され、かつ8.50 m~8.80 m ほどの幅で土橋状に掘り残されていた。レーダー探査では第1号堀状遺構と考えられた反応はさらに北方に延びており、この結果を援用すれば堀状遺構の存在する平場から西側の高い平場との切岸直下に構築された土橋と堀切り遺構と考えられる。また、土橋は現在の傾斜面と直交せずに、その主軸をずらしているが、これは土橋から北側に存在する埋没谷部分がこれらの遺構構築時に埋まりきらずに浅い谷地形を残していたため、南側の平坦部分に向けられて構築された結果と考えられる。

第1号堀状遺構および第2号堀状遺構は、ともに三浦層群逗子泥岩層まで掘りこまれて 構築されており、その断面形態は「箱薬研堀」を呈していた。また、第1号堀状遺構はそ の東側壁面において第2貝塚と接しているが、その部分の貝層を取り除き、泥岩礫および 粘土と置き換えることによって崩落を防ぐように補強されていた。

第1号堀状遺構の覆土は、大きく最下層の砂質の水平堆積層、泥岩塊を含む粘土質の斜行堆積層、昭和47年の調査で2次堆積の貝層とされた混貝土層、最上層の造成層と考えられる堆積層からなる。草柳卓二氏による火山灰の磁性分析によれば、最下層は12世紀末から13世紀初頭の磁性曲線を示しており、砂質の水平堆積を示す堆積層の層相から堀状遺構が機能していたのは平安末期~鎌倉時代にかけてであり、「源平盛衰記」の怒田城の記載と整合性をもつことになる。また、堀が埋没しきらない時点に混貝土層を覆土とした溝が構築、使用されていたことが考えられるが、最上層の造成層と考えられた堆積層と混貝土層との間で宝永火山灰が検出されており、これら機能時期、廃絶時期なども今後の整理によって明確にされるものと思われる。

縄文時代の貝塚、堀状遺構を中心に検出遺構の概要を述べてきたが、弥生時代から古墳時代にかけての集落址についても時期によって竪穴住居址の主軸方向、規模、形態などに一定の規則性が認められるなどの成果が得られており、今後の整理の進展により「吉井貝塚を中心とした遺跡」の各時期を通して詳細について分析し、整備事業に反映させたい。

## 最後に

神奈川県指定史跡「吉井貝塚を中心とした遺跡」は平成元年度に史跡指定地すべての公 有化が終了したことを受け、平成3年度から平成6年度にかけて4ヵ年計画で横須賀市教 育委員会によって史跡整備事業が行われている。

史跡整備事業は将来にわたっての史跡の保護、継承を目的とするのと同時に現在の市民 の学習の場として活用されなければいけないという両面性をもつものである。また、その 活用についても、史跡地のみの整備にとどまらず、学校教育、社会教育の活動の場として 積極的に利用されるべきであろうし、市民の自主的な活用も期待されるものである。

さらに、横須賀市のように都市化の進んでいる地域では、都市計画の中にこのような指 定史跡だけでなく地域に残される歴史的遺産が積極的に位置づけられ、保護、継承されて いかなければならないのであろう。

「吉井貝塚を中心とした遺跡」の整備事業は、まだ2ヵ年を残してはいるが、たんに史 跡の整備にとどまらない活用を考えていきたい。

# 鎌倉市今小路西遺跡出土の戦国土壙一括資料

清 水 菜 穂

## 1. はじめに

ここに紹介する資料は、平成3年度に実施された今小路西遺跡(御成小学校内)第5次調査時に検出された、中世後期ないし「戦国期」と判断される3基の土壙覆土より各々一括して出土・採取された資料のうち、実測図示しえた瀬戸窯製品・瓦質火鉢・在地産中世土師質土器皿「かわらけ」の各種資料である。鎌倉市域内においては、近年市街地の再開発による事前発掘調査件数の急増に伴い、中世後期(室町・戦国期)の諸遺構・遺物に関する資料も徐々に集積されつつある。しかしながら東国の政治・経済的中心として機能していた中世前期に比較すれば、康正元年(1455)に足利公方が古河に退去した後の鎌倉は、消費都市としては明らかに衰退の一途を辿ることから、必然的に検出される遺構や遺物も寺院址や山城関係等の遺跡を除くと激減してしまうことは衆知の事実であろう。

資料的にやや乏しい現状況下にあって、下記の一括遺物は当該年代の陶磁器・土器様相を検討してゆくに際して、きわめて良好な資料になり得るものと思われることから、すでにまとめられている本遺跡第 $1\sim3$ 次調査の出土資料などともあわせて、その概要を報告させていただきたい。

# 2. 遺跡及び資料出土遺構の概要

調査地は、神奈川県遺跡台帳に鎌倉市今小路西遺跡として登録されている遺跡内の、鎌倉市立御成小学校内(校地南東部分)に位置しており、JR鎌倉駅の南西約300m、東辺を現在の今小路が並走し、西方は鎌倉平野西端を廻る小丘陵の尾根筋にあたる通称御成山に接している。当地域は第三紀凝灰岩による沖積地であり、縄文海進時の潮線帯、及びその後の海退により形成された砂丘の縁辺部にあたる。現在の標高は約8.5m、遺構面は古代・中世ともに5.5~7.0m前後であり、旧地形は東南に緩く傾斜していた。

当該地点においては、昭和59・60年度に第1次~3次にわたる発掘調査が実施され、中世の大規模な武家屋敷跡とその周辺の庶民居住区、古代地方官衙(郡衙)の政庁に比定される遺構群を検出しており、平成元年度には第4次調査として試掘・確認調査が行なわれている。今回の第5次調査は平成3年4月より翌年6月にかけて、前回発掘区の東側に隣

接する約3000㎡を調査したものである。検出された中世前期及び古代遺構の概略に関して
はすでに幾つかの報告がなされており、小稿においては割愛する。

「戦国期」とした遺構群に関しては、中世第1面調査時に確認された諸遺構のうち、その掘り込み面が1面もしくは面上の遺物包含層より明らかに上層からなされているものや、出土遺物が第1面の年代観(14世紀後半代)より確実に新しい様相を示すものがこれに該当するが、主要遺構は以下に述べる3基の土壙のみであった。なお、「戦国土壙」の表現は用語として不適切かとも思われるが、本稿においては大雑把に応仁の乱以降を想定し、15世紀中頃~16世紀代をその対象年代としている。

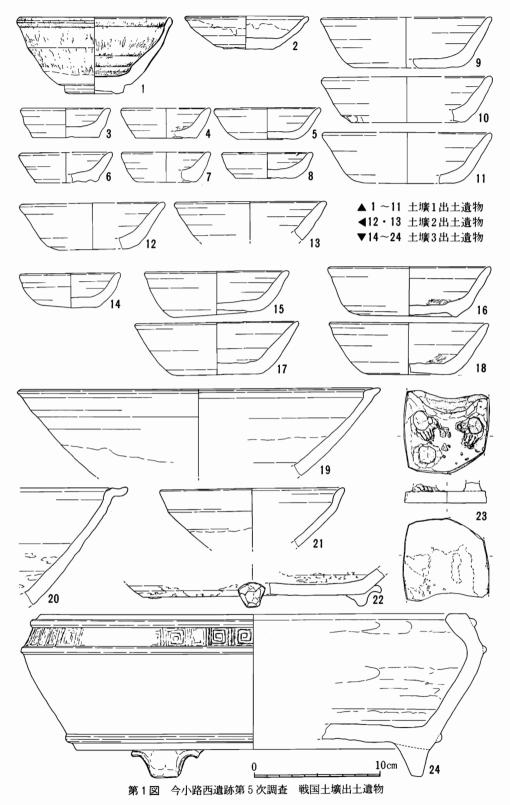
土壙1と2は調査区北西隅の第1面地業層に浅く掘り込むかたちで隣接して検出され、確認面上では1が径80㎝前後、2が約60㎝のほぼ円形を呈する。土壙3は、調査区北部中央付近の第1面上に確認された、いわゆる大型の方形竪穴建築址の西壁際に位置しており、竪穴の一部を切って地業層に深く掘り込む、長円形もしくは隅丸長方形の平面プランを有する土壙で、確認時点では長軸130㎝、短軸90㎝、深さ60㎝前後を測る。出土遺物に関しては、各土壙埋土中のものを全て一括して採取したが、いずれも覆土内に明瞭な層位を区分することはできず、特に問題はないものと判断している。

# 3. 出土資料の検討

第1図-1~11は土壙1より出土した各種遺物である。以下に概観してゆきたい。

1 は瀬戸窯の天目茶碗。破片接合により下半部はほぼ完形に近いが,口縁辺は約1/4 が遺存しているにすぎない。復原実測にもとづく外口径は11.8㎝前後,外底径4.6㎝,器 高6.1㎝を測る。素地は淡灰褐色を呈して比較的緻密。黒色細粒を含み,ガス微孔僅かに 生ずるが粘性は強い。焼成は概ね良好で堅緻といえよう。釉調は青味を帯びた黒褐色で, 口縁部と内底面周囲は禾目様の発色,口縁上端と外面の施釉下端部分は鉄発色を呈する。 釉層は厚く比較的透明度は高い。器面には鈍い光沢が残るが,内面下半には使用時のもの と思われる細かな擦痕が多く認められる。胎土・成形・釉調ともに瀬戸窯の製品としては かなり良質であろう。年代観の詳細に関しては明言し得ないが,概ね古瀬戸後期(15世紀 中頃~後半)の所産と判断される。

2 は同じく瀬戸窯系の鉄釉,縁釉小皿である。上半を一部欠損しているがほぼ完形。外口径9.9㎝,底径3.9㎝,器高2.6㎝前後を測る。素地は灰褐色だが胎芯は淡灰色,器表の露胎部は鉄分によるものか褐色味が強い。黒色および白色の小石粒を多く含みやや粗く硬質。焼成は堅緻である。釉調は黒褐色~黄色味暗褐色を呈し,釉層はごく薄いが失透している。一部に淡灰緑色の降灰もしくは自然釉が認められるものの,再火のためか器面の光沢はほとんど失われている。年代的にはやはり15世紀代(中頃以降?)であろう。



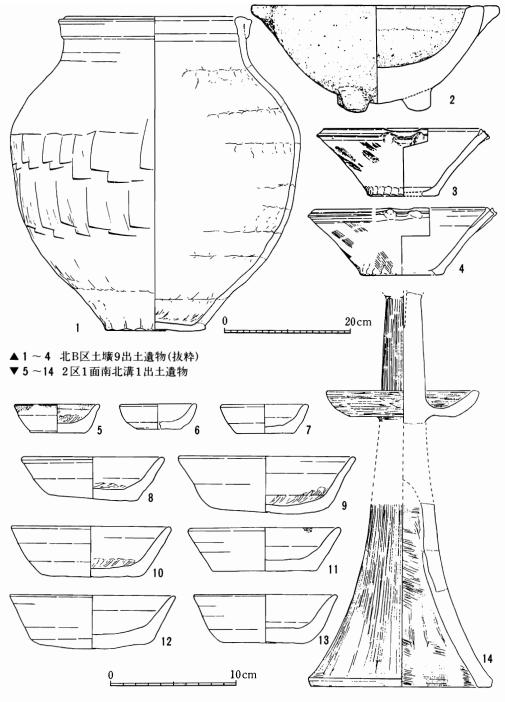
3~18は「かわらけ」である。(3~11は土壙 1, 12と13は土壙 2, 14~18は土壙 3 からの出土資料)いずれも法量的には大中小に区分されるが、各法量間の差異は不明瞭もしくは漸移的であると言えよう。小稿においては便宜上、大皿を外口径12.0㎝以上(9~11, 16~18)、中皿を9.0~12.0㎝(12, 13, 15)、小皿を8.5㎝以下(3~8, 14)とする。但し5と14は中皿と小皿の中間的な形態を呈している。胎土はいずれも粉質で赤色土粒、白色粒、海綿状骨針、細砂粒等を多く含み、粗くもろい。焼成はあまくやや軽い。色調は概ね赤味の強い淡橙色。多くは内底面に粗雑なナデ、外底面には板状の圧痕が認められる。10は外面下辺に箆状工具によるケズリもしくはナデ様の痕跡が残るが、或いはスノコ板(乾燥台)から引き剥がす際の擦痕であろうか。全体に成形および整型は粗雑、簡略化し、厚手で側面観の凹凸は乏しい。体部は概ね直線的に外方へ立ち上がるが、8はやや前代の丸味をとどめ、逆に3、5、12、14、15は口縁端部でさらに外反する傾向を示している。鎌倉の「かわらけ」編年において14世紀代に最も特徴的な形態とされる「薄手丸深」系は皆無であり、胎土・焼成・器形ともに15世紀代から16世紀初頭にかけての、いわゆる「戦国タイプ」としてのまとまりをもつ資料であろう。

19~22は土壙3より出土した瀬戸窯系の灰釉製品である。19は大平鉢,20と22は折縁深皿もしくは鉢,21は平碗と思われる。いずれも小片であり復原実測による口径・傾きには疑問がのこる。素地は概ね灰白色を呈し、白色石粒等ごく僅かに含むが比較的緻密。焼成は良好でよく締まる。釉調は淡灰緑~緑褐色、灰黄緑色と多様。19~21は釉層中に白色不透斑多く生じてほぼ失透する。22は粗雑な刷毛塗りがなされ、内底面の釉は鉄色のかすれが著しい。いずれも使用もしくは再火により器面の光沢は失われている。年代観に関しては、21は14世紀代に遡る可能性があるものの、19や20の口縁形態や22の粘土塊貼付による三脚を有する底部の形態などから、やはり15世紀中頃を中心とする時期の所産と判断されよう。

23は土壙3出土の瀬戸窯産と思われる鉄釉の狛犬もしくは獅子の底部である。一般的には狛犬と考えられるが、前脚の指の形態や台の前辺に円形の剥離痕の認められる点が異形であり、他の動物、例えば猿などの可能性が高い。鎌倉では初出であり、狛犬以外の動物像であれば窯址を含めて全国的にも例は少ないものと思われる。素地は灰褐色を呈し、混入物含まず細かいが粉質。焼成はやや軽い。釉調は赤紫色を帯びた茶褐色で、層薄いが透明感はない。上面から一部側面にかけて施釉され、底面は露胎だが僅かに自然釉が認められる。器面には鈍い光沢が残るものの、焼成不良或いは再火のためか肌荒れが著しく、降灰やはぜた石粒が付着している。前脚の指は左右とも5本で細長く、親指(?)は他の4本から離れてハの字に開いている。犬や獅子よりはやはり猿もしくは人の手に近い観がある。また右脚前方には円柱状の突起物が造形されていた痕跡があるが、何を象ったものかは全く不明である。なお陶製狛犬に関しては、瀬戸窯特産とされ、その初現は洞山窯出土

の灰釉製品で13世紀代後半の年代が与えられているが、鉄釉のものは一般に室町期以降の 所産と理解されている。確実な伝世品で最古のものは名古屋市伊勝神社にある鉄釉の阿吽 一対で,応永二十年(1413)の墨書銘を有する。また灰釉,鉄釉製品ともに狛犬の形態に は数種あり,古期のもの,例えば鹿島神宮伝世品(15世紀初頭前後)などは細身の山犬型, 黄瀬戸に近い新しい時期のものは太い獅子型となり,時代が降るにつれ姿態が崩れるよう である。なお本資料にやや近似した釉調かと思われる瀬戸八幡二号窯出土の資料は15世紀 後半代,同じく菊畑窯のものには15世紀末から16世紀にかけての年代観が与えられている。 24は土壙3より出土した瓦質もしくは瓦器質の火鉢である。数破片から全体の1/3程 度を復元しえたが内底部は殆ど欠損している。復原実測による外口径約34cm, 胴部最大径 37cm, 体部高10.8cm, 器高13cmを測る。胎土は微砂質粘土に赤褐色小礫粒, 白色及び黒色 砂粒,金雲母等を多く含み,かなり粗い。焼成はやや重く硬質である。器面にはおそらく 磨きと炭素吸着がなされるが,再火のためか全面に肌荒れ,剥離が著しく元況をとどめて いない。色調は胎芯一部が暗灰褐色の他は,全体に赤味の強い暗橙褐色,炭素吸着残存部 分,特に内底面は灰黒色となる。形態は浅い鉄鉢型もしくは短胴の樽型を呈し,口縁部は 内方へ水平に肥厚するもしくは張り出す傾向にある。外底部には雲形肘木様の板状三脚が 付くが,脚部に1ヶ所のみ遺存し,剥離した箇所では接着時のものと思われる斜格子の刻 み目(押圧痕)が認められる。外面上辺には2条,下辺には1条の凸帯が廻り,上辺凸帯 間の凹帯部分には雷文が連続押捺されている。偏球状胴部に凸帯と連続スタンプ文を配す る本形態は河野眞知郎氏の分類に拠れば,15世紀以降に出現するE類に比定されるものと 思われるが,氏は「鎌倉の出土量は寺院や城など限られたものにな」り,さらに「茶の湯 の流行に伴う土風炉の普及と軌を一にするもの」であると解釈されている。但し,本資料 は凸帯をもちつつ口縁端部が内側に肥厚しており,氏の分類中F類(無文の短樽胴に水平 口縁を有し、東国では15世紀以降16世紀を中心として出現するとされる一群)との中間形 態とも考えられよう。なお氏はまた「京都・奈良では凸帯をもつものの口縁がすでに内方 へ水平に張り出すようになる」とされており,その系譜下につながる資料である可能性も ある。いずれにしても鎌倉における類品の出土例は多くはなく、凸帯間に小型スタンプ文 を有する資料は裏八幡西谷遺跡や名越・山王堂跡など、無文の偏球状胴部で口縁部が内側 に張り出す形態は鶴岡二十五坊跡、本遺跡の前回調査時など数例にすぎない。

以上,各土壙出土資料を概観してきたが,前述したように鎌倉市域内においては,当該 資料に関する調査もしくは出土事例が少ないために,現時点では個別の詳細な年代観を検 討するには至らず,いずれも概ね15世紀代から16世紀にかけてという表現にとどまらざる を得ないであろう。



第2図 今小路西遺跡第1~3次調査 戦国遺構出土遺物

## 4. 前回調査時出土資料との比較検討

当該地点、今小路西遺跡(御成小学校内)の第1~3次調査においては、やはり戦国期(15世紀中葉~16世紀)と判断される土壙や溝状遺構が検出されており、各種の遺物が出土している。詳細は報告書に拠られたいが、そのうちの幾つかを比較資料として、ここで若干紹介させていただくことにしたい。(第2図)

1~4 は北B区土壙9出土資料の一部である。1 は常滑窯の大甕。肩部は角張らず、口縁の縁帯部分が大きく発達して体部壁と完全に密着している。同窯の編年案に拠れば15世紀後半代(1450年以降)、大甕最終末期の形態と判断されよう。2 は多孔質安山岩製とされる石鉢である。半球形を呈し外底部の3ヶ所に円脚を有する。口縁部は一部欠損しているが、水平方向に張り出す把手とおそらくその対面に片口を施したものとされている。鎌倉においては14世紀後半以降16世紀にかけて、少量ながら石鉢或いは石臼の出土例があり、例えば建長寺境内遺跡(昭和61年調査)においては、第VI期第3溝覆土上層より本資料と近似した石材、形態の石鉢口縁部片が出土している。(但し当該遺構の年代観は16世紀代とのことである。)3と4は常滑窯の捏ね鉢である。いずれも口縁端部が角型に張り、さらに両端が外方へ突出する傾向にある。同窯編年案においてはやはり15世紀後半代に位置づけられる資料であると言えよう。

5~14は2区1面上で検出された、上層(戦国期)の南北溝1より出土した資料である。5~13は「かわらけ」で、報告書によれは「粉っぽい胎土で、焼成もあまり良くな」く、深く丸味のある前代の側面観を若干とどめていると思われる資料6を除いては、いずれも「口縁に外反傾向を見せ、厚いつくりで、内底のナデが2~3回にまで簡略化されている」との観察がなされており、先に述べた第5次調査の土壙1~3出土資料とほぼ同類、同形態と判断することができよう。14は瓦器質の燭台である。器面は炭素吸着により黒灰色ないし青黒色を呈し、軸部には縦位の、受皿部には横位の細かな磨きが施されている。本遺跡においてはその類品として前掲した北B区土壙9、及び南谷屋敷地区1B面上より(上層からの混入品と解釈されるが)脚部片が各1点ずつ出土しているが、これら3点(当遺跡地)以外の鎌倉における出土例は殆ど確認できていない。河野氏の分類に拠れば本資料は「瓦器質異形品-G類」として、ごく少量ながら先に触れたF類と共伴する傾向にあるとされている。

以上,各種遺物の形態や年代観等を考慮すると,これら前回調査時の資料と先に挙げた 第5次調査時の土壙一括遺物とは,概ね同時期の資料として把握することができよう。

## 5. おわりに

小稿においては今小路西遺跡における「戦国期」の出土資料に関して、簡略な紹介をおこなったものである。同遺跡地内ではあるが100~150m前後の距離を隔てた数地点から、ある程度のまとまりをもつ遺構群と遺物が検出された事実は、明瞭な建物遺構は確認できていないものの、当該地域が中世前期のみならず後期に到っても、居住もしくは生活空間として存続していたことを意味していよう。無論町割や居住形態、人口等にかなりの変動があったことは十分考慮すべきであるが、現時点での詳細な検討は不可能と言わざるを得ない。すでに述べたように鎌倉市域内における当該年代の資料は量的に未だ十分でなく、年代観を含めて詳細な検討には至らず雑駁な内容に終始した。今後の資料増加を待って、「戦国期」の鎌倉における諸様相-「かわらけ」の細分類および編年化を中心として、常滑窯や瀬戸窯製品の器種構成、在地産とされる火鉢類や各種瓦器質製品との共伴関係等に関して再検討したいと考えている。先学諸兄の御叱正、御教示を仰ぐ次第である。

なお小稿作成にあたっては今小路西遺跡第5次発掘調査団より幾多の御協力を賜った。 末筆ながら記して感謝申しあげたい。

#### 註•引用文献

- (1) 河野眞知郎 1992 「鎌倉市今小路西遺跡(御成小学校内)『第16回神奈川県遺跡調査・研究発 表会 発表要旨』神奈川県考古学会
  - 宮田 真 1992 「今小路西遺跡の調査」『第2回鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』 鎌倉考古学研究所
  - 清水 菜穂 1991 「今小路西遺跡の調査」『鎌倉考古』No.20鎌倉考古学研究所
  - 清水 菜穂 1992 「今小路西遺跡の調査 | 『鎌倉考古』 No.21鎌倉考古学研究所
- (2) 楢崎 彰一 1977 「瀬戸鉄釉狛犬」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館
- (3) 河野眞知郎 1992 「鎌倉の搬入土器と在地土器」『中近世土器の基礎研究**』** 日本中世土器研究会
- (4) 1981 「裏八幡宮西谷遺跡」『神奈川県埋蔵文化財センター調査報告書』
- (5) 1990 『名越・山王堂跡発掘調査報告書』山王堂跡発掘調査団
- (6) 大三輪龍彦 1967 『伝鶴岡廿五坊址の発掘』
- (7) 1990 『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- (8) 中野 晴久 1992 「常滑窯」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸窯検討のための 「会津シンポジウム」発表資料
- (9) 1991 『巨福山建長寺境内遺跡』建長寺境内遺跡発掘調査団
- (10) 註(7) P.18
- (11) 註(3) P.161

執筆者紹介 麻 生 順 司 玉川文化財研究所

持 田 春 吉 川崎考古学研究所

村 田 文 夫 川崎市市民ミュージアム

河 野 眞知郎 鶴見大学助教授

諏訪間 順 小田原市教育委員会

野 内 秀 明 横須賀市教育委員会

清 水 菜 穂 鎌倉考古学研究所

目次英訳 中井 さやか

## 『考古論叢 神奈河』の寄稿要綱

- 1. 神奈川県考古学会の学術研究会誌として『考古論叢 神奈河』を刊行する。
- 2. 発行は,年1回とする。
- 3. 会誌の内容は、原則的には神奈川県及びそれに関連する主題についての論文、資料・研究ノート等の発表の場とする。
- 4. 原稿の採否等,編集・刊行上の業務は,編集委員会を設け,そこで実施する。
- 5. 会誌に寄稿することができる者は、次のとおりとする。
  - (1) 神奈川県考古学会の会員。
  - (2) 編集委員会から調査・研究上に必要があって寄稿の依頼がなされた者。
  - (3) その他,編集委員会で適当と認めた者。
- 6. 寄稿する原稿の枚数は、原則として制限しない。ただし、編集委員会の判断で、紙数等の関係から分割して掲載することもありうる。
- 7. 原稿料金の支払い,掲載料金の徴収は行わない。

### 考古論叢 神奈河 第2集

平成 5 年 4 月17日 印刷 平成 5 年 4 月18日 発行

編集•発行 神奈川県考古学会

事 務 局 東海大学文学部考古学研究室内

〒259-12 平塚市北金目1117 郵便振替 横浜 4-71208

神奈川県考古学会

# KOKO-RONSO KANAGAWA vol.2

## CONTENTS

**Articles** 

Junji ASO Point Culture Dated from Final Pre-pottery Period

to the Beginning of Initial Jomon Period

-The Status of Kazama Ia Stone Tool Cultural

Strata-

Harukichi MOCHIDA,

Fumio MURATA

Kuji-iyanome Kofun and Kokuuzo-yama Kofun

 A Historical Sketch of Kofuns of Early Kofun Period, with a Pit-style Chamber for Wooden

Split-long Type Coffin—

Shinjiro KAWANO A Study on Brazier of Middle Age, Kamakura

-Its Relationship with Eastern Area of Japan-

Jun SUWAMA An Aspect of Ceramics in Odawara Castle, from

Late Sengoku to Early Edo Period

Information on the Site Reservations

Hideaki YANAI Reservation of "Yoshii Shell Mound and Its

Neighboring Sites", a Historical Site of Kanagawa

**Research and Note** 

Naho SHIMIZU Artifacts Recovered from a Pit of Sengoku Period

in Imakoji-Nishi site, Kamakura

1993.4